

e-FICTIONS
ダンガンロンパ
DANGANRONPA
TOGAMI
世界征服未遂常習犯
上
十神
yuya sato
佐藤友哉
Illustration 高河ゆん
SEIKAISHA

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

星海社
FICTIONS

ダンガンロンパ十神（上）
世界征服未遂常習犯

佐藤友哉

Illustration／高河ゆん

星海社

ダンガンロンパ十神 上

DANGANRONPA TOGAMI

世界征服未遂常習犯

C O N T E N T S

銃から発射された「弾丸」部分の再利用はできない。

（大波篤司／図解ハンドウェポン）

本テキストを書くにあたり、次の筆記システムを使用した。

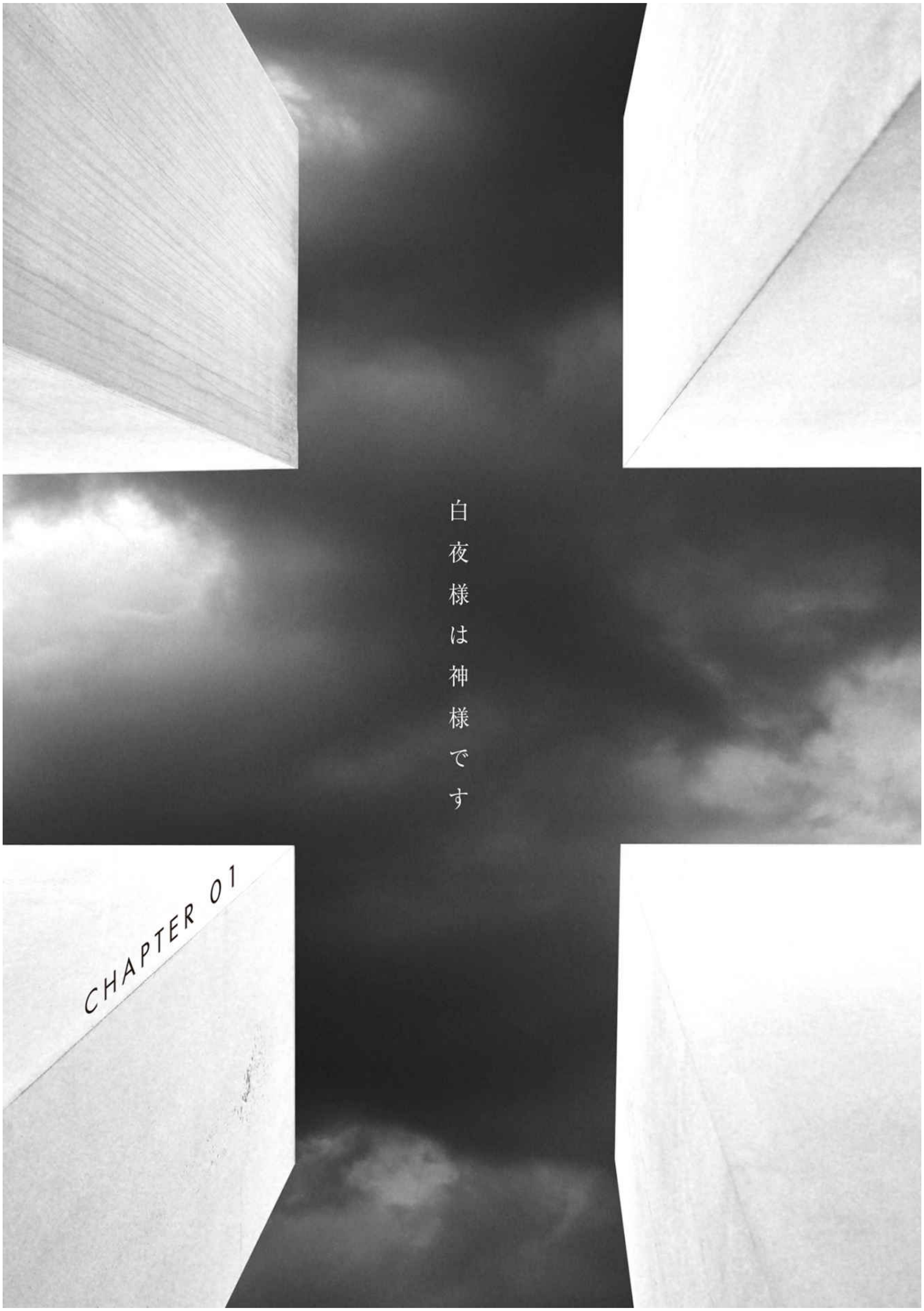
k2k-system ver2.3

混物（まぜもの）。偽物（にせもの）。紛物（まがいもの）。写本の写本がはびこる世界で、よく耐えていると思う。システムの堅牢さと生真面目（きまじめ）さには舌を巻くしかない。

そんなわけなので、僕の仕事といえば、ちょっとした添削くらいだ。身のほどはわきまえている。古英語詩を台無しにした筆写僧（ひっしゃそう）どもの仲間入りをする気はない。

はじまり（オリジン）の魂に幸あれ。

あるとすればの話だが。


白夜様は神様です
CHAPTER 01

1

お話は簡単です。ひとりの青年が世界征服をしようとしました。
青年はなみはずれた冒険をかさねたすえに、自分のほしいものを手に入れ、無事に帰ることができました。めでたしめでたし。
問題は、そこに至るまでの過程です。

2

骸骨（がいこつ）教会から流れる『世界征服宣言』を、私は路地裏（ろじうら）で聞いていました。
かたいパンをかじりながら。

黒船の空砲を聞く役人たちも、墜落するブラックホークの無線を聞く隊員たちも、こんな気分だったのでしょう。あの王女様なら、『ガッデム！　このドチクショウが！』と、お上品に叫んだことでしょう。

私には、やるべきことがありました。

あのひとを観察し、描写しなければなりませんでした。

私は『書く』という動詞そのもの。

私は『書く』という行為そのもの。

執筆機械。文章人形。だとしても。

だとしても。と、無数の思考が押し寄せてきて、自分の顔が紅潮するのがわかります。

あのひとは、うばわれてしまった。

名前を。
身分を。
さらには、だめ押しのように服まで取られて眠っています。
生まれたままの姿で。
私の隣で。
それってつまり。
今この瞬間、あのひとの存在を知っているのは、世界で私だけ？
あのひとを独占している？
この事実に、気づいてしまいます。
そんなわけなので、世界にはパンの味だけ教えるとしましょう。くっそまずい。

3

飛行機の乗っとり。会社の乗っとり。最近では家族の乗っとりもありましたが、あのひとが乗っとられたのは、個人でした。

4

『世界征服宣言』が終わった直後、いくつものヘリコプターが空を舞います。

百塔の街に飛び交う、鉄の羽虫。

やつの手先でしょうか。

チェコ政府によるものでしょうか。

ボルヘスを使えばヘリの特定はできますが、どうせ世界中から狙わ

れているわけですから、しらべる意味もないでしょう。
世界はこんなにも広いのに、頼れるのはおたがいだけ。

「白夜様」

私はついに、その名を口にしました。
主人公の登場まで時間がかかったのはみとめます。大変お待たせしました。
でも、どうかお察しください。
『超高校級の御曹司』『巨大財閥の跡取り』『十神一族最大の刃』『個人資産四百億』『歩く才能』『歩く帝王学』『歩く眼鏡』という金メダルを強奪されて、素っ裸になったあのひとを、表に引きずり出

したくなかったのです。
目を覚ました白夜様は、私の心配をよそに、ただ美しく存在していました。
木箱に腰かけ、恥ずかしげもなく裸体を見せつけるその姿は、ローマ美術の彫刻を連想させます。
麦穂のような髪は艶（つや）やか。
肌は白磁（はくじ）のごとく滑らか。
眼鏡にふれる指まで完璧。
十神白夜は、百点満点でした。
すべてをうしなっても、気品があふれるだけあふれていました。
「白夜様。おかげんはよろしいですか」
「何ひとつ問題ない」声までも美しく。「なぜ俺は全裸で寝ていた。

説明しろ」
「骸骨教会が襲撃（しゅうげき）を受けました。白夜様はその際に気をうしない、私は白夜様を背負って路地へと逃げこみ、現在に至ります。これをどうぞ」
「なんだこの物体は」
「タオルです」
「貴様は馬鹿の子か。それくらい見ればわかる」
「タオルと、私が食べているパンは、町の人が恵んでくださいました」
「そいつを見つけ出せ」
「殺すのですか？」
「城をあたえろ」白夜様はタオルを腰に巻きます。「襲撃者の正体は

判明しているのか」
「不明ですが、その……」
「俺の許可なく云いよどむな」
「その、どうやら襲撃者は、白夜様とすり替わってしまったようなのです」
「すり替わった？　唯一無二の、この十神白夜と？　貴様も、おもしろい冗談を云えるようになったものだな」
白夜様はいつもするように、眼鏡のフレームを指で押し上げました。
おっと訂正。
さきほどはつい興奮して『生まれたままの姿』と描写しましたが、眼鏡だけは無事でした。あと『歩く眼鏡』という通り名も全然ほめていないので訂正。

どうやら私も、本調子ではないようです。
早く復活しなくっちゃ。
大役があるのですから。
『信長公記』や『太閤記』と肩をならべる伝記を作成する。
それが私の存在理由。
伝記のタイトルは、『白夜行』です。

パクってないよ！
「おもしろい冗談か……。そうだな。たしかにこれは冗談だ。おもしろい冗談だ」白夜様は自分の言葉に刺激を受けたらしく、何度もうなずきます。「今回のできごとは、『白夜行』の中でもきわめて重要な

位置を占めるだろう。なぜなら俺の、生涯ただ一度の奪回戦となるからだ。生涯ただ一度の逆境となるからだ。そんなものは、おもしろいに決まっているじゃないか。愉快だ。爽快(そうかい)だ」

クク。

ククク。

笑っておられます。

骨のあるゲームに出会えたとでもいうように。

まだ潰(つぶ)していない蛙(かえる)を見つけた子供のように。

美々(びび)しい風景。

神々しい光景。

白夜様は神様です。

この印象を忘れないうちに記録しておこうと、私は愛用の万年筆とともに、つねに持ち歩いている一冊の本を取り出しました。
『白夜行』です。
真っ白の紙に、ブルーブラックのインクが染みこむほどに、白夜様の華麗なる記録が完成に近づきます。私は幸福の中で万年筆を走らせました。
「フン。さっそく書いているようだな。あっぱれだよ。さすがは俺の所有物。さすがは俺の『青インク』」
「おほめにあずかり光栄至極です」
「情感たっぷりに、大仰に、だがしつこくなく、いやらしくなく、センチメンタルに浸ることもなく、クールな文章を心がけろ。俺は必ずこの事件を解決してみせる。そう……」

の事件を解決[illegible]」

「十神の名にかけて」

5

ボルヘス＝履歴参照
＃０１１０２８１５
タイトル『世界征服宣言』

こんばんは（ドブリーヴェチェル）。
金も才能も時間もない貴様らに、ひとつ聞きたいことがある。何が楽しくて生きているんだ？

が楽しくて生きているんだ？

俺は十神白夜。

そう。『超高校級の御曹司』だ。

十神家の御曹司として、その将来を期待されている唯一存在だ。

貴様らとは月とテナガザルくらいかけ離れている圧倒的存在だ。

欲求不満のテナガザルどもに、ひとつ聞きたいことがある。何が楽しくて生きているんだ？

自分の価値がゼロなのを自覚しながら生きるというのは、俺には見当もつかんが、耐えられないだろうな。

だからクラスメイトをいじめる。隣人の新車を嫉(ねた)む。優秀な部下を潰す。未来ある子供を殺す。才能の不平等に怒る。

そして世界を褻す。

ピアノがうまくひけなくて、癇癪を起こしたことはあるか？
サッカーのレギュラーになれなくて、ママの胸で泣いたことはあるか？
貴様らはそこから、一歩も進んじゃいない。ベイビーちゃんというわけだ。その長い手足は飾りだ。成長しなければならない。
問おう。
成長に不可欠なものとはなんだ？
敵だ。
打倒し、攻略すべき、強大な敵だ。
俺が『世界の敵』になってやる。

この十神白夜が、貴様らの敵になってやると云っているんだ。幸福にむせび泣くがいい。

では本題。

これは『世界征服宣言』だ。

今から二十四時間以内に俺を殺すか、この世のどこかにいる『かわいそうな牛』を見つけ出せ。

ひとつでも達成できた者には、十神白夜の権利をすべて譲(ゆず)ろう。放蕩(ほうとう)生活をするのもよし。核を買うのもよし。理想郷を創るのもよし。その権力を、財力を、好きなように使い潰すがいい。

だが、二十四時間以内にどちらも達成できなかった場合は、貴様らの価値を本当にゼロと見なし、俺がこの世界を征服する。支配して、陵辱(りょうじょく)して、踏み潰す。

これから本気であることを証明しよう。

これから本気であることを証明しよう
十神の名にかけて。
それでは。
さようなら（ナスフレダノウ）。

6

「そっくりです」
再生したそれは、私にも聞き分けがつきません。
「ほれぼれする美声だ」一応断っておきますと、白夜様は真顔です。
「こいつが俺のすべてを盗み、すり替わったニセモノか。たしかに声の再現力は高い」
「高いというか、同じですよね」

[illegible]

「しかし演説の内容は三流だ。こんなものが俺の発言として世界中に流れたかと思うと、絶望したくなる」

「そうですか？　まさに十神白夜という感じでしたが」

「なんだと」

「……え？」

「貴様は今まで、俺の何を見てきた。そのていどの観察眼しかない無能に、『白夜行』を書いてもらうわけにはいかない。『青インク』の名を返上したらどうだ」

「も、もうしわけありません」

なんか私、怒られています。

「『世界征服宣言』など、世界に負けている人間がやることだ。欲求不満な敗残者ほど、世界を手中におさめたがる」

大演大賢者は、世界を手中にできるのだから」

「そういえば、他人を煽（あお）る感じの演説ではありますね」

「グズは自分以上のグズを見ると、たまらなく興奮するからな」

「おそろしい症状です」

「俺のニセモノは、相当な劣等感を持っていると推測できる。世界から無視され、箸（はし）にも棒にもかからない人生を送ってきたに違いない。だからこそ、あんな負け犬じみた宣言ができるわけだ」

「呼吸をするように他人を否定しますね。では白夜様は、世界征服はしないと？」

「貴様はパンを食べるとき、『これからパンを食べます』といちいち云うのか？　やろうと思えばいつでもできることを宣言する必要はない」

「白夜様はまっすぐ屈折してますね」

「『かわいそうな牛』とはなんのことだ」
「一切不明です。ただ……」
「俺の許可なく云いよどむな」
「心当たりはあります」
「奇遇だな。俺もある。『アレ』のことだろうか」
「かりにそうだとしても、なぜ白夜様のニセモノを名乗る人物が、『アレ』を知っているのでしょうか」
「フン。推理してやることはない。つかまえて、直接聞けばすむことだ。違うか？」
「おっしゃる通りです」
「このくだらん演説が流れたのはいつだ」
「一時間ほど前、午後六時ちょうどです。リミットは、明日の午後六時ですから、時間はあまり……」

時ですから、時間はありません……」
「余裕だな」
「はい？」
「日本とチェコの時差はマイナス七時間。ニセモノの正体をあばいて俺の潔白を証明し、帰国してからティータイムを堪能するには、じゅうぶんな時間がある。そして月曜日には登校だ」
私たちは土日の休みを利用して、プラハにきていました。
例の学園に在籍しているとはいえ、多忙をきわめる白夜様が律儀に登校する必要はないと思うのですが、『無遅刻無欠席くらい当然だ。十神の名にかけて』とか云って、毎日しっかり通っているのです。
「白夜様。月曜日に間に合わなくても、『白夜行』にはありのままを書きますからね。サービスはしませんよ」
私は絶技をかけるつもりで云い、[illegible]。

私に発破をかけるつもりで云いました

なのに白夜様は、苛立(いらだ)ちのこもった目でこちらを睨(にら)んでおります。

「俺を愚弄(ぐろう)しているのか。ニセモノごときに手こずるとでもいうのか」

「そんなつもりは」

「この際だから云っておく。貴様には、生意気なところがあるぞ。ちょっと年上だからといって……」

突風。

なまぬるい風が路地を吹き抜けます。

乱れた前髪を直そうとしたとき、

轟音(ごうおん)。

天の底が裂けました。
地面が振動し、プラハ名物の石畳（いしだたみ）が、ぼこぼこと隆起します。
遠くの空に見えるのは、黒煙。
「フン。己の力を客観的に見る機会はあまりないが、自己嫌悪におちいるほどのショボさだ」
こうして、私たちの絶望的な二十四時間が開始しました。

7

絶望しているひまはありません。
一台の装甲車が、まだ揺れている路地裏を突き抜けてきました。
木箱に悠々と腰かけている白夜様を守るため、私は路地をふさぐよ

うにして立ちはだかります。

効果があったかどうかはわかりませんが、私の前方五メートルといったところで、装甲車は停まりました。

天井のハッチが開き、悪い冗談のように武装した兵士が次々に飛び出すと、いかにもな緑色（グリーンカラー）の装甲車から出てくるには、あまりに可憐な少女が最後に登場しました。

血管が透けるほどに白い肌。

高貴と高貴と高貴の浮かぶ瞳（ひとみ）。

不穏な風にも優雅に靡（なび）く金の髪。

ノヴォセリック王国のプリンセス。

『超高校級の王女』。

ソニア・ネヴァーマインド。
「お控えなすって！」ソニア王女は装甲車の上に美しく立つと、私たちをびしっと指差しました。「見つけましたよ十神さん。お縄ちょうだいのお茶の子さいさい」
「おい馬鹿王女。今の衝撃はなんだ」
「ご自分で指示しておいて、よくもそのような……まあ！　なんとハレンチ学園なお姿なのですか！」ソニア王女はあわてて両目をふさぎます。「と、十神さん、お気づきになっていないかもしれませんが、パンツ一丁ですよ」
「これはタオルだ。パンツではないので恥ずかしくはない」
「タオルで股ぐらを隠す……。これが日本男児なのですね。高倉健なのですね。今日も降りますドスの雨！」
「ふつふに答えう」

「さっさと答えて」

「十神財閥の所有する人工衛星が、地中海のどこかの島に落下したという報告があります」

「シケた攻撃と標的だ。どうせ島なら、イギリスを狙えばいいものを。あのおぞましい鰻（うなぎ）ゼリーを撲滅（ぼくめつ）できるチャンスだったのに」

「ソニアさん。これはその、誤解なの」

私はあわてて弁明します。

「まあ『青インク』さん、ごきげんよう」ソニア王女は笑顔のまま、いつものように私をコードネームで呼びました。「もしかして共犯ですか？」

「おねがい聞いて」

「問答無用と言いたいところですが、同級生のよしみです。くるしゅ

「問答無用と云いたいところですが、同級生のよしみです。くるしゅうない。お話しください」

「罠（わな）にはめられて」

「罠。どなたの？」

「まだわからないけど、白夜様の名前が、権力が、根こそぎうばわれちゃって」

「ずいぶんな大泥棒さんですね。ジャケットの色は赤でしたか？　緑でしたか？」

「さっきの『世界征服宣言』はニセモノのしわざで、ここにいるのが本物の白夜様なの。そりゃ眼鏡にタオルなんて、ちょっと引くような変態スタイルだけど……」

「貴様、今いらぬことを云わなかったか」

「わたくし、『青インク』さんを疑いたくはありませんが、『世界征

服宣言』の声紋パターンは、十祥さん本人と一致していました。それとも、石田彰さんが複数いるとでも？」
「馬鹿王女、声紋確認とは準備がいいじゃないか」
「準備？」
「貴様、なぜ骸骨教会にこなかった」
「え」
「『世界の選択を選択する会』の会議に出席しなかったのは、どういうわけだ」
「それはその。そこはそれ」
露骨に乱れたソニア王女は、必要もないのに頭のリボンに手をやりました。
[illegible]

機密性の高い集まりを襲撃されたのだから、疑うのは内部犯だ。そうなると、『遅れてきた人物』である貴様が、もっとも怪しい。さあ答えてくれよ。どこで何をしていた」
「も、もしかして逆転裁判ですか？」
「メーカーを慮（おもんぱか）った発言をしろ」
「えっと、その……。みなさーん、十神さんをやっつけちゃってください！」
ソニア王女。逃げやがりました。
いくつもの銃口が向けられます。

殺意が急激に充満。
むせかえるほどに。
こちらは『超高校級の書記』と『超高校級の御曹司』というスペシ

ャルな設定ではありますが、活劇タイプではありません。彼らが引き金に力をこめた瞬間、間違いなく蜂の巣になるでしょう。
逃げようにも、前方には兵士と装甲車。
後方には……。
後方？
うなるようなエンジン音とともに、黒塗りのメルセデス・ベンツが迫ってくるではありませんか。
猛スピードで走るメルセデスの後部ドアが開き、少女が飛び出しました。
赤い髪が特徴的な、おっぱいの大きな少女。
「いっただきいぃぃぃぃぃぃぃぃぃ……」

そして、腰を低く落としたかと思うと、
「まああああああああああああすっ！」
私と白夜様を飛び越えて、兵士たちに襲（おそ）いかかりました。
不意の襲撃に混乱した兵士たちは、それでも射殺しようと狙いをつけますが、女の子はそれより早く打撃をくわえて、次々に倒していきます。
得物はなんとエレキギター。
私はいつもの癖で、そんなひまもないのに、こめかみに指を置きます。

ボルヘス＝検索結果
＃８３３０２１９１

項目　楽器

タイトル『ギブソン・エクスプローラー（エルボーカット）』

エリック・クラプトンが使用していたギター。

一九五八年に発売されたエクスプローラーのボディエンド部が大胆にカットされ、その斬新なルックスが反響を呼ぶ。

現在はカスタムショップが限定再現したリミテッド・モデルが発売されている。価格は六十五万七千円。

メルセデスは、いつのまにか私たちに横づけしていました。

運転席の窓が開きます。

「坊ちゃーん！　乗るかい？」

運転席の男は、どうしてそうなのかは知りませんが、最高に楽しそうでした。

選択の余地なし。

私たちが車内に飛びこむと、メルセデスはふたたび加速。

兵士たちはたまらず車線から離れます。

メルセデスは装甲車の横ぎりぎりを攻めて、狭い路地を突き抜けました。

銃撃に混じって、ソニア王女の声が聞こえます。

「ガッデム！　このドチクショウが！」

8

ーネタとしては使い古されてるけど、それに代わるもんがないから仕方なく使うとして……村上春樹の登場人物風に云うとすれば、『やれやれ』って感じだね。あっ、ジョジョでも可か」

運転席の男は、中身のない言葉をえんえんと喋っています。

助手席の少女は、能面（のうめん）のような表情を浮かべたまま無反応。

どちらも、私たちと同じくらいの年齢に見えました。

「いやあ気持ちがいいねえ。プラハを走るにはメルセデスって相場が決まってるデスからね。黒いメルセデスは縁起が悪いデスけどね。あはは。ガタガタ道おもしろいー。舌かむー。ところでどうだい、飲まないかい。お近づきのしるし。飲酒運転は二十歳になってから」

男はふり返ると、一本の小瓶（こびん）を取り出しました。

「ピルスナー・ウルケルか」

白夜様は小瓶に手をのばしました。

「わかるかい？　かの総統閣下が、ふだんは蛇蝎のごとく嫌っているアルコール飲料を、ここプラハで召し上がられた。チェコを征服した当日にね。その記念すべきビールが、ピルスナー・ウルケルってわけさ」

「皮肉のつもりだとしたら殺すぞ」

「メッソーもございません。僕はね、格上の財閥相手には、ケツ舐め土下座外交をすると決めてるんだから」

「財閥？」

私はつい口をはさみます。

「祁答院財閥……と云ったら、何か反応してくれるかな？」

「初耳です」

「いいさ。かの十神財閥から見れば、僕のところなんて虫カゴ以下だからね。あときみかわいいね」男はうしろを向いたまま運転をつづけています。「僕はかわいい子に目がなくてね。腕や首に虫ピンをプスプスするのが趣味なんだ」

「あの、ちゃんと運転してください」

「これがホントの採集兵器！」

「死んでほしいなあ……」

「お嬢さん、きみの瞳孔の収縮具合をチェックすれば、前方の情況が察知できるわけだ。きみをずっと見つめたまま、スカンジナビア半島まで行けるって寸法さ」

「『フィヨルドの恋人』になる気はありませんから」

私は関係を断ち切るように云いました。
これほど短時間で他人を嫌いになったのは、ひさしぶりです。
「祁答院財閥。聞き覚えがある」
白夜様がつぶやきます。
「さすが坊ちゃん！　カバンを持たせてください！　草履(ぞうり)とおにぎりもあたためますか？」
「一般的な財閥とは一線を画した、『裏財閥』と呼ばれる連中がいるようだが、祁答院財閥はその筆頭だな。裏財閥と会うのは、この俺ですらはじめてだが」
「うわ……僕の設定、寒すぎ？　裏財閥ってセンスやばいですよ。伏線を回収できない感じがビンビンでくすぐったいですよ。ちょっと背中を掻(か)いてくれませんか？」
「貴様は、祁答院財閥の者か」

「ねえ坊ちゃん、よくもまあそんな古代ローマ人みたいな恰好（かっこう）で、まじめなことを語れるもんですね」

「すべてが終わったら、個人的に衛星を落としてやろう」

「光栄のきわみですな。僕は祁答院財閥現当主、祁答院旗清（はたきよ）の孫、浩之（ひろゆき）。で、こちらは双子の姉の」

「唯香（ゆいか）ともうします」

　助手席の少女はスローロリスのような速度でふり返ると、スズメの羽音よりも小さな声で挨拶しました。

　その顔は、ぞっとするほど整っていましたが、やはり能面のように表情がありません。

「姉と弟。ナイスコンビじゃない？」浩之と名乗った男は、あいかわらずうしろを向いたまま運転しています。「さてさて。自己紹介も終

わったから物語を進めましょ」
「物語だと」
「やってくれたもんだね。『世界征服宣言』だってさ。最近じゃ、ドラクエのラスボスだってそこまではっきり云わないよ」
「あの『宣言』は俺ではない」
「知ってる」意外な返答。「坊ちゃんはハメられた。でもね、僕はそこに興味ないんだな。僕が興味津々なのは牛なんだな」
「何が云いたい」
「坊ちゃんは、『十神一族の繁栄（はんえい）の秘密』をごぞんじ？」
次の瞬間。

白夜様が手にしたビール瓶の栓が抜け、車内の天井に突き刺さりました。
「俺がそれを知っていたとして……答えると思うか？」
白夜様は笑っていました。
「へー。坊ちゃんは指で栓を開けられるのか。急なパーティのときに大助かりだなあ」浩之さんも笑顔。「答えてくれるとは思ってませんよ。そんな簡単に話が進んだら、サイコもポップもありゃしませんよ。でもね、僕はきみたちの窮地を救ったんだから、ヒントくらいもらえないかな。ケチは出世しないぜ。あんまりケチなら、このまま民衆のもとに突き出したっていいんだぜ」
「それで終わりか？　脅しにもなっていない」
「悪役は苦手なのですにゃあ」

「つまらんな。死にぞこないのハーハ大統領を気絶させた、ゲーリングとリッベントロップを見習うがいい」

「いいねえ坊ちゃん。チェコならではの爆笑ジョーク。クルテク君もびっくり」

「あ？」

「気にしないで。庶民の嗜みですにゃあ」

「貴様、楽しそうだな」

「坊ちゃんこそゴキゲンじゃありませんか。ささ、ピルスナー・ウルケルをご賞味あれ」

「『十神一族の繁栄の秘密』は、何があろうと口を割らんぞ。十神の名にかけて」

白夜様はビールの小瓶を掲げると、そのまま浩之さんの頭にぶちまけました。

クク。

ククク。

残忍な笑顔。

たぶん、ちょっと、牛の話でキレたのでしょうね。

「乾杯（ナズドラヴィー）」

9

ビールまみれの浩之さんにハンドル操作ができるわけもなく、メルセデスは何度も大きく揺れました。

そのとき。

暴走するメルセデスの前に人影が！

コントロールをうしなったメルセデスは人影に突っこんで。
衝撃が。衝撃が。衝撃が……いつまでたってもやってきません。
そっと抱きとめられた少女のように、ふかふかの布団に落下した卵のように、一切の衝撃がありません。
どうして？
「脇見運転は推奨（すいしょう）できぬ。もう少しで……車が粉々になるところであったぞ」
その人影は、メルセデスを受け止めていました。
片手で。
フロントガラス越しに映る、規格外の存在。
あっさりと車を受け止める、想定外の物体。
セーラー服からのびる褐色の手脚には、完璧すぎる筋肉がそなわっ

ています。
白く長い髪は覇気によってたゆたい、瞳には頂点捕食者の余裕が観測できました。
身長192センチメートル。
胸囲130センチメートル。
霊長類ヒト科最強の生物。
『超高校級の格闘家』。
大神(おおがみ)さくら。
「うはは~マジすか！　アクセル踏んでるのに、ちっとも動かないよ」浩之さんはビールまみれの顔をぬぐいました。「ミステリかと思ったらSFだった。って話は今や普通だけど、これはどうなの。さす

がに世界観おかしくない？　作画崩壊しすぎじゃない？　出演作を間違えてない？」

「出演作を間違えているのは貴様だ、三流財閥」

「あらそうですか。車を素手で受け止めるような世界観には、僕はお手上げのポーズをとるよ」

「それがいい。素人は寝ていろ」白夜様は後部座席の窓を開け、クラスメイトに声をかけました。「大神、なぜプラハにいる」

「我はどこにでも存在し、どこにも存在しない」

「まさか貴様の口から、観測問題が飛び出すとは思わなかった」

「縮地だ」

大神さんはあっさりと、観測問題よりぶっとんだことを云いました。

ボルヘス＝検索結果
＃２２１０９００４
項目　仙術・武術
タイトル『縮地』

房有神術　能縮地脈　千里存在目前宛然

（神仙傳）

相手の間合いに瞬時にして入りこむ武術の技法を、『千里（約五百キロメートル）先も目の前にあるかのごとく、地脈を縮めること』という故事になぞらえ、縮地と呼ぶ。

つまり大神さんは、距離に関係なく動けるわけです。時刻表トリックを崩壊させることもできるわけです。西村京太郎先生にぁやまってほしいです。

「俺は移動方法ではなく、貴様がプラハにいる理由を聞いている」

白夜様は縮地に興味ないようでした。

「十神よ、さきほどの『世界征服宣言』は本当か」

「だとすれば、どうする」

「お主をここで捕獲する」

「目標の大きさは評価してやるが、しかし不可能だな。大神よ、怪我をしないうちにどけ。苗字が若干かぶっている時点で、すでに俺のじゃまだ」

「言葉が通じぬのであれば、力を使うしかあるまいか」
「フン。貴様には力以外に武器はないだろうが。とうとう脳まで筋肉になったか？　プロテインで身を滅ぼすぞ」
「……前々からの疑問ではあったが、お主の攻撃的な物云いは、何か理由があってのことなのか？」
「企業秘密としておこう。さて大神、最後の質問だ。だれの差し金で動いている」
「愚問（ぐもん）。我の心は、希望ヶ峰（きぼうがみね）学園とともにある」

　希望ヶ峰学園。
『ここを卒業すれば、その後の人生の成功は保証される』と云われている希望の象徴。

あらゆる分野、あらゆるレベルでの『一流の才能』を集結させた、才能の学園。

私たちは、そんな異形な学校の在校生でした。

「では、お主の望み通り、力づくで止めてみせよう」

大神さんの巨木のような二本の腕が、ゆらりと回転をはじめます。

「天地上下の構えか」白夜様は余裕をアピールするつもりか、座席シートにふんぞり返っていました。「大山倍達が考案したといわれる必殺の構え。この俺と戦うのであれば、まあ妥当だろう」

「あの、白夜様……」

「俺の許可なく狼狽（ろうばい）するな。『青インク』ならさっさと観察しろ」

「私たち、殺されるんじゃありませんか？」

「大神の目的はあくまで俺の捕獲だ。つけ入る隙はある。おい三流財閥」
「……ん？　あ。あーごめん。寝てた」浩之さんが顔を上げました。
「異能力バトルは終わった？」
「今がちょうどピークだ」
「聞かなきゃよかった」

「貴様に仕事をあたえてやろう。この局面を打開しろ」
「ごほうびくれる？」
「俺がつかまってもいいのか？」
「やれやれ。足もと見ちゃってさ」
億劫（おっくう）そうな態度とは裏腹に、浩之さんはすばやくギアを動かし、アクセルを踏みこみました。

「笑止」
大神さんは車を受け止めます。
ただし、構えの都合によるものでしょうが、今回は両手で。
「どんな構えだろうと、発動させなければどうということはないのさ。姉さん！」
「ぽちっとな」
すると……完璧に存在を忘れていました……助手席の唯香さんが、カーナビゲーションシステムの横にあるドクロボタンを押しました。センスが昭和です。
背後から聞こえるのは、機械が稼動する音。
どう見てもジェットエンジンとしか思えない銀色の筒が、車の後部

に出現しました。

「デレッデ！　ドイツ車をなめてはあかんぜよ！　ナチに協力したベンツは、大量の兵器を製造した。車はもちろん航空機もね」

ジェットエンジン作ってましたっけ？

私の疑問をかき消すように、高周波にも似たエンジン音がうなりを上げます。

高まるエネルギーに耐え切れず、ガタガタと車体が揺れ、頑丈なことで有名なメルセデスから軋む音が聞こえます。

「さーて。それじゃ、素手でジェットエンジンを止めてみてくれる？　超高校級さん」

メルセデスが発進……いえ、発射しました。

が。

「このていどの馬力で、我に敵うと思うか！」

大神さんの通称が『鬼（オーガ）』であることは、学園内で広く知られていま す。

その名の通り、おとぎ話に出てくる鬼のような腕に力がこめられ、筋肉が異様に隆起しました。

なんということでしょう。

大神さんはジェットエンジンと拮抗（きっこう）するどころか、車体を押し戻しはじめたではありませんか。

「姉さん。第二波」

「ぽちっとな」

唯香さんがふたたびドクロボタンを押すと、二基目のエンジンが現れました。

「デレッデ！　押してもだめなら、もっと押せってね。出発（デッパツ）だぜええええええ！」
浩之さんがアクセルを踏みこんだ刹那（せつな）。
フロントガラスに映る世界が、真っ白になりました。
道も、空も、景色も、大神さんも、すさまじい加速によって輪郭（りんかく）が消え、動体視力ではとらえることができません。
シートベルトを失念していた私は、車内のあちこちに体をぶつけながら、これで私と白夜様はお尋ね者だなと思い、幸せでした。

10

本来ならばそろそろ、チェコとチェコスロバキアの違いや、バドワ

イザーとブドヴァイゼルの違いを説明するつもりだったのですが、それどころではなくなりました。

プラハの空気が一変していたのです。

「反対！」

百人ほどでしょうか。

市民が集結し、叫んでいました。

急ごしらえで作ったと思われる旗には、チェコ語で書かれた『世界征服』の文字に、大きく×印がつけられています。

「デモ活動かい。『宣言』からまだそんなに経ってないのに、チェコ国民は戦争のにおいに敏感ですにゃあ」

メルセデスを徐行運転させながら、浩之さんは民衆を観察していました。
私は日本国内を騒がせている『パレード』を思い出して、気分をげんなりさせていましたが、集団の中に同級生を見つけて、やはりそれどころではなくなります。
特徴的な三白眼。
ピンクに染めた髪。
牙のように尖った歯。
『超高校級のメカニック』。
左右田和一（そうだかずいち）。
デモに参加するというより、デモの中に身をひそめている左右田さんの存在は、私を混乱させました。

白夜様とソニア王女には、プラハにいる理由がありました。ソニア王女と左右田さんのふたりはクラスメイトですが、だからといって、プラハに同行する理由にはなりません。

「馬鹿王女といい、におうな」

白夜様は車窓から、今はまだ小規模なデモをながめていました。

「あのさ坊ちゃん、もうちょっとコソコソしてくれませんかね。連中に見つかったら、切ないことになりかねないよ」

「十神は負け犬のように隠れなどせん」

「タオル一枚で逃げてるくせに、いばりくさった態度だ。その自信には根拠あるの？」

「俺の根拠はただひとつ、十神であることだ。十神ほどたしかなものはない」

「その十神一族ってのは、おかしな世襲制度なんだよね」
一瞬の沈黙。
「何が云いたい」
「無力な少年が死に物狂いで努力して、あの十神一族の御曹司となったわけですからにゃあ。りっぱなもんですにゃあ」
「だから何が云いたい」
「そこまで自覚的に成り上がったのなら、最終目標は世界征服じゃないのかね」
「ピルスナー・ウルケルはあるか」
「なんで？」
「貴様のスポンジ頭に、こんどは瓶を直接叩きつけてやりたくてな」
白夜様は不快そうに鼻を鳴らしました。「この俺を、可能性のない人

生をすごす連中といっしょにするな。つまらん夢を描いてうっとりするクズといっしょにするな。俺はその領域にはいない」

「ピルスナー・ウルケルはないけど、かわりに衛星電話なんてどう？　貸してあげてもいいよ」

プラハは孤立していました。

衛星落下による電波障害のためか、ニセモノがなんらかの手を打ったのか、電話もネットも使いものにならないのです。

それでも衛星電話があれば、日本と通信できるでしょう。まさか祁答院財閥が持っているとは思いませんでしたが。

おっと。それなら。

「お話の途中で恐縮です」口をはさんだのは私でした。「もしよろし

ければ、白夜様に服も貸していただけないでしょうか」

「おい、しゃしゃり出るな」白夜様がたしなめます。「貴様は『青インク』らしく文字でも書いていろ。さっきも云いかけたが、貴様は生意気なところがあるぞ。いいか、年上だからといって……」

「差し上げましょう」

びっくりするほど小さな声。

唯香さんです。

のろのろとダッシュボードを開けると、もそもそと何かを取り出しながら、「じゃじゃーん」と無感動に云いました。

セーラー服でした。

「貴様の姉は馬鹿の子か？」

「失礼な！　姉さんのセーラー服なら僕もほしいくらいだ！」
浩之さんは怒りの方向性を間違えています。
「ではこちらは」
唯香さんが次に取り出したのは黒タキシードで、車内には困惑の空気が広がりました。
そのとき。
ミラー越しに人影が。
エレキギターを肩にかついだ少女。
メルセデスが路肩（ろかた）に停まると、助手席の窓をノック。
「唯香さんの犬が帰りましたよっ！」少女は開けられた窓から、それこそ犬のように顔を突き出しました。「ほめてください。ケツアールのようにアカマルナギナタハバチのように刺してやりまし

た！」
「絶滅危惧種ばかりじゃないか」
「あなたには云ってません」少女は浩之さんを険悪そうな目で見ます。「一応、報告しときますが、ソニア・ネヴァーマインドの一味は敗走しました」視線を後部座席の私たちにスライドさせて、こんどは笑顔。「ごきげんよう。ご無事なようで何よりです。私は金井妙子ともうします！　牛殺しです！」
「牛？」
「ご安心ください。弱者は撲滅しますからっ！」
「はあ」
「ゴミクズはさらにゴミクズに。チリ紙はよりチリ紙に。すべての弱者に敗北を、あらゆる敗者に地獄をあたえるのが、この金井妙子ちゃ

んなのですっ！」
妙子と名乗った少女は、助手席の窓から車内に入ろうとしますが、胸がつっかえたらしく、「ぐげんこ」と声をもらしました。
「乳の自慢はそれくらいで」浩之さんが肩をすくめました。「僕らはこれからアジトに行くけど、妙子ちゃんはどうするよ」
「屠（ほふ）らないのですか」
「坊ちゃんのニセモノが出てこようが、そいつが世界征服しようが、僕には関係ないからね。十神一族の最重要関係者を手に入れたのに、危ない橋を渡る気はない」
「ふーん。でも、あなたに『十神一族の繁栄の秘密』を話してくれるようには見えませんけど……って、ゆ、ゆ、ゆゆゆゆゆ」不意に妙子ちゃんが乱れます。「ゆゆゆゆ唯香さん、そのセーラー服はいったい！　ゆゆしき事態！」

い　ゆゆしき事態」

「私の服です」

「どういうつもりですか。なぜそんな逸品が……まさかeBayに出品ですか！　セーラー服で一晩中ですか！　うひゅ、神様ありがとう！　うひゅ、うひゅひゅひゅひゅひゅひゅひゅ。あの、そういうことなら私が買いますけど。できればそのまま真空パックに……」

「服がないのです」

　唯香さんは優雅に手を動かして、タオル一枚の白夜様を示しました。

「え、服がなければ唯香さんのセーラー服をいただけるんですか。そういうルール？　神様ありがとう！　じゃあ私も立候補しますっ。脱げばいいんですね脱げば！」

妙子ちゃんは車内に上半身を突っこんだまま、何やら暴れています。

当然ですが、それは目立つ光景でした。

デモ隊が異変に気づきます。

全員の視線が、後部座席の白夜様に向けられるのは、さほど時間のかかることではありませんでした。

見つかった。

それも最低な理由で。

「反対反対反対反対反対反対反対反対反対反対反対反対反対反対反対反対反対反対！」

鳴り響(ひび)くシュプレヒコール。
揺れ動く旗。いくつもの目。
迫りくる民衆の声。声。声。
彼らデモ隊は、メルセデスを包囲しつつ距離を詰めると、張りつめた糸が切れたように、一気になだれこんできました。
浩之さんは車を急発進。いきおいあまって、窓枠にはまっていた妙子ちゃんがすっぽ抜けました。妙子ちゃんはすぐに立ち上がり、デモ隊に突撃してくれます。

11

メルセデスは古都を突き抜けたいのでしょうが、ほかの車と新たに湧(わ)いたデモ隊がじゃまで、思うように動けません。

湧いたデモ隊がじゃまで、思うように動けません。

私はボルヘスを起動させようとして、回線が切れていることを思い出しました。

敵の位置を推測できない。

ボルヘスにどっぷり依存している身からすれば、目隠しされたような気分です。

メルセデスは障害物をたくみに避けて、デモ隊を引き離してはいますが、入り組んだ道のせいでスピードが出せないようでした。

石造りのキュートな家がならぶ町。というプラハのイメージは、よく考えれば最近作られたものにすぎません。

城塞都市からの長い歴史を持つ町。

敵の侵入を防ぐために作られた戦闘の都。

そんなプラハの空を、

赤ん坊が飛んでいました。

空をハイハイするように、全身真っ黒の赤ん坊が飛来しているのです。

……何を云っているのかわからないと思いますが、この目で見たことを、ありのまま説明すると、こうなってしまいます。

ちなみに空飛ぶ赤ん坊には、本来は目や口がある位置に亀裂が走っていて、とても不気味でした。とても不条理でした。

私は不条理に襲われると、すぐボルヘスに頼ります。検索だけなら、コーカルだけでもやれるでしょう。

******ebook converter DEMO Watermarks*******

ボルヘス=検索結果
♯２２７８５７１
項目　芸術
タイトル『テレビ塔の赤ん坊（通称）』

プラハ三区、ジシュコフ地区にそびえるテレビ塔（全長２１６メートル）は、社会主義時代に建てられた。
政権交代後のイメージチェンジをかねたリニューアルにより、テレビ塔の外側に取りつけられた巨大な赤ん坊が、検索対象と酷似。
ちなみにテレビ塔は、米テレビ局ＣＮＮが選定した『世界でもっ

とも醜い建物』四位にランクインしている。

知識を入れて冷静さを取り戻した私の頭に、仮説が浮かびます。

『超高校級のメカニック』である左右田さんの手にかかれば、プラハ塔の赤ちゃんを飛ばすこともできるのではないか。

でもなんのために？

ソニア王女。

左右田さん。

みんな何をしてるの？

学園を裏切ったの？

どうして私に教えてくれなかったの？

殺すつもりだから？

空飛ぶ赤ん坊は上空で旋回すると、メルセデスに急降下してきました。
顔面がまっぷたつに割れて、中から細長いものが出てきます。
「機銃だ！」
浩之さんが怒鳴りました。
機銃？　あまりに積極的な殺意に耐えられず、吐き気がこみ上げます。
タタタタタタ。
思いのほか軽い音とともに、銃弾が撃ちこまれました。
「なんぞとて！」
浩之さんは車体を大きくかたむかせて、Ｕターンを決めます。胃が揺さぶられ、吐き気が助長されました。
メルセデスは信号を無視して角を曲がり、路地裏に入りました。

メルセデスは信号を無視して角を曲がり、繁華街に入りました。
そこではプラハの市民が、ごく普通の生活をいとなんでいました。ゆっくり買い物。まったりデート。酒場へくり出すおじさん。手をつないで歩くカップル。ベビーカーを押すママさん。デモ活動にいそしむ市民……。
繁華街を爆走するメルセデスは顰蹙（ひんしゅく）の対象です。いくつもの非難の目が向けられました。
ただそれも、空飛ぶ赤ん坊がやってくるまで。
市民たちは困惑と苦笑の中間みたいな顔つきで、我が町の名物が空を飛んでいる様子をながめていました。
空飛ぶ赤ん坊は、そんな市民を気遣う様子もなく、メルセデスに向かってふたたび幾流を撃ちこみます。タタタタタタ。

「嘘」

叫んだのは私でした。

こんな展開になるとは予想していなかったのです。『ギリギリのルールはあるだろうな』とか、『市民は巻きこまないだろうな』とか、たいした根拠もなく思いこんでいたのです。

そんなはずないのに。

この世は殺意に満ちていて、命の値段というものはおどろくほど安くて、ごく簡単に死体が積み上がる。

私はそれを見てきたのに。

メルセデスが銃弾の雨を避けるたび、血の雨が広がりました。

ベビーカーの中で永遠に眠る血まみれの赤ちゃん。顔の半分以上をうしなった半ズボンの子供たち。ケチャップなのか血なのかわからないけど赤く染まったピザを口に入れて死んでいる学生……。
日常的なプラハの風景の中に、ぽつぽつと散らばる非日常。
多くの死体を作りながら、空飛ぶ赤ん坊が差を縮めてきました。
ミラー越しにはっきりとその姿が見えます。
「三流財閥」白夜様が口を開きました。「ジェットエンジンはどうした」
「うーん。あれね、一回しか使えないの」
「切り札は先に見せるな。見せるならさらに奥の手を持て」
「メンゴメンゴ。って、あらら。挟み撃ちかい」
前方からは装甲車。

前方からは装甲車

道行く人を轢(ひ)き殺しかねない速度で……いえ、実際に何人か巻きこみながら、こちらに迫ってきます。

装甲車の中には、ソニア王女が。

だれもが普通に人を殺している。

これから、世界にたくさんの死が到来するのではないか。

私は最低な予感に包まれました。

「三流財閥。何か手はないのか」

「切り札は使っちゃったからなあ。このまま装甲車の横っ腹をすり抜けるなんてどう？」

「三流財閥の考えそうな手だ。あそこの脇道に入れ」

「なんで」

「三流財閥はだまって言うことを聞け」

「三流財閥はだまって云うことを聞け」
「ムッキーー！　さっきから三流三流って。三流でも財閥は財閥ですぞ！」
浩之さんは文句を垂れながら、それでも脇道に車を入れました。分かれ道があるたびに白夜様は指示を出し、気がついたときには追撃を逃れていました。
忌まわしい空飛ぶ赤ん坊も、無慈悲(むじひ)な装甲車の姿もありません。
「どうして？」
私は思わず声に出します。
「俺が導いたからに決まっているだろう」
そう云った白夜様の顔から……眼鏡が消えていました。
「白夜様、あの、眼鏡は」
「発信器のついた眼鏡のことか？　投げ捨てたが」

「発信器のついた眼鏡のことだ。　投げ捨てたな」
「え？」
「替えをよこせ」
「た、ただちに」
私はすぐに替えの眼鏡を取り出しました。
「フン。今ごろ連中は、眼鏡に突撃をかけているだろうな」
「発信器というのは……」
「俺から靴や下着までうばった連中が、なぜ眼鏡だけそのままにしておいたのか考えてみろ。おそらく保険だろう。俺が逃亡したときのことを考えてな」
「質問があります」
「許可する」
「なぜ白夜様は、発信器の存在に気づいておきながら、放置しておい
このぶんだと

たのですか」
「発信器をつけていれば、連中はかならず俺の前に現れる。そのときにチャンスがあれば殴りつけ、情報を聞き出すこともできるだろう。防戦一方は趣味ではない」
　でも。と、私の内部にまだ残っている甘い部分が抗議します。
　そのクソ眼鏡をさっさと捨てていれば、町のひとたちは死なずにすんだのではありませんか？
　もちろんこれは、あと出しジャンケンにすぎません。『あのときこうしておけばよかった』とか、『こんなことをする必要はなかった』とかいった言葉と同じ、安全圏からの感想にすぎません。
『十神一族最大最悪の事件』を体験した私たちは、生きるためには死体の山を築かねばならないことを知っています。
　[illegible]ここは全部[illegible]。

やれることは全部やる
檻（おり）の中にスプーンがあれば、それを使って穴を掘る。
銃を突きつけられても、弾丸が脳を砕くその瞬間まで笑顔で。
これが、私と白夜様の生きる道。

12

白夜（ア・ナイトレスサマー）。
午後八時三十分を回っても、少し暗くなってきたかなと思うていどで、闇はまだ遠くにあります。
プルゼニ。
ドイツ国境にほど近い町に入っても、空はまだ明るく、さらには疲

覚と時差ボケによる軽い眩暈で、私は時間の感覚をうしないかけました。

　プルゼニには、シュコダという日本ではあまりなじみのない総合機械グループの工場がありました。

「三流財閥にも、財閥仲間はいますからにゃあ」

　浩之さんがシュコダの自動車工場に車を入れると、そこに現れたのは地下道。

　プルゼニという町の下には、ヨーロッパ最大の地下道が広がっていることを思い出しました。

　車を降りて長い地下道を進むと、体育館ほどの空間に到着します。むき出しの天井には蛍光灯がぶらさがり、片隅には衝立（ついたて）で仕切られたベッドルームとデスク、あとは簡易シャワーがあるだけの質素な作りでした。やや豪華な防空壕（ぼうくうごう）といったところでしょうか。

「僕のアジトだよ」浩之さんの声が反響しました。「シュコダ財閥が解体されたとき、その一部が祁答院財閥に取り入ってきてね、それ以来の仲さ。このアジトもそうだし、年代物（ヴィンテージ）の戦車を分けてもらったこともあったな。なんて名前だっけ。ドイツ軍が接収して使いまくってたやつ」

「LT-35」私は答えます。「ドイツ軍の名称では、LTz(t)35ですけど」

「お嬢さん、まさかの軍オタ？　にわか知識を披露されたら怒り狂うタイプ？」

「知識の泉は、頭じゃなくてこっちです」私は右目の表面を爪で弾きました。「義眼なんですよ」

「綺麗な目だね」

「どっちがですか？」
「どっちも。十神財閥が開発したのかな」
「情報検索図書館……私はボルヘスと呼んでいますが、ようはリアルタイムに更新される百科事典です。辞書も、ニュースも、トピックスも、地図も」
「悪意はないけど、それって今や電話でもできるよね。あと、図書館ならバベルじゃないの？」
「データが視覚に直接表示されるので、拡張現実（AR）として完璧ですし、万能ゴーグルの役割もあります。それにボルヘスは視力をうしない黄昏の世界に住んだからこそ、図書館の住人になれました」
「これはこれは、ハイソサエティでディレッタントでウィットに富んだネーミングセンスですな！」

そんなふうに叫ぶ浩之さんを、ためしに検索してみましょう。ピピピピピ（註・実際には音は出ません）。

ボルヘス＝検索結果
#８７６５４３２１
項目　財閥
タイトル『祁答院財閥』

初代祁答院砂井門を祖とし、二代目砂井門により完成された財閥。
一般的な八大財閥とは同列で語られず、祁答院。入来院。大宮司。佐倉。小沢による裏財閥の筆頭とされているが、その詳細は不明。

明

オフラインではこれだけ。

シュコダ製の戦車にかんしてのほうが、まだ多くの情報が出てきます。

そんなマイナー財閥の御曹司である浩之さんは、いつのまにか煙草とビールを持っていました。

「未成年の飲酒喫煙は法律で禁止されていますよ」

私は一応、警告しておきます。

「アニメ化のときは、煙草をチュッパチャプスに変更するから問題ないさ」浩之さんは煙を吐きました。「オリジナルキャラクターを作られてもがまんするし、１クールに話を詰めこまれても怒らないよ」

「なんの話です？」

「最近は漫画やアニメよりも、ゲームのほうが制約がきびしそうだよね。コンピュータエンターテインメントレーティング機構（CERO）の連中って、ビデ倫級にシャレが通じなそうだよね。家庭用ゲームに十八禁って、あいつら何を考えてるわけ？」

「検索してみましょうか」

「きみのボルヘスってやつは、夜中のネットサーフィンみたいなスナック感覚で使っていいのかい……あっ」

「なんですか」

「夜な夜なボルヘスで、エッチな単語をしらべたりしてないだろうね！　陰核とか！」

「………」

「バルトリン腺とか！」

「死んでほしいなあ……」
「ちなみに『エッチ』って言葉は、ひらがなとカタカナ、どっちに興奮するタイプ？」
「あなたをだまらせる方法を検索することにします」
「不可能だね。ＣＥＲＯもビデ倫も、僕の発言や言動を制限することはできないんだよ。児童虐待や育児放棄や性的虐待をちょっとばかり表現したくらいで、タブーに挑戦した気になってる連中はわりといるけど、こちとら、そんなことばかりやって十余年……」
「おい三流財閥、さっさと衛星電話の用意をしろ」
いつのまにかデスクを陣取った白夜様は、黒いタキシードを着こなしていました。

キメすぎなことに、胸に薔薇を挿しています。椅子に腰かけて足を組み、眼鏡を押し上げたポーズもキメすぎです。デスクの横にあるベッドでは、ナイトキャップをかぶった唯香さんが眠っていました。

どうやらお嬢様は、お休みのタイムのようです。こちらはボケすぎではないでしょうか。

浩之さんはノートパソコン型の衛星電話を設置すると、「あとはご自由に」と云って、シャワー室に消えました。流れる水の音。そういえばビールまみれでしたっけ。

ふたりきり。

なんとなく気まずくなった私が、十神家に連絡を入れようとすると、「待て」と厳しい声で制止されました。

—もしかして白夜様は……すでにニセモノが十神家に取り入っている

とお考えで？」

「ありえない話だが、あのニセモノはいわば一流の『オレオレ詐欺』

だ。用心しておく必要はある」

「ペニーワースさんは？　あの方なら、白夜様とニセモノを間違えな

いでしょう」

「俺が俺の敵なら、まっさきにそこを狙うがな」

ボルヘス＝検索結果

＃００４８１８３７

分類　重要人物

タイトル『アロシャイス・ペニーワース（情報開示レベル２）』

かつて十神家につかえていた執事。『十神一族最大最悪の事件』の生存者。
十神白夜が心を開く数少ない人間のひとりであり、その意味でも十神家には不可欠であったが、現在は第一線をしりぞき、会員制の執事バーをいとなんでいる。

ペニーワースさんは、ある意味では白夜様のアキレス腱でした。
もしニセモノに先手を打たれていた場合、『僕ちゃんはとっても心細いですぅ～バブバブ』と弱っていることを、相手にみすみす教えることになりかねませんし、十神家を出たペニーワースさんに、こちらをアシストする力は期待できません。
家に頼れないとき、私たち学生がどこに助けをもとめればいいのか

は、漫画やテレビドラマが教えてくれています。

お友達。

私はボルヘスからアドレスを呼び出すと、白夜様の同期……78期生に衛星電話で連絡をとります。

「もしもし」

画面も音声も反応なし。

時差は日本のほうが七時間進んでいるので、午前三時三十分。思春期バリバリの高校生が、真夏の土曜日の朝方に寝ているわけがありません。にもかかわらず、だれも電話に出ませんでした。

これはきっと、もしかすると、白夜様は嫌われているのでは？　たしかに性格には難アリですし、財閥キャラの悪いところを全部引き受けたような設定ですが、こんなに友達がいないとは。我が子が嫌われていることを授業参観ではじめて知った母親の心境。十神家の未来は暗い……。

次々に電話を入れましたが、やはり反応なし。アドレスから名前が消えていきます。

こんどのアドレスはナ行。

ナ。

ナ。

ナ。

ナエギ……。

「もういい」白夜様はおそらく、少し傷つきながら云いました。「希

望ヶ峰学園に連絡を入れろ」
その手がありましたね。
私は衛星電話を、希望ヶ峰学園のホットラインにつなぎます。
「もしもし。だれかいますか。応答してください。ねえだれか」
「……って……るけど！」女の人の声。「もし…し…なの……っちも大変な……」
「もしもし？　もしもし？」
雑音がはげしく、画面には砂嵐。
「フン。安物か。三流財閥め」
白夜様は舌打ち。
すると、ベッドに入っていた唯香さんが、『エクソシスト』のリンダ・ブレアちゃんのようにむっくりと上半身を起こしました。

てっぺんにポンポンのついたナイトキャップをかぶり、今にも閉じそうな目の唯香さんは、小さな鼻をひくつかせると、

「へっくし」

と、上品なくしゃみをして、ふたたび眠りの中に戻りました。

気がつけば、衛星電話が鮮明になっているではありませんか。

ええと、どういうアレでしょう。

「おーい、もしもし！」相手の声が聞こえます。「ねー聞こえてんの？　聞こえてんなら返事してよ。ウンとかスンとか云えよオラーー！」

「聞こえてます。そちらは、希望ヶ峰学園ですよね。先生たちはどこです？　みんなは無事ですか？」

「質問ばっかりやめてよ！　アタシだってマジでテンパってんだか

ら！」
衛星電話の画面には、ひとりの少女が映っていました。
ド派手な色の髪が左右に結ばれ、赤々と塗られた爪がよく目立ちます。
大きく開かれた胸元から放出されるのは、名状しがたいほどの吸引力。
目も、口も、鼻も、耳も、睫毛（まつげ）の一本にも、意識が行き届いています。
見せること。
魅せること。

ただそれだけを欲望としたような、ただそれだけを目標としたよう

な存在が画面に出現して、私は思わずくらくらくらしました。
ファッション誌のカリスマ。
少女たちの希望到達点。
『超高校級のギャル』。
江ノ島盾子（えのしまじゅんこ）。

13

入学理由が『すごいギャルだから』となってくると、希望ヶ峰学園のスタンスに疑問を抱く方が出てくることでしょう。
誤解されやすいのですが、希望ヶ峰学園が欲しているのは『一流の才能』です。
極端なことを云えば、生徒全員が一芸入試みたいなものですから、

『超高校級のギャル』だろうと、あるいは『超高校級のひきこもり』だろうと、他を突き放す個性があれば問題ありませんでした（まあ、『超高校級のひきこもり』は、登校した瞬間に除籍処分されるでしょうが）。

「あ、センパイじゃ～ん！」江ノ島さんにも、こちらの姿が見えているようです。「ちわーっす。ポッキー買ってきてもらっていいっすか？」

「ポッキー？」

「っていうか連絡ついてよかった～。マジ安心で暮らし安全！　センパイちょっと聞いてよ。超ヤバイんだから。学園まで助けにきてよ」

「江ノ島さん、先輩にタメ口なのは許すから話を聞いて。私は今、チ

ェコにいるの」
「……チェコってポッキー売ってる？」
「どうだろう」
「チェコってヨーロッパ？」
「正解」
「ヨーロッパって首都どこ？」
「しいて云えばパリかな。まあそんなわけで、助けにはいけないんだ。だれか先生いる？　みんなと連絡つかないんだけど無事？　こんな時間にどうして学園にいるの？」
「ちょ、ちょっとタンマ。センパイ質問が多いっての」
「たったの、みっつでしょ」
「たった！　センパイはみっつを、たったっていうワケ？」

「こっちも余裕ないの」
「センセーたちの姿は見てないかも。電話がつながらないのは、電波が混み合ってるからじゃね？　で、アタシたちが希望ヶ峰学園にいるのは、安心だと思ったから。わお、みっつとも答えられたわ。イェーイ！　かしこいかわいい盾子ちゃん！」
「『アタシたち』？　江ノ島さんのほかにもだれかいるんだね。私も今、白夜様といっしょに……」
「びびび白夜様ああああああああああああああああぁぁ？」
　江ノ島さんが吹っ飛ばされたかと思うと、画面いっぱいに陰鬱な顔面が広がりました。
　大江健三郎かジョン・レノンがかけていそうな丸眼鏡。

明らかに不健康な色の肌。
蛇のようにのびた長い三つ編み。
『超高校級の文学少女』。
腐川冬子。
「ち……ちょっとおぉぉぉ、なんでアンタがいるわけよお……」世界中の陰気を凝縮したような声でした。「ま、まさか白夜様とランデブーを決めこもうって魂胆じゃないでしょうね。ゆ、許せない……ッ。冷静と情熱のあいだで盛り上がろうなんて許せないぃッ！」
「腐川さん落ちついて。先輩にタメ口なのは許すから落ちついて」
「この泥棒猫！　ネコマタビッチ！　淫乱学生！　悪霊退散！」
「私は『白夜行』を書くために同行しているだけで……」
「な、何が『白夜行』よぉぉ。さっさと講談社に訴えられたらいいの

よおおおッ」
「パクってないし！　あと『白夜行』は集英社だし！」
「やっぱりパクってんじゃないのよ！」
「えっと、白夜様からも何か云ってやってくださ……」
あれ？

いない。
気がつくと白夜様は、椅子ごとアジトの端っこに移動していました。
「うふふふふふふふ。どんなに離れても無意味ですよ白夜様ぁ」腐川さんの笑顔が、画面いっぱいに映ります。「あたし、ふだんはド近眼ですけど、白夜様をサーチするときは視力が18・2になりますから」
マサイ族を超えています。

「び？」腐川さんの蛇のような目が見開かれました。「びびびびびびびびびびびびびび白夜様！　どうされたのですかその服装。タキシードなんて……まさか、あたしとの結婚式の予行演習？　そのためにプラハに？　ぐ、ぐふぅ。ぐふぅぅ。あのぅ白夜様、ついでに初夜の予行練習もいかがですか。あたし、じつは今日あたりが危険日で……」

「腐川、命令がふたつある」白夜様がはるか遠くから呼びかけました。「ひとつ。貴様の排卵にかんする情報は、今後一切俺に伝えるな。ふたつ。貴様が『超高校級の文学少女』であるなら、二百文字以内で情況を説明しろ」

「日本時間午前一時。プラハでの『世界征服宣言』の直後、国内に暴動が発生しました。危険を感じたのと、情報入手のために、希望ヶ峰

学園に避難したところ、江ノ島盾子と合流しました。ほかの生徒、教師は見かけておりません。輻輳（ふくそう）防止のためのトラフィック規制が敷かれて電話が不通のため、校内の衛星電話を操作していたところ、そちらとつながり今に至ります。以上です」

「暴動とはなんだ」

「できればその点もしっかり説明して、白夜様に悦んでいただきたかったのですが」

「漢字を間違えるな」

「喜んでいただきたかったのですが、すぐ学園に逃げちゃったのでわからないんです……。も、もうしわけありません！　いつでも便器または三角木馬に拘束される覚悟はできてますから！」

「暴動を起こしているのは民衆か？」

「あの、あたし、それもよくわかりません。ですが……」

「暴動を起こした連中が、『密室』について会話しているのを聞きました」

密室？

何それ。

「どけコラ腐女子が！」江ノ島さんが腐川さんを蹴り飛ばして画面に戻ってきました。「おまたせ～ん。プリティ盾子ちゃん再登場で読者カンゲキ☆」

「ち、ちょっと何すんのよぉぉぉ！　痛いじゃないのおお……」

「こっちの台詞（せりふ）だっつーの。髪が乱れちゃったでしょ。アンタの安っ

ぽい三つ編みと違って、アタシのはキメてんだからさ！」
「ぐぎぎぃぃいいい。ギ、ギャルがうるさいわね……。春の綿雲みたいに柔らかそうな髪型のくせにッ」
「ほめてくれてサンキュー腐川」
「べっ、べべべつにほめてないわよ！」
「そーね。アンタの文学的才能がつい漏れ出ちゃっただけよね」
「ほめられたってうれしくないわよ！」

あ、なんか仲良さそうで安心。
「漫才は終わったか」白夜様が口をはさみます。「江ノ島、聞きたいことがある」
「あ～ん？　メイクの秘訣はトップシークレットだけど」
「貴様の残念な姉はどこだ」

「人のお姉ちゃんを残念って云うな！　お姉ちゃんが残念なのは本当だけど残念だからって残念って云ったらかわいそうでしょ」
「貴様が一番云っているだろ」
「あれれ？　そーいや、お姉ちゃん見てないかも。いつも存在感ないから気にしてなかったけ……ど……あ。あーーっ！　思い出した！
置き手紙！」
「置き手紙だと？」
「テーブルにあったの。『この星を護りたい』って。中二かっつーの」
「また民兵になりすまして、どこかの紛争を終わらせにいったのか」
「お姉ちゃん、星とか貞操とか護るの大好きだからさ。つーか十神、アタシたちを心配してくれちゃってるワケ？　お姉ちゃんに護衛させ

ようって考えた？」
「フン。勝手に云ってろ」
ちなみに江ノ島さんのお姉さんは、戦刃むくろさんと云いまして、『超高校級の残念』と呼ばれています……間違えましたね。『超高校級の軍人』でしたね。
「ってか、聞かせてもらったよ。アンタの『世界征服宣言』を」江ノ島さんがニヤリと笑います。「十神ってイカしたことやるのね。センセーたちは超騒いでるんじゃゃね？　クソマジメな78期生に、こんな暴れんボーイが潜んでいたとは、盾子ちゃんびっくりギョーテン！　ありのままの姿見せちゃいそう！」
「江ノ島、俺のたくらみに手を貸すつもりはあるか」
「あるある！　何を手伝ってほしいワケ？」
「周囲の安全が確認されるまで、学園内で待機していろ」

「えー。待機つまんねー。待機児童問題にまったく興味ねー」
「じっとしてろとは云っていない。学園内でやってもらうことがふたつある」
「ふたつならギャル脳でも安心」
「あわれな脳だな。医者を紹介してやるが」
「神経学者のオトモダチなら、もういるんでケッコーっす。で、何すりゃいーのよ」
「ひとつ。教師を見つけたら、俺の無実を伝えろ」
「意外と地味……」
「ふたつ。学園にさぐりを入れろ」
「へ、なんで？」
江ノ島さんは首をかしげます。

ここは私が云うしかないでしょう。
「あのね江ノ島さん、まだ断言はできないけど、今回の事件に……私のところの学年が関与してる可能性があるの」
「マジすか学園！　ん、じゃあなんでセンパイは知らないわけ？　ハブられた？」
「私はその前に、白夜様の所有物だから」
「いや～ん。なんかエロい。年上のエロスを感じる発言……」
江ノ島さんが悶（もだ）えていると、遠くから腐川さんの罵詈雑言（ばりぞうごん）が聞こえてきます。
「と、とにかく関与してるかもしれないの」私は早口で云いました。
「その証拠に、プラハにはソニアさんと左右田さんがいて」
「マジすか学園2！　いや、どっちも知らないけど」

「ふたりとも、人を殺してた」
「何それ……。殺しって。超ヤバイじゃん」
血の気の引く様子が、濃いメイクの上からでもわかりました。
でも実際、そうなのです。
江ノ島さんの言を借りれば、超ヤバイのです。
これはおそらく、希望ヶ峰学園はじまって以来の一大スキャンダルであり、世間を騒がせている『パレード』より超ヤバイもので、その超ヤバイ事態に、あろうことか白夜様が巻きこまれてしまったのです。
「オッケー。わかった」ややあって江ノ島がうなずきました。「アタシにできることはマジでやっとく。センパイたちはどうすんの？」
「私たちは……」
「売られた喧嘩を買う。それだけだ」白夜様が云いました。「ニセモ

ノの俺に勝利して、月曜までに帰国して、いつも通りに登校する。十神の名にかけて」
「ひゅー。カッコイイじゃん！」
江ノ島さんは拍手。
私は白夜様の宣言にすっかり感激して、『白夜行』を書くことになった自分の運命に感謝しました。
そうです。
負けるはずがありません。
絶対に。
原理的に。
あのときも、今回も、これからも、勝つ。勝って勝って勝ちつづける。

白夜様は神様です。

アジトの天井がわずかに震えていることに気づきました。

そういえばこの上は、シュコダの自動車工場。土曜日も製造ラインを動かしているのでしょうか。『宣言』が出たというのに律儀なものですね。

シュコダ?

私は思い出します。

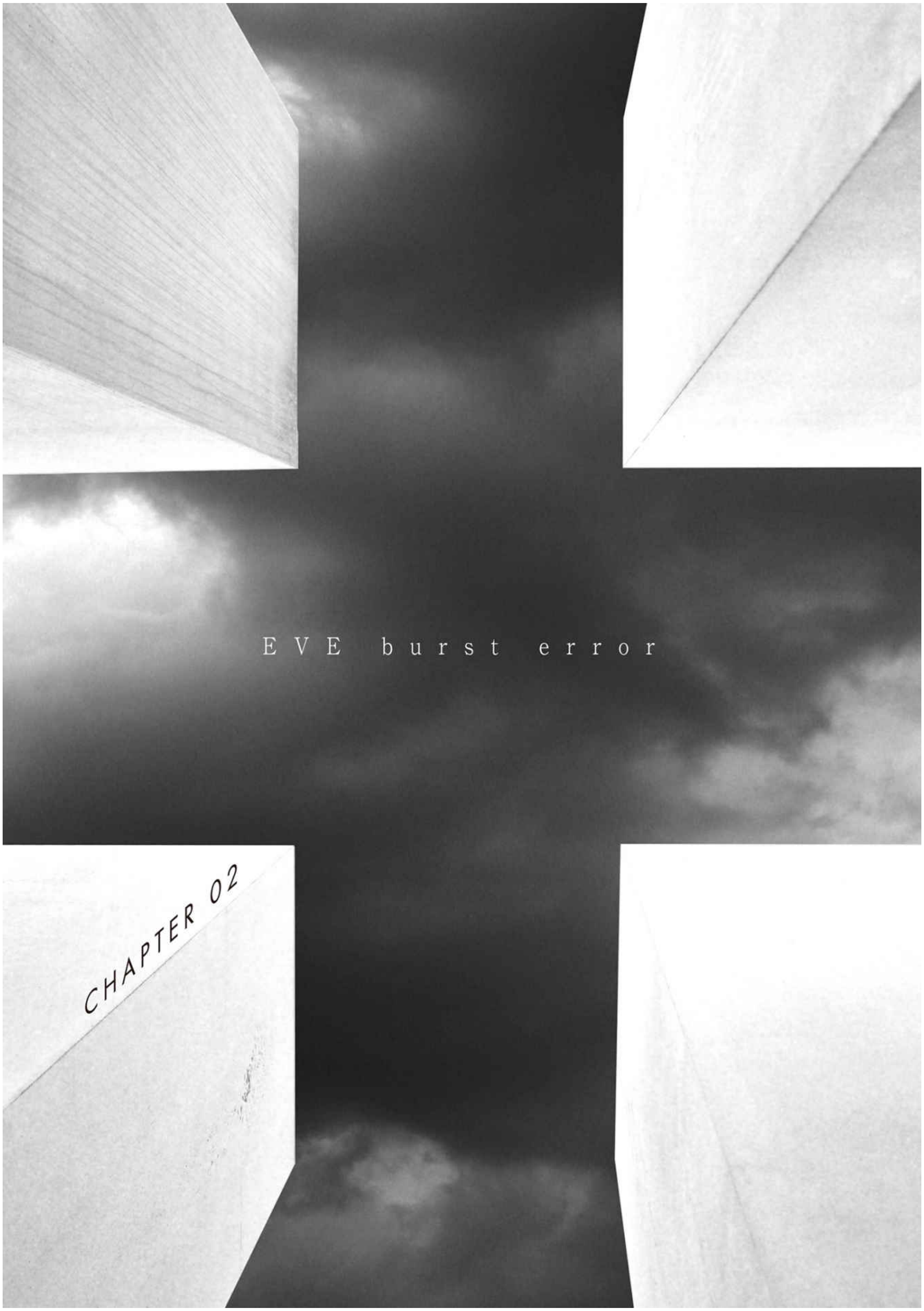
思い出してしまいます。

チェコの苗字には、日本で云うところの『御手洗』のように、特定の意味を持ったものが多くありました。

たとえば、『モルダウ』の作曲者として有名なスメタナには、まるで冗談のようですが、『サワークリーム』という意味があります。

シュコダは、チェコではわりとポピュラーな苗字なのですが、もちろんそこにも意味がありました。

『残念』という意味が。


EVE burst error
CHAPTER 02

1

マクドナルド。マクドナルド。コンビニ飯。カップ麺。ドミノピザ。ケンタッキー。カップ麺。カップ麺。マクドナルド。マクドナルド。ドミノピザ。コンビニ飯。

これが僕の一週間の食事メニューと云ったら、ぞっとしてくれるかな？

2

ファストフードが現代社会特有の病理ではない。という事実だけが、そんな僕を救ってくれる。

古代ローマのアパートには調理場がなく、出来合いの食事を買った

そうだし、十三世紀のパリでは、すでに料理やケーキを出す店があったそうだし、江戸時代は屋台文化が花開いていた。
手作り料理がもたらす効能？
食卓をかこんで生まれる友愛？
そんなものは嘘っぱち。
食べ残しのマックフライポテトをつまみながらネットを見て、自分以外のみんなに才能があることを再確認して眠たくなったら寝る。
モグラみたいな暮らしをつづけている理由はもうよくわからないけど、はっきりしているのは、希望ってやつのせいだ。
僕は希望に潰されて、希望のない世界に生きた。
部屋から出ず、希望の見えない場所に安住した。
「うふふふ」

「き、きみ……なんで笑っていられるの？」
「おじさんは、やはり初心者。むりにでも笑えば、心が落ちつきますよ」
「そういうもんかな」
「笑ってみたらいかがですか。さあ、私といっしょに。うふふふふふ……ん？　何これおいしい。これ食べてみてくださいよ。とってもおいしい」
　なのにどうして外に出て、食事で人とつながろうとしているのだろう？

軽くしらべるだけで、『超高校級の日本舞踏家（ぶとうか）』『超高校級のトリマー』『超高校級の女性ベーシスト』『超高校級の熊撃ち』『超高校級のキャンドル作家』『超高校級の炭焼き職人』と……才能がわんさか出てくる。

　まるで才能それ自体には、なんの価値もないと公言したがっているように。

　早い話、僕は最初から煮詰まっていた。

　学生生活から遠く離れて、ひとりぼっちで眠るモグラだった。土の中には、炭水化物やネットがあるので死にはしないけど、死んだように生きた心地にさせる。

　僕はその日も、冷めたポテトをパクつきながら、今この瞬間にも輝

いている才能たちのことを検索していた。

この世には、ゲームの売り上げ本数に生きがいを感じる連中や、お気に入りの球団が勝つと元気になる連中が多くいる。

そいつらは他人の人生を、自分の人生と直結させていた。自分の人生を色づかせるために、他人の人生のおいしい部分をかすめとっていた。そうじゃなければ、札束やボールの行方なんざ、本来は知ったことではない。

僕のしていることも、そういうゲスな行為に近いのだろう。

モグラの僕は、春先のタケノコみたいにニョキニョキ出てくる才能を嗅ぎつけては、『才能といったところで普通だなあ。唯一無二じゃないなあ』と胸をなでおろす作業をせずにはいられなかった。

不毛なのは知ってますよ。

そりゃ『外』に出たいですよ。
でも才能ゼロ人間は『外』に出られないし、何よりこうして苦悩するいっぽうで、たくさんの才能ゼロ人間が『外』で暮らしている事実が、さらに僕を痛めつけた。
クソで作った風呂なのに、そこに浸かる本人が、『いい湯だな〜』と満足すれば、それは一応、『外』になる。ほかにも、家庭を築いたくらいで、出世したくらいで、『外』で暮らす権利を得たと勘違いしているやつのまあ多いこと。
そんなこと、絶対にしないぞ。
僕は自己満足の罠に嵌（はま）らない。不幸を語る『伝道師』にもならない。ハリボテの家を守る『パパやママ』にも、ガハハ笑いをする『社長サン』にもならない。

じゃあどうするの？

と問われるのがいちばんこまる。

まさかこんなふうになるとは。

正直、ちょっと信じられない。

自分には何もなくても、才能だけはあると信じていたから。

百メートルを三秒台で走るとか、ワインの色を見ただけで銘柄(めいがら)を当てるとか、空中浮遊とか、そんなとくべつな技法(アート)じゃなくて……たとえば、文章を書く才能なんてどうだろうか。

『超高校級の文学少女』や『超高校級のライトノベル作家』の書いた

小説を読んではみたけど、感動するほどのクソだったぞ。
ちきしょうめ。
どうしてあんなのが『アリ』で、僕は『ナシ』なんだ。
どうしてあいつらは『外』にいて、僕はモグラなんだ。
あ？
長いって？
その通りかもしれない。少女の人生相談でもウザイのに、オッサンの独白なんて最悪。
目をつむろう。
寝てしまおう。
夢。死ね。
希望。死ね。
夢や希望が叶ったと思いこんでるやつ。もっと死ね。

おやすみなさい。

4

異変にはもちろん気づいていた。

スヤスヤ眠っているところに爆音が響けば、だれだって気づく。

最初は、ついにこのド田舎にも『絶望病』がやってきたかと思った。だけどカーテンの向こうから感じ取れる気配は、どうもそれとは違う。

アンダーグラウンド系の投稿サイトで、国民の大半が『絶望病』にかかった某国の映像を観たことがある。

国民たちは、楽しそうだった。

絶望に絶望をかさねて、マイナスにマイナスをかけて、逆にハッピーになったかのようにゲラゲラ爆笑していた。
笑いながら殺し合っていた。
殴っても殴られても、刺しても刺されても、どちらも幸福的に攻撃的に笑っているのだから、それはつまり全員が加害者で、被害者はゼロというべきだろう。
だけど今、アパートの外から悲鳴が聞こえている。

さすがの僕も起き上がったけど、戸締りの確認をするくらいで、ほかにやることは、ひとつふたつしかなかった。不安のせいか頭痛がした。
部屋に戻って手を洗い、テレビをつけたが反応しない。ネットもつ

ながらない。
電話は？
かける相手も、かけてくれる相手もいないため、変に気恥ずかしい気分の中で、天気予報の局番にかけてみた。不通だった。
外の悲鳴は、あきらかに増している。
僕はカップ麵の在庫をチェックすると、動物園のトラみたいに意味なく部屋を回ったあとで、ふたたびベッドにもぐった。
心理学用語に、『正常性バイアス』というものがある。
事故や災害が目の前で発生して、命の危機が迫っているのに、『まー大丈夫でしょ。死にはしないでしょ』と、日常にしがみつくシステム。自分を物語から排除し、今そこにある死から逃避するシステム。
おそろしいことに、そうした知識を持っているのに、僕はベッドから出られなかった。

二時間ほど、そうしていた。

そのうち、なんの音もしなくなった。

物音ひとつ、風の音すら聞こえない。

静寂。それが美しい。静寂が気味の悪いように広がって美しい。こんなにも静かな状態というものを、生まれてはじめて味わった。

ベッドから出てみる。

体の気だるさも、足の角質の硬さも、常時六割くらいに満たされた胃袋の感じも、今まで通り。

にもかかわらず気分は違うし、なんかこう、スカッとしていた。

その理由に気づくまで、一分近くかかった。

そっか。

僕じゃなくて世界が変わったんだ。
昨日までの常識はおしまい。
僕は僕の好きにすればいい。

いや待て。僕はアホじゃないぞ。調子に乗ったりはしないぞ。世界が終わって喜ぶのは、臆病者(おくびょうもの)のやることだ。終末を待望するカルト教と同じだ。僕はモグラだし臆病者でもあるけど、できたての神にすがるほど落ちぶれちゃいない。
じゃあどうするの?
どうもしない。
僕自身は変わらずに、いつもの気分でいればいい。

才能を呪っていればいい。
いつもの気分でスタートだ。
マイナス地点からスタートだ。
ちょっと確認するだけ。
僕はこうしてひさしぶりに、食料調達以外の理由で出発する。

5

なんとなく、町がめちゃくちゃになっているだろうと思っていた。
瓦礫(がれき)の山があって、死体がころがって、死のにおいが充満して……
という景色を予想していたのだが、みごとに裏切られた。

[illegible]
コンビニエンスストアも、アパートの窓から見えていた住宅地も、風情のある電信柱も、町をかこむように広がる山々も、変化がなかった。うす暗い町には、いつもの風景があった。

ただひとつ、人間の姿がないという点をのぞけば。

「だれかいませんか」
呼びかけてみたかったけど、本当にだれかいたら恥ずかしいし、本当にだれもいなかったら不安なので、僕は無言のまま散策する。
コンビニには明かりがともっていて、マクドナルドにもついさっきまで商売がおこなわれていた形跡がある。住宅にも異変はないし、道路にはエンジンをかけたままの車もあった。
ない。つまり人間だけ。

ないのに人間だけ

　とあるエスキモーの村に行きますと、人間の姿がありませんでした。小屋には食べかけの食事や、上着に使うアザラシの毛皮が残されたままでした。村人たちがどこに行ったのか、なぜ消えたのかは、いまだにわかっておりません。

チビのころに読んだ怪奇譚（たん）を、つい思い出す。
こういうパターンでくるとは。
人が殺されまくっているとか、町が壊されまくっているとか、ステレオタイプな終末観をイメージしていたのに、やってきたのはシューレ。

シュールは好きじゃないし、それを汲み取るセンスもない僕は、急激なストレスに胃を痛めるばかり。ハンバーガーやらポテトやらを吐き出しそうになる。

人間がいない。

なのに町の風景はいつも通りで、その不変さがかえって気味悪い。

気がつくと、駆け出していた。

走り回り、走り疲れ、気がつくと大きな通りに出ていた。

「いででっ！」

運動不足の体は悲鳴を上げ、脚を攣（つ）ってしまう。たまらずその場に倒れた。何度さすっても脚は戻らない。走る前にストレッチをしなかったのが悔やまれた……いや、ストレッチに効果のないことは、すでに証明されている。僕がポンコツであることと同様に。

に立証されている、僕がポンコツであることと同様に
なさけなかった。
世界が前代未聞の異常事態につつまれている中、脚を攣ってしくしくしている男が自分だと思うとなさけなかった。
「おりゃー」

そんな僕を、何者かが殴(なぐ)りつけてくる。
巨大なカバンのようなものが、顔面に叩きこまれた。
僕は地面をころがった。顔全体が痺れ、いまいち感覚がない。視界もぐらつく。鼻先に触れてみると鼻血でよごれていた。
ちくしょう。
やっぱりこれか。

こういう役回りか。
世界が変わっても、僕の立場は変わらない。
才能ないから。
モブキャラだから。
痛みと怒りと、あとはよくわからない感情の中で顔を上げると、ぐらついた視界に何かが映った。
巨大なカバンのようなものを引きずった何者かが、ゆっくりと近づいてくる。
ガラガラガラガラ！
重たそうなものを引きずる音を立てて、すぐそばまでやってくる。
僕はほとんど無意識の怒りの中で、自由が利くほうの脚を使って蹴りつけた。
「ふぎょん」

「ぎゃん」

という奇妙な悲鳴とともに、そいつは吹っ飛んだ。え。びっくり。

蹴りが当たった。

しかも美少女だった。

6

「どうしてそんなに私を凝視するのですか？」

「ご、ごめん」

「あやまるなんて、まるで初心者。うふふふ。私は気にしませんよ。見られるのには慣れています」

「そうじゃなくて、蹴ってごめん」

「本当に初心者ですね。蹴ったのは私のほうなのですから、そちらに

「本当に被害者ですわ。襲ったのは私のほうなのですから、あなたに責任はありませんよ。訴えたりはしませんよ」

「それは安心……」

「私も安心。ようやく第一村人を発見できましたから」

くり返そう。

美少女だった。

綺麗に揃えられた前髪。

すらりとのびた長い手脚。

やや吊り目がちの大きな瞳。

「うふふふ」

そして微笑。

上品だけどいたずら好きの猫が、そのまま人間になった感じ。

自分より一回りは年下と思われる少女を見て、こんなことを思うの

は不道徳かもしれないが、胸がときめいた。
　ざまあみろ。
　だれに云ってるわけじゃないけど。
「青葉さとみと云います。どうぞよろしく、第一村人さん」
　美少女は名乗り、気持ちのいい角度でお辞儀をした。
　名前の通り、すがすがしい青葉のような長い髪が揺れた。
「ここは村じゃなくて町だけどね」僕はどうでもいい訂正をする。
「あの、こんな町まで何しにきたの」
「失恋旅行です」
　青葉と名乗った少女は、服装も髪型も垢抜けているし、僕を負傷させたキャリーバッグは重そうで、たしかに外からやってきた旅行者に見えた。

でもこの町には、有名なピアニストの生家があるくらいで、あとは見るべきものはなく、うんざりするほどの自然が広がっているだけ。どこかの観光地に向かう途中だろうか……っていうか、これほどの美人さんでも失恋かよ。『外』は怖いなと思った。

「ところで、この町はどうしてしまったのでしょう。ひとがいませんが」

青葉は女子アナウンサーのように、微笑を浮かべたまま質問する。

「いや、じつは僕もよく知らなくて」

「知らない？」

「寝てたから」

「おやおや？」

「だって、眠かったから」

クラ代表みたいな受け答えだったが、まともに人間と話すのはひさしぶりだし、それが美少女とくれば仕方ない……ということにしてほしい。

「うふふふ」青葉は不意に笑い出す。「よくわかりました」

「何が」

「初心者ですね」

「だから何が」

「人生の初心者」

「え？」

「自分の人生を、うまくやれていないご様子。あるていどの成功体験がないと、初心者から脱却するのはむずかしいです」

「…………」

「失恋

「鉄棒やギターといっしょです。最初の一歩で躓くと、逆上がりもアルペジオもできない」

「初対面で、きびしいこと云うね」

「いけません？」

「僕を見て、つい説教したくなる気持ちはわかるよ。でもその前に、何が起こったのか教えてほしいんだ。僕はその、本当に寝ていて……」

「十神白夜の仕業(しわざ)でしょう」

7

このタイミングで、言葉の口からその名が出たのは、さすがにおかし

このタイミングで、青葉の口からその名が出たのは、さすがにおどろく。
十神白夜は有名人ではあるけど、若い女の子に知られているタイプではないし、こんなときに出てくる名前でもない。
「まさか『世界征服宣言』を知らないのですか？」
困惑していると、青葉はさらに困惑したように首をかしげた。そんな反応されてもこまる。『世界征服宣言』なんて知らない。そんな頭の悪い宣言なんて知らない。
というわけで。
すべてを聞かされた僕は、まあその、なんというか、ぐったりした。
十神白夜がプラハで世界征服を宣言したって？
二十四時間以内に本人を殺すか、『かわいそうな牛』（なんだそ

れ）を見つけなければ世界を征服するって？　『宣言』が本気である証拠を見せるために、地中海の島に人工衛星を落としたって？

　ふざけているのか。

　っていうか、どうしてプラハ？　自家用ジェット？　腹が立つ。ポイントカードで財布をパンパンにしたこともない人間め。

「十神白夜ってのは、鼻持ちならないやつだ」僕は云った。「『超高校級の御曹司』で、日本人なのに金髪碧眼（きんぱつへきがん）で、自称『超高校級の完璧』で、デイトレードで四百億円くらい稼いで、キレ眼鏡で……」

「お知り合いですか？」

「まさか」

「そのわりには、くわしいですね」

くれしい？
決まってるだろ。
大好きな希望。
大嫌いな希望。
僕は。
僕はずっと。

「僕はずっと、希望ヶ峰学園に入りたかったからね」

「まあ」青葉が声を上げる。「私の友達に、希望ヶ峰学園に入った子がいますよ」
「そうなの？」
「う[illegible]

「おじさんには　どんな才能か？」

心を傷つけたのはどっちのワードだろうかと考えたけど、ま、両方ですね。

「才能なんてなかった」

だけど夢はあった。

メジャーリーグの中継を観た少年が、『メジャーリーガーになりたいな』と淡い夢を持ったとき、たまたま花屋の前を通りかかった少女が、『お花屋さんになりたいな』と小さな夢をいだいたとき、自分にその才能がないと冷静に判断して、夢から降りるやつはまずいない。

僕には夢があった。

霧間誠一や島辺博人や杉田古城や関口巽や夢野久作やキルゴア・トラウトやデレク・ハートフィールドを読んだ僕には夢があった。

なかったのは才能だけ。

今はそんなことどうでもいい。

僕たちは情報を交換する。十神白夜がプラハで『世界征服宣言』を発したとき、僕はアパートで寝逃げしていて、おそらくそのあいだに町は無人と化し、すべてが終了したあとに青葉がやってきた。という流れだった。

すぐに浮かぶ疑問はみっつ。

疑問その一。

なんだってこんなド田舎を襲った？

世界征服の第一歩として攻撃するなら、それこそまさにうってつけという都市は、あちこちにある。札幌でもニューヨークでもボローニャでも安慶（あんけい）でもいいはずなのに、どうしてここをターゲットに？

疑問その二。

町の人間をなぜ消した？
己の力を見せつけ、恐怖を植えつけるのに最適な手法は殺しだ。消すというのはどこかポイントがずれているように思う。それとも、何かしらの理由があるのか。

疑問その三。

「きみ、なんで僕を殴ったの？」

「おじさんが町の住民という保証はありませんでした。なので、まずは戦意を喪失させてから話を聞こうかと」

「何その発想。軍人みたいな」

「軍人って、そんなおそろしいことをするのですか？」

「知らないけどさ……」

ガラガラガラガラガラ！

僕を攻撃したキャリーバックを引いて、青葉はどこかに行こうとした。
「ま、待って。気に障ったんならあやまる」
「気に障るようなことを云いました？」青葉がふり返る。「すぐ謝罪するのは初心者です。罪悪感なんて、持ったほうの負けですよ」
「悪かった」僕には結局、あやまることしか思いつかない。「ねえ、頼むから待ってよ。どこに行くんだよ」
「確認です」
「確認？」
「町のひとたちがどこに消えたのか確認します」
「心当たりがあるの？」
「心当たりも何も、ひとつしかありません」

「わからない……どこ？」

「家の中」

8

木を隠すなら森の中。ではないが、町のひとたちを連れ去るよりも、それぞれの家に入れておくほうが簡単だし、効率もいい。

しかしなぜ家から出てこないのか。

出てこられない事情でもあるのか。

嫌な発想が広がりかけたので、頭ではなく体を使うことにした。

僕たちは一軒の家に目をつける。

庭の大きな、赤い屋根の家。

明かりはついていない。

青葉がインターホンを押す。
反応なし。
もう一度。
反応なし。
青葉はドアノブを回すが、当たり前というべきか鍵がかかっていた。
「お庭に回ってみましょう」
とはいえ庭に面した窓にも、やはり当たり前というべきか鍵がかかっていた。
「ね、ねえ、あきらめようよ」僕は気後れして云った。「鍵がかけられてるんじゃ、どうしようも……」
「どいて」

青葉はキャリーバッグを持ち上げると、窓にほうり投げた。
想像の七倍くらい大きな音が、無人の町に響き渡る。
「これで入れます」
破片がついたキャリーバッグを引きずり、青葉はリビングに入った。
今さら逃げられない。僕もあとにつづく。電気をつけてから一階を捜索(そうさく)。次々にドアを開けてみたが、これといった異変や異常は見つからなかった。よくある間取りに、よくある調度品が置かれているだけだった。
あとは寝室だけ。
青葉はすでにその前に立っていて、僕が何かを云うよりも早くドアを──……。

ノブを回した。

ドアが開かれた。

中学生……高校生か？

まあどっちでもいい。

死んでいるのだから。

その男子は、部屋の壁に磔（はりつけ）にされていた。

両手に深々と突き刺さったハサミが、華奢な体をささえている。

腹部にも数本のハサミが刺さっていて、そのうちのどれか、あるいはすべてが致命傷だったのだろう、大量の血が流れ出ていた。

礫にされた死体の横には、おそらく被害者自身の血で、そう書かれていた。

僕たちは家を飛び出す。

今この目で見たばかりの惨劇（さんげき）など存在しなかったように、町は静寂につつまれていた。

風がないため雲は動かず、人間がいないため音もなく、家々のドアは閉ざされ、まるでよくできたミニチュアみたい。

残された道は、ふたつ。

見るか。

見ないか。

「見ましょう」

ですよね。

青葉がそう云うことはわかっていたが、吐き気がこみ上げてくる。
覚悟や諦念(ていねん)なんて何も意味がなかった。
僕たちは短く相談して、裏通りにある家に狙いをさだめた。居住エリアが変われば、生存の可能性も変わるだろうというのは、完全なる希望的観測だが、こんな確認作業、希望がなければやってられない。
先ほどと同じように窓をブチ破り、先ほどと同じようにリビングから侵入。
こんどの死体はシャワールームにあった。
中学生……高校生か？
まあどっちでもいい。
死んでいるのだから。
その女子は、浴槽(よくそう)に突っこまれていた。

首に突き刺さっているのはナイフ。

ちょっとやそっとでは抜けないような深さで刺さったそれは、うす暗い浴槽の中で妖しく光っている。死体の服は血で染まり、もとの色がわからない。

僕たちはふたたび家を飛び出し、気づくと最初に出会った通りに立っていた。

どれくらいの時が流れただろうか。どれくらい放心し、沈黙していただろうか。僕たちは顔を見合わせ、荒い息を吐き、ただそこにいた。

やがて青葉が云った。

しょう

「……最初の死体は、ジェノサイダー翔ではありませんか」
「すると二番目の死体は、突き刺しジャックかな」

ジェノサイダー翔。

日本中を騒がせている連続殺人鬼。
十代から二十代の男性をターゲットとして、ハサミでメッタ刺しにするそいつは、被害者自身の血で『チミドロフィーバー』と、犬がマーキングでもするように殺害現場に書き残していた。異常性。残虐性。そして妙にポップなやりくちと、手がかりをつかませない手腕から、『都市伝説』とまで云われている。

突き刺しジャック。

こちらは少女専門の連続殺人鬼。

殺害方法は、首にナイフを一突きというシンプルなもの。現在までに七十七人の少女が犠牲（ぎせい）となっている。その神出鬼没（しんしゅつきぼつ）ぶりに、ＰＴＡや人権擁護団体には頗る（すこぶる）評判が悪いけれど視聴率は上々で世間からは長寿番組になるのではとの皮肉も出ている『本日の突き刺しジャック予報』なる三分間番組もあるほどだった。

ジェノサイダー翔も、突き刺しジャックも、日本を代表するシリアルキラーで、その正体は闇の中。

警察はもちろん、探偵図書館に登録されているゼロクラスの探偵すら、解決の糸口を見つけられていないと聞く。

噂ではついに日本探偵倶楽部（JDC）に捜査を頼んだとか頼んでいないと

か。大統合全一学研究所(ER3システム)に解決を頼んだとか頼んでいないとか。
「でもあれは、模倣犯(もほうはん)だろうね」
僕はいろんな面倒を避けるため、早々と云った。
たまたまふたりの殺人鬼が同じ町にやってきて、たまたま同時に殺した？
荒唐無稽(こうとうむけい)すぎる。

そりゃまあ、連続殺人鬼の模倣犯が、この町を荒らしたと考えるのも荒唐無稽だが、十神白夜が本気になってその荒唐無稽を計画したとすれば、やれるかもしれない。
でもなんでそんなこと。世界征服？　本気でするつもり？　だとしたら、十神白夜には失望だ。

世界征服なんて、どおおおおおおおぉぉでもいい。

世界を手中におさめたところで、やることはアパートの管理人といっしょ。家賃をもらって、苦情を聞いて、リフォームをして、何が楽しいのそれ。

この世を支配するのと、この世を才能で飛び回るのは、イコールではない。

そのていどのことくらい、十神白夜であれば知っているはずだが。

あいつがプラハでぶち上げたという、『世界征服宣言』の詳細が気になった。

「おじさん、ほかの家もしらべてみましょう」

気がめいる言葉のオンパレード。
どんな情報でもほしい僕たちは、うんざりするだけの捜索をつづけた。
結果。
十五の家をしらべて、十五の死体を見つけた。
ある人はウエディングドレス姿で四肢（しし）を切断されて。
ある人は胸を日本刀（同田貫（どうだぬき））で深々と貫かれて。
ある人は金魚がおよぐ水槽に頭を突っこまれて。
ある人は業務用冷凍庫の中で氷漬けにされて。
ある人は自分の血液でメッセージを書いて。
ほかの十体は割愛してもいいだろう。バラバラ死体とか、首なし死体とか、なんかそういう異様なアレだ。
異様といえば、確認した十五の家には、すべて鍵がかかっていた。

玄関ドアはもちろん、天井裏や風呂場の小窓すら施錠されていた。

密室だった。

しかも密室は、それだけにとどまらない。

鳥カゴの中では鳥が、犬小屋の中では犬が死んでいたのだが、鳥籠の扉には針金が巻かれていたし、犬小屋の出入口には板が打ちつけられていた。もうちょっと云ってしまうと、赤ん坊の死体が入った電子レンジには鎖が巻かれ、仔猫の死体が入った電気ポットのフタにはガムテープが貼られていた。

えっと……。

この町にいた全生物は、僕と青葉をのぞいて、すべて密室内で殺さ

れているという結論でよろしいのかな。だとすれば。

9

壊れてやんの、世界。

10

こうなってくると、店くらい荒らしちゃうよね。

僕たちは無人となったスーパーマーケットの棚から、好き勝手に食べ物を引っぱり出す。

野菜ケースを裏返して作った即席のテーブルに、ソーセージやらズ

ッキーニやらを置いて、僕は缶ビールを飲んでいた。
ふだんはニコチンもアルコールも受けつけないのだが、さすがは非常時。ぼんやりした酔いが心地いい。
体が酒を欲するなんて、絶望だらけの卒業式以来か。
あのときはしこたま飲んで、二日酔い……三日酔いに襲われたっけ。飲んで飲んで飲み潰れたあと、『個人的な体験』の主人公みたいに吐きまくったけど、内部に染みこんだ絶望までは排出されなかった。
希望によって植えつけられた『個人的な絶望』は僕をくるしめて、だからモグラになるほかなかった。安心を買い、安眠に逃げるほかなかった。
僕は希望に潰されて、希望のない世界に生きた。
部屋から出ず、希望の見えない場所に安住した。

「うふふふ」

「き、きみ……なんで笑っていられるの？」

「おじさんは、やはり初心者。むりにでも笑えば、心が落ちつきますよ」

「そういうもんかな」

「笑ってみたらいかがですか。さあ、私といっしょに。うふふふふふ……ん？　何これおいしい。これ食べてみてくださいよ。とってもおいしい」

なのにどうして外に出て、食事で人とつながろうとしているのだろう？

青葉が手渡してくれた外国製のグミは、なんというか自転車のタイヤみたいな味だった。自分の嗜好と合わないものを口にするなんてい

つぶりだろう。他人といると、こういう目によく遭ったものだ。好きでもないものを食わされ、読まされ、見させられたものだ。

「もぐもぐ」

グミを食べながら店内を歩く青葉の目は、いたずらの計画を立案する猫のように輝いていた。

本人の証言によれば、ここにきたのは失恋旅行ということだし、死体を目にしたときも憔悴（しょうすい）しているように見えた。そういう意味では、普通の女の子なのだろう。

だけど。

回復力。

それが尋常ではなかった。

意味不明な事態に巻きこまれ、たくさんの死体を見たばかりだというのに、立ち直っているようにしか見えない。
どんな人生を歩んできたのか。
「これからどうしよう」いっぽうの僕は疲れ切っていた。「もう、死体を見たくはないよ」
「もぐもぐ。これ以上の収穫はなさそうですし、ほかの町も気になるので、移動しましょうか」
「賛成。大賛成だ」
「おじさんの家族や知り合いは？」
「いないよ」
「恋人も？」
「何を聞いてくるんだか。親はここに住んじゃいないし、そもそも友

達なんていない」
「ご愁傷様（しゅうしょうさま）」
「え？」
「ご・しゅー・しょー・さま」青葉は区切るように云った。「名案があるんです。私たち、別行動しませんか」
「ち、ちょっと待って。何それ」
「『何それ』とは？」
「それのどこが名案なわけ。生存者同士がバラバラになっても……」
「うふふふ。おじさんと行動をともにしても、プラスを感じられません」
　青葉は笑みを浮かべて、はっきりと云った。
「あのでも、え、えっと」僕は深くショックを受けながら、それでも必死に思考を回転させる。「ほら、袖振り合うも他生（たしょう）の縁って云う

じゃない。大化の改新を起こした中大兄皇子と中臣鎌足だって、蹴鞠で知り合った仲なんだよ」

「蹴鞠？」

「知らないの。大化の改新」

「たぶん私はそれを、乙巳の変と習いました」

ジェネレーションギャップに動揺している場合じゃない。僕は必死に懇願し、さらには、このあたりの地理にくわしいこと、車を運転できることを宣伝した。こんなにも自己アピールをしたことはなかった。

しぶしぶといった感じだが、青葉は僕と同行することに決めてくれた。

気が変わらないうちに移動開始。

僕たちはスーパーマーケットを出る。
すぐ横を歩くのは美少女。
こんな上玉をつれて歩くのは、人生ではじめてだ。
でも少しでも油断すれば、青葉は僕を見捨ててどこかに行ってしまう。平時ならともかく、こんな異常事態なのに。
いや。
異常事態だからこそ、強くなければいけないのか。
男って、しんどかったんだな。
強くないと価値がないなんて。
「ところで、おじさんの車はどちらに？」
「車なんて持ってないけど」
「…………」

「ちょ、あの、待って待って。あれをいただこう」
僕は路肩に置かれた旧型のトヨタカローラに駆け寄った。
スーパーから失敬した針金を、釣り針のようにまげてから（自主規制）すると、運転席のドアが開いた。それからハンドルの下に手を回して（自主規制）すると、エンジンもかかってくれる。
青葉はその様子を、わりと引いた顔つきで見ていた。
「おじさん、どこでそんな技を」
「昔、ネットでしらべて」
「どうして」
「その、強くなりたくて……」
「はい？」

コトン

物音が聞こえた。

青葉は僕を見ている。

僕は。

僕は。

僕は聞こえなかったことにした。

青葉は短く息を吐くと、キャリーバッグを引きずり、物音のした方向に移動してしまう。

ゴトン

次の音は重く、ボウリングの球でも落としたように腹に響いた。こ

まったことに家が特定できるほどの大きさだった。
ああもう！
僕は青葉を追った。
音の発生源と思われる家の前には、すでに青葉が立っていた。
「どうしてついてきたんですか」
「そりゃ、心配だったから……」
「開けます」
青葉がドアノブに手をかけると、あっさりと開いた。
僕たちが入った十五戸の家には、すべて鍵がかかっていたのに。
侵入。
リビング。異常なし。キッチン。異常なし。シャワールーム。異常なし。

二階につづく階段を進み、寝室と思われるドアに近づいた瞬間、室内から声が漏れた。
「おい部長。どーすんだよコレ！　ノコギリじゃうまく切れんぞ！」
「だから僕は云ったのだ副部長。切断するなら、まず死体を凍らせろとね」
「わっははは～～！　冷凍マグロですネ！　わくわく」
「ほらこれ見ろって。血でヌルヌルだって。すっげーすべる！」
「同情などしない。僕の助言を聞かないきみが悪いのだ」
「ヌルヌルすぎるって！　ウナギみたいだって！　絶対これ俺のトラウマになって、いつのまにか性癖になるんだって！」
「いいから、しゃべってないで切り落とすのだ」
「うははは～い！　四肢切断ですネ！　どきどき」

ぞっとした。
子供の声だったから。
第二次性徴によって変わりつつあるが、それでもまだ甲高い声だったから。
そんな子供たちの会話から察するに、死体を切り落としているらしい。
先ほど聞こえた『ゴトン』という音を思い出す。どの部位を切断したのか。
「に、逃げよう」僕は云った。「もう限界だ。逃げよう」
「でも」
「何云ってんだ。『でも』ってなんだよ。助けるなんてむりだぞ……」
「その通りなのだ」ドアが開かれて、学生服姿の少年が出てくる。

「死者を救済することはできない。ただひとつ、密室をのぞいてね」

11

「ゲームや漫画や小説で、死体を前に会話するシーンをよく見るが、現実的ではない。死体を甘く見すぎている。あのような芸当、よほどのプロでなければ不可能なのだ。というわけで僕らは、死体なき場所で死体について話すとしよう」

僕たちは一階のリビングにいる。

高級そうな絨毯（じゅうたん）。年代物のソファ。壁にはミュシャのレプリカが飾られている。大きなテーブルにあるのは、アンティークのティーカップや砂糖壺（つぼ）。

そんなヨーロッパテイストあふれる室内で、グループのリーダーと思(おぼ)しき少年が、ペラペラとしゃべっていた。
学生服に学生帽の中学生。
懐古(レトロ)を通り越して仮装(コスプレ)だ。
その隣にどっかり座る図体のでかい少年は、同じ服装ではあったが、クッキー缶をかかえて食い散らかしてまるでゴリライモ。
もうひとりは制服姿の少女で、紅茶の準備をしていた。
「ふっふふ～～ん。はいどうぞお客様。ダージリンなの。たぶんだけどネ！」
少女は僕の前に紅茶を置く。
「ビール」
「はい？」

「ビールくらいあるだろ。冷蔵庫に」
僕はできるだけ威圧的に云った。
「はあぁ～い！　どう見ても未成年じゃないので、ただちに持ってきますネ！　ボクはリクエストに応えるの大好きだから」
ボクっ娘か。最近はみんな、装備過多で大変そうだね。
このように混沌としたリビングで、青葉は出された紅茶を飲んでいた。
あいかわらずのクソ回復力。
「ところで、よくも生きのびることができたな」少年が云った。「まさか連絡にあった『規格外』……には見えないが」
僕は反応できない。
だって『規格外』と呼ばれたことなんて一度もないから。

「あなたたちは、『世界は密室でできている』という言葉にピンとくるかな」
やはり僕は反応できない。
だって世界は密室でできちゃいないから。
「お客様、おまたせしましたの助〜！」
少女が運んできた瓶ビールのラベルには、ピルスナー・ウルケルと書かれていて、僕としてはそういうのじゃなくて、サッポロビールとか金麦とかが飲みたかったのだが、文句は云っていられない。
ビールを一気にあおる。
さて。
お酒パワーで乗り切ろう。
「僕は大人だ。えっと、つまりその、ガキの主張を聞く気はないんだー

」

「恥ずべき存在というわけだな」

「きみたちは、十神白夜の仲間？」

「なぜ、そのように推理したのだ」

「べつに推理じゃない」

「たしかに」少年はうなずく。「推論。推察。推測。『推』なる高尚な文字が出てくる幕ではない。猿でも思いつくレベルだ」

「…………」

「だがそれでも、この場で、この空気で、このタイミングで、十神白夜の名前を出したことは評価しよう。僕たちはずばり、希望ヶ峰学園の学生なのだ」

今なんて云った。

希望ヶ峰学園？

「とうっ！」「てやっ！」「ぱうっ！」
三人の学生はソファに飛び乗ると、微妙に古くさいポーズを決めた。
「月の光は愛のダイイングメッセージ。僕は『超中学生級のミステリマニア』こと、部長！」
「伊達にネタバレは見てねーぜ。俺は『超中学生級のミステリファン』こと、副部長！」
「んちゃ。ボクは……えと、あまりミステリに興味がない、普通の会計！」
「我ら三人、謎のため！」「命をかけて、立ち向かう！」「その名も！」

「希望ヶ峰学園付属中学校ミステリー研究会！」

うーんこの。

さすが文系。

全員の動きがズレていた。

でも本人たちは満足しているようで、清々しい汗をかいている。ちょっと青春っぽい空気とかも出している。

僕はそのすべてを。

「あっはははははははははは」

笑い飛ばしてやった。

私立希望ヶ峰学園。
特別な才能を持つ高校生だけが入学できる政府公認の学園は、完全スカウト制。
付属学校という道は用意されているが、エスカレーター式の進学がみとめられたわけではなく、スカウトの壁はつねに立ちはだかっていた。
それでも付属学校で活躍すれば、スカウトの目にはとまりやすくなり、さらには才能の効率的な見つけ方や、効果的な引き出し方などがカリキュラムに組まれ、また本科との交流で『才能に目覚める』生徒もいた。
でもまあ、ほとんどが本科に入れないいんだけどね。
大半が付属学校を卒業したあと、普通の高校に行くんだけどね。

ちなみに希望ヶ峰学園には、付属学校とべつに予備学科なる制度もあるが、こちらにかんしては笑う気すらない。希望ヶ峰学園の名札ほしさに金を積んで入るそこは、陰で『ゴミ学科』と呼ばれている。

そして僕にしてみれば、付属学校も予備学科も同じ。

本当の才能じゃない。

本物の才能じゃない。

モグラと変わらない。

だから笑い飛ばしてやったまで。

いばりくさって『外』を歩くな。

僕の爆笑を見て、付属学校の学生たちは当惑していた。
「お客様が発狂なさったです～」
会計と名乗った少女が云った。
「こいつ、俺たちのこと笑ってるんじゃゃね？」

「そのようなのだ。それも、熱意と執念のこもった笑いで」
「あっはははははは」酒の力もあるだろうが、僕は強気に笑う。「びっくりさせやがって。何が、『僕たちは希望ヶ峰学園の学生だ』だよ。ただの付属校じゃないか。予備学科と五十歩百歩じゃないか」
「聞き捨てならねえなあ」副部長と名乗ったデカブツが云う。「俺たちをゴミ学科といっしょにすんな」
「どっちもいっしょだよ。希望にあこがれて、でも希望になれないん

だから」
「ゴミ学科はそうかもしれねーけど……」
「知ってる？　付属校から本科に進む人数と、一般の学校からスカウトされる人数って、後者のほうが多いんだって」
「くわしいじゃねえか。たしかにあんたの云う通りだ。でも付属校にはなぁ、ポスト希望ヶ峰学園がたくさんいるんだぜ。『超小学生級の学活の時間』とか、『超中学生級の茶道部員』とか……」
「そのくらいにするのだ」弁明をやめさせたのは、部長と名乗った少年だった。「僕たちが本科の生徒ではない以上、付属校のヒヨコちゃんである以上、何を云っても説得力ゼロなのだ」
「でも腹立つじゃねえか。こんなやつに、自分たちの才能を否定されてよぉ」
「副部長、忘れてはいけないのだ。今の僕たちは本科に入らずとも、

「副部長、忘れてはいけないのだ。今の僕たちは不和に入ろうとする
世界に自分たちの才能を見せつけているではないか」
「何それ」僕はおもしろくなって追及する。「じゃあこれは、自分たちが学園に入れないことに気づいて起こしたヤケ？　それを才能って云ってる？」
くだらない思考。
ピカソの絵を壊して、『ガッとやってやったぜ！』と叫んでいる自称アーティストといっしょだ。
人生がうまくいかなくて積極的に『絶望小説』を読み、『絶望病』にかかって幸福に暴れる不満足人間といっしょだ。
「あなたはずいぶん、悪口が的確だね。長いこと劣等感に支配されていたのだろうな」部長が指摘する。「僕も質問していい？」
「なんだよ」

「えへえ。」

「おいくつ？」

「……まだ干支を三巡はしてない」

気の利いた返しができたと思ったけど、それほどでもないと思い直してげんなりする。

やめろよ。

年齢の話をするんじゃないよ。

僕の攻撃は結局、社会に負けた高卒が、予備校生を上から目線……いや、下から上から目線で愚弄するようなものだ。

相手が真顔になった瞬間、こっちはただのオッサンになってしまう。才能に見放されたモグラになってしまう。

「うふふふ」

笑い声がリビングに響いた。

美少女が、静かな動作でティーカップを置く。
「話題を本筋に戻しません？」青葉は微笑を浮かべたまま云った。
「付属学校のみなさんは、テロ活動をしているわけですね。これは希望ヶ峰学園の主導ではないのですね」
「無論なのだ。希望が大好きな希望ヶ峰学園が、絶望を助長するはずがない」
「なぜこんなことを。脱線しましたか」
「分裂と云ってほしいのだ。どんなところにも分派は生まれる。分派はいつだって過激で嫌われ者だが、やがてはそれが正道となる。ミステリの歴史のようにね」
「十神白夜との関係は？」
「先輩であり、ボスでもある。とはいえ僕たちは、あの種の世界征服

に興味はない。ミステリに無数の定義があるように、世界征服の内容も人それぞれなのだ。僕たちミス研は、世界全体に救済を広げることができればそれでいい」
「意味がわかりません」
「世間の理解には興味なし。自分の信ずる道のほかに興味なし。これもまた、ミステリの歴史のようにね」
「さっきから気になっていたのですが、『ミステリ』ってなんですか」
「あ？」「い？」「う？」
　希望ヶ峰学園付属中学校ミステリー研究会のみなさんが、硬直した。
　部長は表情をうしない、副部長はクッキーを口からこぼし、会計はティーカップをがちゃがちゃ鳴らしている。

ティーカップをかちゃかちゃ鳴らしている。

「推理小説のことだよ」僕は補足してやる。「ミステリー研究会っていうのは、推理小説同好会って意味合いだと思う」

「どうして彼らは、『ミステリ』と『ミステリー』を使い分けているのでしょう」

「さあ。美学じゃないかな？」

「面倒くさそう」

「……あなたたちは、死体を見たかね」部長が低い声で云う。「僕たちが丹誠(たんせい)こめて作った死体を見たかね」

「お米みたいな云い方ですね。見ましたけど」

「見立てには気づいたかね」

「なんですかそれ」

「変えてくる」部長はため息を吐いた。「メタファーなのだメタファ

「疲れてくる」部長はため息を吐いた。「ミステリ、なのかミステリー。石や砂で水を表現する枯山水（かれさんすい）のようにね。『犬神家の一族』くらいは知ってるだろ」
「おじさんは読みました？」
「『チボー家の人々』なら」僕は答えた。「その説明で、だいたいわかった。ジェノサイダー翔や突き刺しジャックの犯行に見立てて、死体を装飾したわけだな」
「現実の事件だけではないのだ。ミステリ作品の見立てには気づいたかね」
「んー」
「特別にネタバレをしてやろう。胸に日本刀が突き刺さった死体だが、あれは『弐日幽霊屋敷殺人事件』の見立て。ウェディングドレス

え、あれは『武田幽霊屋敷殺人事件』の見立て
を着て手足を切断された死体は、『すべてがFになる』の……」
「んー」
「まさかそれも知らないのか？」
「それって前に、アニメかドラマやってた？」
「話題を変えよう」
「たしかサリンジャーは、自作の映像化を決してみとめなかったらしいけど」
　僕は指摘した。
「悪かった！」部長は頭をかかえる。「ああもう、なんて惨状だ。なんて惨劇だ。どうしてこんなことに……」
「部長さん、こらえてこらえて。冬の時代なの」会計はなぜか楽しそう。「だからボクといっしょに、凍えそうな季節に愛をどうこう云い

ましょうよー」
「栄華をきわめたミステリが、今や氷河期の真っ只中なのは理解しているつもりだ」
「勝利に慣れてない業界だったから、天下を持続させる技術がなかったわけですネ」
「会計、きみはだれの味方なのだ」
「ボクは部長さんの味方！　今からスポーツブラを外すから、ゆるしての助〜。もぞもぞ」
「ミステリは負けたのでも滅んだのでもなく、役目を果たしたのだと僕は思っている。種として散り、あらゆるジャンル、あらゆる文化に浸透した」
「まーまー部長さん、そのおかげで、ボクみたいなのが出てきたんで

すから、オタク文字を読むのなんてゲームくらいだけど、それでもミステリに触れることができたのは、部長さんの愛する本が養分となってくれたおかげなの。ささ、元気出して！」

「かたじけない」

「部長さんがしょんぼりしてたら、『世界密室化計画』が進まないの。この退屈な世界を密室に閉じこめて、この無意味な世界を意味のある死で満たすっていう本懐が進まないの！」

14

「ちょっと待って。それが動機？」

「その通りなのだ」気を取り直したのか、部長はすっと顔を上げた。

「僕たちは『世界密室化計画』のために人を殺している」

「僕たちは『世界密室化計画』のために人を殺している」
あっそう。
どうりで通じないわけだ。
通じないことを知り、ほっとした。
自分とこいつらが、べつの物質で作られていることを知り、安心した。
「むろん、理解してほしいとは思わない」部長はつづける。「あらゆる犯罪を、あらゆるミステリを、あらゆる密室を再現させ、そこに死体を納めるという儀式に美しさを感じるのは、あまり一般的な感性ではないのだ」
「……一応、自覚症状はあるんだね」
「自分の狂気を自覚してこそのマニアなのだ」
「マニアはみんな狂ってる」

「そしてマニアはみんな、『狂ってる』と云われると興奮する」
「十神白夜もミステリマニア？」
「いや、十神氏はただの出資者なのだ。彼は自分の世界征服のために、僕たちが『世界密室化計画』を完遂できるだけの資金と人員を提供してくれた。この町だけではない。今ごろは世界各地で、『世界密室化計画』が同時多発的に展開しているだろう」
通じない。
それはいい。
それぞれの主張で、それぞれの才能で、それぞれが満足できることをやればいい。
でも僕にはどうしても、ただひとつ、がまんならないことがあった。

くり返そう。
世界征服なんて、どおおおおおおおぉぉでもいい。
もし十神白夜が、『超高校級の御曹司』という才能を十二分に発揮した結果として、世界征服に手を染めたのだとしても、僕はみとめてやらない。
方向性が違うから。
それは僕の求める『外』ではないから。
「今日という前夜祭(イヴ)を体験できて、うれしかろう」部長は云う。「ではそろそろ、あなたたちの退屈な人生に、彩り(いろど)を添えようと思うのだが」

「こ、殺すのか」
「どんな密室で死にたいかね。お好みのトリックはあるかね」
「あるわけないだろそんなの……」
「怒るな。こわがるな。ただ死ぬだけの無意味な生を、密室によって意味ある死に置き換えてあげようと云っているのだ。喜びの中で……」
「わかったーーーーーーーーーーっ！」
雄(お)たけびを上げたのは、気がつけばしばらく会話に参加していない副部長だった。

　副部長はクッキーの粉を口から吐き出しながら、やはりクッキーの粉がついた指で、青葉を指差している。

「静かにしてくれ副部長」もちろん部長に注意した　「僕がせっかく、あれやこれやと設定を説明して、ここぞという場面で脅しているというのに」

「いや、そんなことより」

「『そんなことより』って云った！」

「やっと思い出したぜ」副部長は青葉を見つめる。「なあもしかして、青葉さとみさん？」

「なんで名前を知ってるの」

　びっくりした僕はつい確認する。

「おいおい、なんだそのリアクションは！　あんたまさか、何も知らないで今までいっしょにいたのかよ」

「知らないって、何を？」

「青葉さとみ。こいつはアイドルだよ」

副部長はそう云うと、日本人ならだれでも知っているらしい国民的アイドルグループの名称と、そのセンターをつとめるトップアイドルの名前を口にした。

舞園（まいぞの）さやか。

世間にうとい僕が、その人物をよく知っているのは、本人の美貌や知名度によるものではなく、才能。

舞園さやかは、『超高校級のアイドル』として、希望ヶ峰学園に在籍していた。

で。

青葉が、そのアイドルグループのメンバーだって？

僕はアイドルと、壊れた世界を歩いてるって？
何その展開……。
「うわうわ。すげええええええええええ！」副部長は感激しているようだった。「つーか、なんで青葉さとみが、こんなところいるわけ。なんかのロケ？　プロモの撮影？　サインもらっていい？」
「うふふふ」
青葉は笑うだけ。

「ひゃっはー！　やったー！」副部長はそれを了承と判断したらしい。「おい部長、いらない紙くれよ。あんたがいつも持ち歩いてる本、ちょっと破ってもいいか」
「人の希少本をなんだと思っているのだ」
「ケチくせーな。ページがなきゃ謎が増えて万々歳だろ」

「わーすごいこと云うなー」
「俺ね、あんたのポジション好きだよ」副部長は上機嫌だ。「世間は舞園さやか一辺倒だし、マニアは羽山（はやま）あやかを推すけどさ、俺からすれば甘いっての」
「きみ、アイドルマニアだったのか」
部長は唖然（あぜん）としていた。
「舞園さやかをセンターとして、ステージに五人が現れる」副部長は止まらない。「ナンバー2とナンバー3が、舞園さやかの両隣に。羽山あやかが右端、青葉さとみが左端に立つ。これが定位置なんだけどさ、わかるか？　ここで人気最下位の羽山あやかを推すのって、じつは安パイなんだよなぁ」
「きみ、ミステリについてよりも熱く語っているじゃないか」

―なあ部長。『伊坂幸太郎が好き』っていうより、『麻耶雄嵩が好き』っていうほうが、ミステリにくわしそうに聞こえるだろ。カレーに入ったニンジンをうまそうに食べるガキってムカツクだろ」
「後者のたとえはよくわからないが」
「羽山あやかを推すやつは、『ドブスで不人気なアヤカネゴンを応援する自分ってセンスあるでしょ？』って宣伝してんのさ。同時にそのスタンスに安心もしてる」
「なんでもいいが、伊坂さんのフォローは忘れないでほしいのだ。あまりシャレになっていない気が……」
「舞園さやかのファンになるのも、羽山あやかのファンになるのも、俺からすりゃ同じことなんだよなぁ。ナンバー1でもナンバー5でもなく、ナンバー4の青葉さとみに注目すんのが、顔も歌も悪くないのになぜかいつもナンバー4の青葉さとみに注目すんのが、今の業界に

とっても必要な視点だと思うぜ」

そのアイドルグループにかんする知識を持たない僕が、にもかかわらず青葉の現状が手に取るようにわかる的確な説明だった。

つまり青葉は、的確に傷ついているわけだ。

なのに表情を変えない。

なのに微笑を浮かべたまま。

プロだから？

プライドがあるから？

それとも豚の悪口には慣れているから？

だったら僕といっしょだ。いっしょということにさせてくれ。

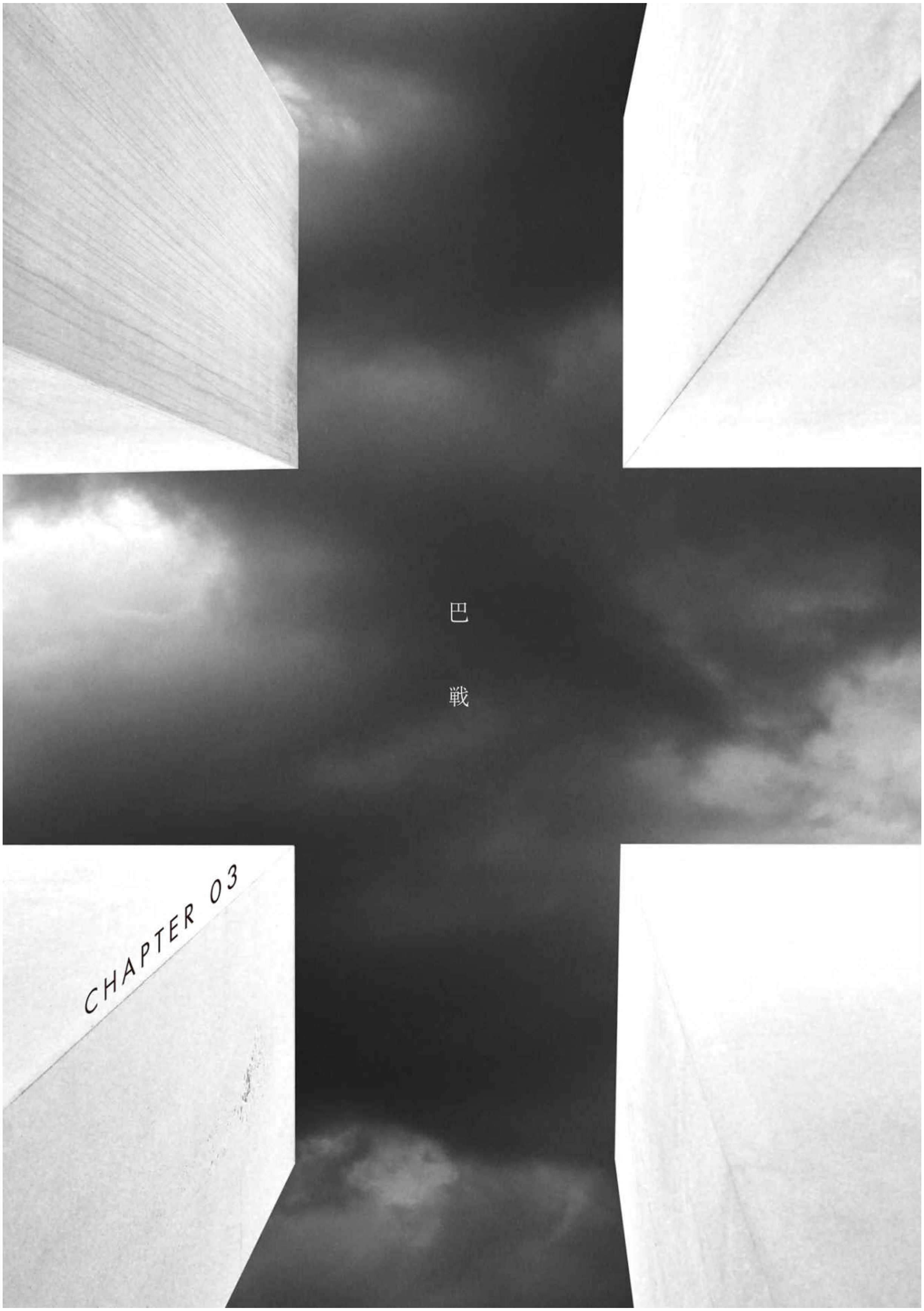
この世にはびこるインチキどもに、才能もないのに『外』でデカイ顔をするニセモノどもに、僕はずっと傷つけられてきた。才能ゼロ人

間どもに、『お前は才能ゼロ人間だ』と云われつづけてきた。
事実、あいつらは『世界密室化計画』なんていう、まさに才能ゼロ人間がやりそうなイベントを企画して、なんとか『外』で目立とうと必死じゃないか。
これ以上インチキどもに、才能のことであれこれ云われるのは、がまんならないぞ。
才能。
才能このやろう！
才能がないことをみとめようとしない付属学校の連中は、どいつもこいつも青葉に注目している。

モグラなど、どうでもいいとでもいうように。
僕は呼吸をととのえながら、手のひらの汗をひそかにぬぐう。指先が震えていた。緊張のせいか頭痛がする。成功体験のない頭に、失敗と敗北のイメージが駆けめぐる。勝てる気がしなかった。うまくやれる気がしなかった。
それでもやる。
ガッとやってやる。
僕はテーブルに手をかけ、一気にひっくり返した。
ティーカップが、皿が、スプーンが、砂糖壺が宙に舞うと、それらは才能なき中学生たちに襲いかかった。
今だ。
僕は青葉の手をつかむ。
やわらかく、冷たい手。

「いっしょに行くぞ」

そのまま青葉の手を引っぱり、リビングの窓ガラスを突き破る。
ガラスの雨を浴びながら外に飛び出すと、庭を抜けて通りに出る。
さっきの車に乗りこみ、アクセルを踏みこむ。車は一気に加速。僕たちは出発した。出発することができた。
風景が流れていく。
無人の町が流れていく。
違う。
そうではない。
ここから見えるすべての家には死体があって、密室に閉じこめられ


巴戦
CHAPTER 03

1

これは初手から負けの決まった戦いでした。

敗北主義者であれば、このような導入を書いてうっとりするのでしょう。

でも私たちは負け知らずで、向こう見ずで、のるかそるかの冒険心を忘れたこともありません。

死体。

臓物。

肉片。

脳漿。

それらが床一面にブチ撒けられていようとも、私と白夜様は前進あるのみ。

そのみ

発射された弾丸が前方にしか興味を持たないのと同じで、つまりは原理なのです。

2

セドレツ納骨堂。

クトナー・ホラという町に存在するその奇妙な建物は、約四万人分の人骨を保管し、そのうち約一万人分の人骨を使って内装していることで有名です。

祭壇（さいだん）も、天井も、聖体顕示器（せいたいけんじき）も、手すりも、紋章も、オブジェも、何もかもが人骨によって作られていました。

通称、骸骨教会。

なぜそれほどの人骨が？　というシンプルな問いに対して、ボルヘスは雄弁に応えてくれるでしょうが、歴史のお勉強をしている場合ではありません。今が、現在が、猛烈な速度で動いているのですから。

骸骨教会でもっとも見ごたえのある装飾といえば、巨大な人骨シャンデリア。

すべての部位の骨で作ったといわれるそれは、うんざりするくらい死生観を揺さぶってきますが、しかし今、人骨シャンデリアの下には、より生々しい死が広がっていました。

地獄絵図。

まだ濡（ぬ）れた肉が壁に付着し、階段の手すりに腸が引っかかり、飛び散った血が床を赤く染め上げています。おなかのすいたクマを十頭ほど乱入させなければ、これほどの景色を作ることはできないでしょ

う。
しかしこれをやりとげたのは、クマではなく人間でした。
彼らの襲撃から逃げた私は、それを知っていました。
「フン。こんなところで殺されるとはなさけない。結局はウスバカゲロウのように無意味な人生だったというわけだ」
かろうじて血の被害をまぬがれた窓枠に腰かけた白夜様は、つまらなそうに云いました。
髑髏（どくろ）の白と血の赤に、黒いタキシードが嫌味なくらい映えています。
「ふはー。今日まで何千匹とクリボーを踏んできた僕だけど、この潰し具合には言葉をうしなっちゃうなあ」
とか云いつつ言葉をうしなっていない浩之さんは、煙草に火をつけました。

唯香さんは教会内部をお散歩中です。足もとに広がる血は、さほど気にしていないご様子。赤い靴だからでしょうか。

なんとなく、『いつものメンバー』という感じが出ていて癪（しゃく）でした。

白夜様とふたりきりで逃避行。というロマンあふれる展開は、しばらく期待できないようですね。

さて。

仕事仕事。

私はこめかみに指を置いて、ボルヘスを起動させました。

生体データがなくとも、肉片、衣類、貴金属、肌の色などから、個人の特定は可能です。ようは飛行機事故の遺体確認といっしょ。

サーチしたパーツ情報を、立体パズルのように組み合わせた結果、八十三体の遺体が確認できました。そのうちの三十一体が、会員のものだと特定もできました。

三十一。

それは白夜様とソニア王女を抜かした、会員の人数と合致します。

「そろそろ教えてもらえないかな」浩之さんが煙を吐きました。「この肉のプールはどういうこと？　なんできみたちは骸骨教会に集まってたの？」

「説明してやれ」

白夜様はそれだけ云いました。

どうやらこれも私の仕事のようですね。

「偉大なる十神家の御曹司であらせられる白夜様は、『世界の選択を選択する会』のメンバーなのです」

「……ねえお嬢さん、その話って、もしかしてフリーメイソンとか出てくる？」

「出そうと思えば」

「うわあ」

「あなただって裏財閥とか云ってるじゃないですか」

「ヤブヘビだったか。どうぞつづけて」

「『世界の選択を選択する会』が、いつどのようにはじまったのか

は、私も聞かされていません。世界に危機がおとずれたときに号令がかかり、危機を回避する選択肢をひそかに誘導する結社として、何世紀も前から存在していたらしいですが」

「あそう……」浩之さんは引いていいます。「ちなみに聞くけどさ、その会員はやっぱり大物政治家とか、貴族とか、巨大財閥とか？」

「もちろんです」

「まるでビルダーバーグ会議だ」

ボルヘス＝検索結果

♯３６６９５５０１

項目　陰謀論

タイトル『ビルダーバーグ会議』

ジョセフ・レティンガーらにより、一九五四年に創立された秘密会議。

大物政治家。金融界のトップ。大企業のＣＥＯ。欧州諸国の君主。銀行家など約百三十人による会合だが、内容が非公開のため、『統一政府の樹立を画策している』『世界の総人口を調節するための、人口削減計画について話している』などの陰謀論がたえない。

「今回の号令は、白夜様がメンバーとなってはじめてのものでした。私たちはこの土日にチェコへと飛び、骸骨教会にやってきたわけです」

「いつもここで話し合いをするわけ？」

「そう聞いていますが」
「『国の財宝庫』と呼ばれた、このクトナー・ホラでねえ。ドルの由来となった銀貨が作られた、かつての金融の町でねえ。自分たちが世界を裏からあやつってるという意識が、ビシビシ伝わりますな」
「うがった見方ですよ」
「お寺の鐘に『国家安康』『君臣豊楽』って句を見つけた家康は、豊臣家を滅亡させた。暗喩は陰謀を育て、破壊を生む」浩之さんはわりとまじめな顔つきでした。「とにかく、きみたちがプラハにいた理由は、これではっきりしたよ。まさか秘密結社が出てくるとは思わなかったけどね」
「『世界の選択を選択する会』の存在を知らないあなたが、どうして今ここにいて、私たちに出会えるんです？」

「裏財閥ですからにゃあ。これくらいは朝飯前」
「あなたも、非現実な世界に生きているわけですか」
「そうはいっても、この世は現実的さ。あまりにも突拍子（とっぴょうし）のない非現実はやってこない。だからつまり、世界の選択を選択なんてできない」
「そうですか？」
「世界には、大小問わずたくさんの組織があるし、予測できないレベルの事態が日々起こっている。そんなむちゃくちゃな世界を、ひとつの意思だけでコントロールできるもんか。陰謀論は好きだけど、それをマジになって信じてるやつはアホだと思ってるよ」
浩之さんの意見に異論はありません。
世界を持ち出すまでもなく、学校でも、会社でも、家庭といった最小構成単位ですら、完璧にコントロールするのは不可能でしょう。

人権[illegible]である。完璧にコントロールするのは不可能でした。

私たちは歯車じゃない。

私たちは人形じゃない。

ギロチンの開発にたずさわったルイ十六世が、革命の際にその刃物で首を切り落とされたように、この世にはいくつもの誤算と皮肉があふれています。

世界を誘導することなど不可能。

「ただひとつ、『かわいそうな牛』をのぞいてね」

浩之さんが不敵な笑みを浮かべて、白夜様に向き直りました。

「教えてよ坊ちゃん。『世界の選択を選択する会』とやらは、どうして十神一族に近づいたのかね」

……十神一族に近づいたのだな」
「三流財閥よ、貴様は『かわいそうな牛』とやらに、心当たりがあるのか？」
「ウッシッシ。しらばっくれちゃってモー。で、どうなのかね。十神一族に近づいてきた理由は」
「十神だからだ。これ以上の理由は必要なかろう」
「…………」
「俺はただ、世界を導いてほしいと連中に要請されただけだ。内情は聞いていない」
「使い走りか。坊ちゃんらしくもない」
「立身出世に、くだらん社交はつきものだ」
「『十神一族の繁栄の秘密』をさぐろうとして、『世界の選択を選択する会』のほうから近づいてきたのかもしれないよ」

「貴様のようにか？」

「にひひ……。ところで、今回の世界の危機ってなんだったの。隕石落下？　異星人襲来？　地球温暖化？」

「決まっているだろ。『絶望小説』と『絶望病』だ」

3

ボルヘス＝検索結果

＃９２７７８０１８

項目　書籍

タイトル『絶望小説（一部制限・検証途中）』

人類を絶望させる現象、すなわち『絶望病』の発症原因とされるテキストの通称。正式タイトルは確認されているが、『絶望病』を引き起こす可能性があるため、この階層では紹介しない。

オリジナルの文章は日本語と推測されている。現時点で二十五ヶ国語に訳され、なおも世界中に広がっている。

分量は日本語換算で三千三百八十二文字（句読点含む）。短編小説に属する。ジャンルは私小説。このほかにも判明している箇所はあるが、この階層では引用、概略はおこなわない。

急速に世界に広がりつつある『絶望小説』は、『読むとかならず絶望する』と云われており、読んだ者は『絶望病』と呼ばれる症状におちいる。

現在のところ、読んでも発症しなかった者や、帰還者の例は報告されておらず、『絶望小説』このひとことを目にした以上、発症は不

これまでおよそ『絶望の詩』にて[illegible]目を通した[illegible]発症して[illegible]

可避。

速読。時間をあけて読む。読むのを途中でやめる。朗読を聞く。文字列を変える。最後のページから読むなど、発症せずに読む方法を模索しているが、安全が確認されたものはない。

各国首脳は『焚書命令』を出し、世界保健機関をはじめとする国際機関も、解決のために動いている。

ボルヘス=検索結果

#55091194

項目　病

タイトル『色望病（矯正鏡片）』

増殖をつづける『絶望小説』（♯92778018）を読み終えた『読者』がおちいる症状の通称。

どの言語であれ、『絶望小説』を読んだ者は、二十四時間以内に精神に変化が生じる。自嘲（じちょう）的。自虐的。差別的。諧謔（かいぎゃく）的。攻撃的。暴力的な側面が異様に際立ち、その心境を多くの発症者が『絶望した』と表現するところから、『絶望病』と呼ばれるようになった。

発症者は自身の衝動に素直になり、ほかの『読者』と結託して暴徒化し、希望を想起させる概念（大企業。難関学校。著名人。貴族。財閥など）に、攻撃をくわえるという特徴がある。

また、発症者が引き起こす混乱に乗じて、一部の反政府主義者やテロリストが暗躍し、内戦状態となった国も出ている。

各国首脳は発症者を隔離し、『絶望小説』を焼き払うことで対抗しているが、『読者』はウィルスのような伝播特性を持ち、翻訳し、本を刷り、ネットにデータを流すため、現在も撲滅できていない。

また『絶望小説』を読むと、かならず『絶望病』を発症するため、治療法はおろか、原因さえ特定できていない。『テロリストの兵器』『未知のウィルス』『超高校級の才能が関与している』『ただの集団催眠』などの説がある。

いまだに抜本的解決策が見つからないため、『このまま現象が拡大した場合、人類史上最大最悪の事件になるのではないか』との見

方が、一部の軍事アナリストやシンクタンクから出ている。

4

チェコ語がマイナーなためか、チェコでは不条理小説がめずらしくないためか、チェコ語訳の『絶望小説』は今のところ出回っていません。

そんな『絶望小説』の原典は、チェコ語にひけをとらないほどマイナーな言語、日本語とされています。

ですがそのわりには、国内に『絶望小説』が蔓延(まんえん)する気配はありません。

だれもが勤勉にはたらき、夜中にアニメが流れ、二十四時間営業のコンビニ[illegible]は、読書の時間など存在しない、[illegible]

コンビニが乱立する日本には、読書の時間など存在しないことを証明するように、国内の発症率は高くありませんでした。
正直なところ、私はさほど『絶望小説』に関心ありません。ニセモノが『世界征服宣言』を発し、白夜様と世界が危機におちいっている中にあっては、忘れてさえいました。
『世界の選択を選択する会』の会員であれば、遠い国で起こった紛争や伝染病などに、生々しい実感を持てるのでしょうが、私は結局のところ、庶民感覚しか持ち合わせていません。
そんな私は現在、骸骨教会の地下に作られた、隠し部屋にいました。
生存者がいるのではと期待したのですが、そこは無人でした。だれもたどり着けなかったようです。そんなひまもなかったのでしょう。
「食事は無事なようですね」髑髏のオブジェに腰かけた白夜様は満足そ

「金庫は無事だったか」髑髏のネックレスの肥えた旦那様は満足そうです。「貴様、何をしている。さっさと開けろ」
隠し部屋の壁に埋めこまれた金庫をロック解除すると、
衛星電話。
携帯食料。
それとたっぷりの金塊が入っていました。
「わーすごい金塊！」浩之さんが顔をのぞかせます。「これって総額、何ペリカくらいになるんだろう」
「三流財閥よ、貴様はこのていどの金塊と引き換えに、命を差し出すことができるか？」
「云ったはずさ。僕は格上相手にはケツ舐め土下座外交をするって。無料でご奉仕するにゃん！」
「質問相手を間違えたようだ」

「質問相手を間違えた……た」

「がっかりすることないよ坊ちゃん。この世には、まともに会話できる相手のほうが少ないんだから。僕だって、人間より猫を大切にするやつとか、笑い声が『デュフフｗｗｗ』ってやつとは話ができないもの。それじゃ、姉さんが待ってるんで」

好き勝手な言葉を撒き散らし、浩之さんは戻りました。

やっと、ふたりきり。

白夜様が私を見つめています。

「あ、あの、何か」

「このていどの金塊で、命を賭けるやつがいるのか？」

「その話ですか……」がっかりですよ。「正直なところ、わかりません。そういうのを考えられないといいますか」

「冷血だからな」

「パ、[illegible]」

ーナスオーラ？」

「貴様には昔から、希望も絶望もない」白夜様が云いました。「この俺でさえ、人生を歩むときには、希望という餌で自分を鼓舞したり、絶望という鞭で尻を叩いたりするものだ。しかし貴様は人生に、希望はおろか絶望すら参入させようとしない。それを冷血と云っている」

「なんだかよくわかりませんが、私は冷血なんかじゃありません」

「貴様の存在理由はなんだ」

「『超高校級の書記』として、白夜様の伝記を完成させることです」

「その通りだ。貴様は『白夜行』を書くために生きている。そのためだけに生きている」

　こんなふうに断言されると、あるいは私が悲しむと思うひともいる

[illegible]

かもしれませんが、とんでもない

むしろ逆。

私の至上命令は、『いかなるときであれ、伝記執筆を優先すべし』なのですから。

「俺たちは伝記を読み、ヘレン・ケラーやキュリー夫人のことを知ったつもりになっている」白夜様が眼鏡を押し上げました。「だがそこに、どれほどのフィクションがまぎれこんでいただろうか」

「伝記とはノンフィクションです。伝記作家とは現実の奴隷(どれい)です」

「フン。実際にはそうでもないさ。伝統的な演出。資料からふくらませたニセのエピソード。教訓めいた逸話……。そういった甘い甘い砂糖がまぶされた伝記の、なんと多いことか。実際にあったできごとに脚色するのは、火事場泥棒と同じだというのに」

「私はこんなことに気付きました。『白夜行』は傑作ですよ」

「私はそんなことしませんよ　『白夜行』は納得ですよ」
「なぜ伝記作家たちが、この基本的なルールを守れないのか、貴様はわかるか」
「いいえ」
「人間だからだ」白夜様は短く息を吐きました。「『青インク』の立場を、俺に聞かせてくれないか。希望も絶望もない貴様は毎日、何を考えて生きている。あるいは、希望や絶望よりも大きな概念があるのか？」
「それは……」
『欲望だ』
白夜様の声が聞こえました。

白夜様の声が聞こえました
ですが目の前の白夜様は、口を閉ざしています。

『欲望。その望みは、希望や絶望よりもはるかに強い。なぜなら欲望は、希望や絶望の原型であり、原点であり、原罪だからだ。あらゆる行動の前に、欲望が介在している』

その声が響いているのは、隠し部屋だけではないのでしょう。骸骨教会に、プラハに、チェコに、全世界に発信されているのでしょう。

「おいでなすったか、ニセモノめ」白夜様が口もとだけで笑います。

「次の一手を見せてもらうとしよう。どうか俺を失望させないでくれよ」

無論だ。とでもいうように、ニセモノは饒舌（じょうぜつ）に言葉をつづけま

す。
楽しそうですね。どちらも。

5

ボルヘス＝履歴参照
＃０１１０６６３８
タイトル『世界征服宣言（２）』

欲望だ。
欲望。その望みは、希望や絶望よりもはるかに強い。なぜなら欲望は、希望や絶望の原型であり、原点であり、原罪だからだ。あらゆる行動の前に、欲望が介在している。

ゆる行動の前に　欲望が介在している

貴様らの欲望を云ってみろ。

遠慮するなよ。云ってみろ。

わかるぞ。

退屈なんだろ？

冒険したいんだろ？

俺がその欲望を叶えてやろう。

俺のゲームに参加しろ。『世界征服宣言』に乗れ。

これは貴様らの退屈を晴らす一大イベントだからな。

ではここで、牛のようにノロマな貴様らに、サービスしてやろう。

俺は今、破壊を始めよう。

俺は今、骸骨教会にいる
まともな武装もせずに、まともな従者もつけずに、骸骨教会にいる。
今なら楽に……殺せるぞ。
さあ、俺を殺してみろよ。
今日こそ本気を出してみろよ。
大嫌いな希望を殺してみろよ。
俺を殺せば、俺が手に入るぞ。
それとも、ここまでお膳立（ぜんだ）てをされてもなお、貴様らはウジウジするだけのウジ虫なのか？　こんなにも優しくしてやってるのにまだ、自分の殻（から）に閉じこもる云いわけを考えたいか？
ま、自分の人生だ。

自分の好きにしろ。

クズのまま死ぬのもよし。クズではないと自分だけが信じたまま死ぬのもよし。永遠にその名を刻む存在になるのもよし。自分の好きにしろ。

努力は人を裏切るし、苦労が実る保証もない。それでも、生きた証を残したいという欲望がなければ、歴史にひっかき傷をつけることはできない。これだけは確実だ。

それでは。

さようなら（ナスフレダノウ）。

6

「罠でした！」私は叫びました。「どどど、どうしましょう。このこと骸骨教会に戻ってきて大失敗ですよ……」

「俺たちが指せる手はこれだけだった」

「何を平然としているんですか。ハメられたんですよ！」

「ハンデ戦と思え。四枚落ちくらいがちょうどいい。それに、さほど悲観する展開ではない。俺たちが骸骨教会にくるのは、ある意味では妙手だ」

白夜様は金庫から取り出した衛星電話のアンテナをのばすと、迷いのない動作で番号を押しはじめました。

「あの、いったいどこに連絡を」

「依頼（オーダー）だ」

「注文（オーダー）？　ピザですか」

「殺しの依頼に決まっているだろ。元『超高校級の殺し屋』こと、大槻涼彦にな」

その名前を聞いて。

私の左目は。

まるで瓶の縁からインクが零れるように。

涙が。

涙が。

「俺だ。聞こえているな」

白夜様は私の異変にも気づかず、衛星電話の受話器を耳に当てます。

「ドハハハハハハハハハハハハハハハハハ！　いつも心にバ

ッキンカム！　おまっとさんでした。『号外の真犯人は　俺だぞ……と　人ごみの中で　怒鳴ってみたい』でおなじみ、大槻涼彦ですぞなもし！」

素っ頓狂な声が、受話口から漏れ聞こえました。

世界を愚弄して、悪意と悪態を糧に生きている人間の声。

自分以外の人間は例外なく馬鹿だと思っている人間の声。

あの男の声。

「白夜クンおひさしぶり〜。元気してたかね。世界征服がんばってる？　ドハハハ」

「世間話をする気はない。さっそくだが殺しの依頼（オーダー）だ」

「ドハハハハハハハハハハハ！」

「何がおかしい」

「何その質問……ドハハハハハハハハハハハハハハ！　決まってるじ

ゃんか。世界で今もっとも殺意を向けられている白夜クンのキャワイイお口から、そんな言葉が出てきたら、笑うのは当たり前じゃんか」

「俺に向けられた殺意は俺のものだ。貴様が笑い飛ばせるものではない」

「ドハハハハ。それかっこいいね。でもオレ今、デートの最中なの」

「デート？」

「コソコソ電話してるってのを察しておくれよ。愛するハニーちゃんに、オレの仕事の中身を知られるわけにゃいかんだろ」

「貴様は何を云っているんだ」

「あ〜！　電話で思い出したけど、そういや先日、某殺し屋一族と戦ったんだよね。で、そいつらの武器がハサミとかバットとか、ゾンビ

映画の前半に出てきそうなものばかりだったから、オレはこう云ってやったわけ。『テメーらなんて炊飯ジャーで倒せるぞ！』って！　ドハハハハハハハハハハハハ！」

「笑いどころがわからないし、『電話』の要素もまったくない」

「マ、マジか……。じゃあ話を進めちゃうわ。オレはもう、十神白夜殺しの依頼をすでに受けてしまっているのでしたー」

「ならば話すことはない」

「チョイチョイチョイチョイ電話を切らないでよ白夜クン。テメーはあいかわらず冷たい男だなあ。まだオレ、キャラが確立してないんだからさ」

「それは俺の責任ではない。もう切るぞ」

―遠慮すんなって。今ならどんな話でもオッケーだよ。リチャード三世の話でもオッケーだよ」

「フン。殺し屋がその名を出すか」

「殺しを依頼する側の白夜クンとしても、身近な存在じゃないのかね。お偉いさんが、ドンパチやる前に聖書に手を置くように、テメーも殺しの依頼をする前に、『リチャード三世』に手を置いてたりしてな！　ドハハハハハハハハハハハハハハ！」

ボルヘス＝検索結果
#11118905
分類　歴史・物語
タイトル『リチャード三世』

ヨーク朝最後のイングランド王にして、戦死した最後のイングランド王。

シェイクスピアは史劇『リチャード三世』において、心と体がひどく歪(ゆが)み、屈折した野心と、奇妙に人を惹(ひ)きつける話術をそなえた奸物(かんぶつ)として書いたが、ジョセフィン・テイによる『時の娘』では、リチャード三世にまつわる悪のイメージは、後世に意図的につけられたものとしている。

その生涯には、いくつもの謎が残されており、人物像に至っては現在もなお確定していない。

「いいか大槻、俺と貴様のあいだには、天と地ほどの差があることを忘れるな」白夜様は受話器をにぎりしめました。「俺は殺し屋に、お

墨つきをあたえる。そして殺し屋は、つまらん良心と戦って自滅する」

「剣呑(けんのん)剣呑。オレは良心なんてものとは、とっくの昔に縁を切ってるよ。『にんげんが　皆良心を無くしつゝ　夜のあけるまで　ダンスをしてゐる』ってなもんさ。良心ってやつは、人を臆病にするからね」

「貴様に良心の欠片(かけら)もないことは知っている」

「ドハハハハ！　ほめられちゃった。お礼に今すぐ殺しにいくよ〜ん」

「俺をワイン樽(だる)にぶちこんでみるがいい」

「強がっちゃって、キャワイイじゃねーの。それじゃあ白夜クン、せめてオレに殺されるまでは生きててね。この通話が終わった次の瞬間から、テメーはだれにも背中を向けちゃいけないぜ。ドハ……」

「と、いうわけだ」
人を不快にさせる爆笑が聞こえる前に、白夜様は衛星電話を切りました。
「あの、妙手とやらは？」
「俺の計画通りに進まないとは生意気になったものだな、世界も」
「白夜様、ねえ聞いてます？」
「元『超高校級の殺し屋』が敵に回るとなれば、事態はきわめて深刻になる。正直なところ、軽く動揺しているよ」
他人をイトミミズかメメクラゲにしか思っていない白夜様が、ここまで云うことからもわかるように、あの男……大槻の才能は相当なものでした。
まともに張り合える現役の生徒は、戦刃さんくらいではないでしょ

うか。
「江ノ島さんと腐川さんに、なんとかしてもらうのはいかがでしょう」
私はそれを知りつつ、このようなことを口にしました。
「ギャルと物書きには荷が重すぎる。やつがそういう次元の住人ではないことくらい、貴様もよく知っているだろうが。大槻がチェコに入国する前に、ニセモノの件を片づけるしかあるまい」
「そんな馬鹿な。無茶ですよ」
「一度に両方を相手にするほうが無茶だ。あと俺に向けて馬鹿と云うのは、金輪際やめてもらおうか」
「……提案があります」
「云ってみろ」

「『アレ』を使いましょう」

それは。
とっておきの裏技。
世界を変える一撃。
世界を狂わす言葉。
しかし。
「俺は自分の力だけで、俺の道を歩く」
ざ。
ざっ。
ざざっ。
ざざざざざざざざざ!

不意に無数の足音が響きました。
濃厚な気配が骸骨教会を包みます。

退屈なんだろ？
冒険したいんだろ？
俺がその欲望を叶えてやろう。

ボルヘスの接触が悪いのか、音声が勝手に再生されました。
たしかに私は今、ニセモノのおかげで冒険の真っ最中です。

7

時刻は午後十時。
『世界征服宣言』から、早くも四時間が経過。
まだうっすらと明るい空の下には、たくさんの民衆がいます。
怒りと熱気と、それよりほんの少しだけ多い不安をかかえたいくつもの顔。

骸骨教会は民衆によって、完全に包囲されていました。

「横浜アリーナツアーファイナル！　そんな気分だね」
骸骨教会には三本の尖塔（せんとう）がのびていて、浩之さんと唯香さんはそのうちの一本に昇っていました。
「これはいったい……」

「やあお嬢さん。坊ちゃんの命を狙うお客様だよ」
こちらを見上げる民衆の姿から、私はつい『パレード』を連想します。
希望ヶ峰学園の予備学科がおこなう『パレード』に、その不毛が、その傲慢（ごうまん）が、その暴力が、その卑怯が、その視線が、何もかもがそっくりでした。
頭痛がします。
バファリン飲みたい。
唐突に痛みはじめた私の頭に、ふわりと優しく乗ったのは……唯香さんの手。
「なでなで」
眠たそうな声と表情には、人を落ちつかせる効能が宿っていました。

つづいて唯香さんは、金平糖を渡してくれます。

「なぜ、このタイミングで金平糖を？」

「甘いですよ」

「知ってます」

「ごぞんじでしたか。こんなにトゲトゲなのに」

「な、なんかごめんなさい……」

「ご苦労様です」

「え？」

「子守り」

言葉の意味を確認するひまはありません。

骸骨教会から、火の気が上がったのを見つけてしまったからです。

つけ火！

火を放った民衆は、赤々と燃えるそれを見て興奮状態に突入したのか、歓喜（ファド）の声を上げていました。

「おー燃えてる燃えてる」浩之さんが尖塔から見下ろしました。「ネットでは『炎上の帝王』と呼ばれている僕だけど、リアルに燃えるとちょっとギャフンだね」

「ねえ、冗談やってる場合じゃないですよ」

「信長も最期はこんな気持ちだったのかな」

「脱出案がないならだまってて」

「怒られちゃった。ではお望み通り、お口にチャック。アテブレーヴェ・オブリガード！　また来週！」

無意味な会話をしているあいだにも、炎は勢力を拡大させつつ、教

会の壁を焼いています。古い教会に耐火性は期待できず、このままでは私たちは約四万人分の髑髏といっしょに灰と化すでしょう。
民衆の声に混じって、低い音がかすかに聞こえました。
エンジン音。
何かが道をやってくる。
骸骨教会の門がブチ破られると、巨大なタイヤをうならせて、それは敷地内に突入してきました。
「庶民のみなさん、骸骨教会から離れてください。わたくしたちは希望ヶ峰学園のものです！」

8

デコレーショントラック。

通称、デコトラ。

過剰な電飾。ギラギラ輝くエアロパーツ。コンテナにはド派手な塗装。最近では、アートとして評価されつつある日本独自の文化。

地方の高速道路やパーキングエリアでは今も見ることができる、運送業のお兄さんたちがあやつる奇怪なトラック。

しかしここは、栃木県でも千葉県でもなくチェコで、デコトラに乗りこんでいるのが希望ヶ峰学園の生徒となると、事態は変わってきます。

骸骨教会の敷地に停まったデコトラは、フロントに『豪華絢爛（けんらん）』『王女稼業』という文字が、コンテナ部にはソニア王女のイラストがデカデカとペイントされていました。

イラストの横には、読むだけで知能指数が下がりそうな言葉が添え

られています。

蝶よ花よと育てられ
いつの間にやら王女様
帝王学にゃ泣いたけど
咲かせて魅せます希望の華

行こうぜ
ピリオドの向こうへ……
　ソニア・ネヴァーマインド

「すったもんだがありましたが、間に合ったようですね」
メタリック加工された運転席のドアが開かれて、ソニア王女が降り

立ちました。
彼女に浴びせられたのは、喝采。
ついさっきまで私たちへの攻撃に熱心だった民衆は、『超高校級の王女』の登場に大盛り上がり。
いつの時代であっても、民衆を諫め、そして煽るのは、若く美しい女性がうってつけというわけです。
「チェコ国民のみなさん、このたびの希望ヶ峰学園の不祥事、まことにもうしわけございません」ソニア王女が優雅な角度で頭を下げました。「十神白夜さんをここで塵芥にしたいというみなさんの心情、理解できます。しかしどうかわたくしに預けていただけませんか。踏み誤った希望を、わたくしに修正させていただけませんか」
羨望の発言力。

内容はたいしたことありませんが、そうとは思わせない雰囲気に呑まれ、民衆はすっかり静かになっています。
「ソニアさーん！　ソニアさん待ってくださいよー！」
デコトラが破壊した門を、左右田さんが乗り越えてきました。
私はボルヘスの集音機能を使い、ふたりの会話に集中します。
「くるしゅうない、左右田さん、顔を上げてください」
「や……はあ、はあ違いますソニアさん。恐縮してるんじゃなくて、疲れてるんです。オレ、全速力で走ってきたんスよ」
「デコトラに乗ればよかったではありませんか。そもそもこれは、左右田さんが作ってくださったものですのに」
「オレ、乗り物酔いがひどいんスよ。忘れたんですか？」
「手間のかかる設定ですね」
「設定って云わないでください！」

「では左右田さんは、どのようにして日本からチェコにやってきたのですか」

「それも忘れたんスか？　あいつが『飛行機が怖いなら寝てればいいじゃないですか』とか云って、ぶってー注射を射ちやがって。おかげで爆睡しましたけど……」

「まるでコングですね。大コケした映画版同様、安らかにお眠りくださぃ」

「うーん、ソニアさんが思ってるより、オレ傷ついてますからね」

「十神さんが骸骨教会に入ったという情報は、確実ですか？」

「監視カメラに映ってました。例のふたり組もまだ同行してるみたいですけど」

「『詐欺師』さんの調子は？」
「ソニアさんも、さっきの演説は聞きましたよね？　もうノリノリで十神白夜を演じてますよ。なんかちょっと本物より『いいヤツ』にキャラ修正してますけど」
「十神さんは『誤解されやすいタイプ』の王道ですからね。ゼロスやハワードと同じといえば、わかりやすいでしょうが」
「全然わかりませんけど……」
「ソニア、涙がちょちょぎれそう」

「あの、とりあえず『詐欺師』のヤローは絶好調です。あとはオレたちがここで本物の十神白夜をゲットすれば完了ですから、元気出してくださいよソニアさん」
「そうですね。趣味の不一致が原因で、左右田さんを国家的に暗殺す

るのはよくありませんね」
「国家の暴走って怖ぃ！」
「くるしゅうなぃ」
「くるしぃです！」
「さあ、わたくしたちもお仕事をしましょう。そして世界はチェック
メイト！」
ソニア王女はぃまぃち趣旨の通じないキメ台詞を発すると、尖塔の
私たちに向けて、びしっと指差しました。
気になるワードがいくつもありましたが、それはあとで。
ソニア王女。
左右田さん。
希望ヶ峰学園の生徒が公式に、攻めてきた。
この局面を切り抜ける方法を考えろ。

生きのびる方法だけ考えろ。

あのときみたいに。

周囲を観察すると、ソニア王女のカリスマが場を支配しているようでした。『あとは希望ヶ峰学園にまかせておこう』という空気が広がり、民衆は動きません。

「ソニアさんいつでもどうぞ！　操作するだけなら酔いませんから！」

左右田さんがデコトラの運転席に乗りこむと、後部コンテナが開かれて、高所作業用のクレーンとゴンドラが現れました。

ソニア王女が民衆に見守られながらゴンドラに乗ると、起動音とともにクレーンがのびて、私たちのいる尖塔へと迫ってきます。

「わたくし今、『あさま山荘事件』の鉄球と、小林幸子さんの気持ち

が、同時にわかりました！」
直接、乗りこんでくるっていうの？
単純ですが、それゆえ確実な捕獲方法。
撃退する武器を持たない私たちは、迫りくるソニア王女を、まるでサンタクロースの到来を待つ子供のように、ただ見ていることしかできません。
ボルヘスに搭載された光波測距儀（レンジファインダー）機能が、ソニア王女の接近を淡々と表示しています。
二十メートル。十四メートル。八メートル……。
「そこまでだアホども」

白夜様の姿を、そういえば見ていないことに気づきます。
三本ある尖塔のうちの一本に……白夜様を見つけました。
塔の縁に腰かけて。
金の髪を靡かせて。
悠々と脚を組んで。
民衆の前に。
敵の面前に。
正々堂々と。
覇王のように魔王のようにほほえみながら。

「人生をゲームにたとえるやつがいる。最良のエンディングを目指そうとする人生は、たしかにゲームに似ているかもしれない。学校を、仕事を、人間関係を、人生設計を、ゲームでもプレイするように進める姿勢には、俺も賛同しよう。すべては勝つか負けるかのゲーム。勝者は美酒に酔いしれ、敗者は辛酸を嘗（な）める。それだけのゲーム」

沈黙。

民衆も、ソニア王女と左右田さんも、白夜様の言葉をだまって聞いています。

何を云うのか。

何をする気か。

それはもう、私にも読めません。

「無論、勝者となったのちに没落する人生や、勝者だと思いこんでいるのは自分ひとりだけという人生もある。敗者が最後に大逆転する人

生もあれば、努力をつづけても一勝すらできずに一生を終える人生もある。必勝法も必殺技もない。初期条件も初期装備も違う。投入できる資金や時間もひとそれぞれ。不親切で、不平等なゲームだ。だからこそ楽しいのだが、だからこそやる気が起こらないとほざく敗北主義者の云い分も、まあわからなくはない」白夜様はここで、言葉の効果を確認するように一呼吸置きました。「貴様らの中には、今回のできごとをイベントのように体感しているやつもいるだろう。クソみたいなゲームにすぎなかった自分の人生に、ついにやってきたイベントだと喜んでいるやつもいるだろう。その通り。これは俺が、十神白夜が主催する一大イベントだ。祝祭だ。冒険だ。非日常だ。逆転劇だ。そんな俺が、さらにボーナスステージをくれてやると云っているんだ。これを見るがいい」

そして白夜様は金庫に入っていた金塊を、気まぐれを起こした天からのほどこしのように、地上へばら撒きました。
「ボーナスステージの開幕を宣言する。燃えさかる骸骨教会にいる俺を、希望ヶ峰学園の連中よりも早く外へ連れ出せた者に、この金塊をまとめてくれてやろう」

10

白夜様はさらに、だめ押しのように金塊を投下します。
下にいる民衆は金色に輝く棒をためつすがめつし、それが本物であることを理解しました。
彼らの心に細波(さざなみ)の広がる様子が、塔の上から見ているとよくわかり

ます。
不意のボーナスステージに直面した民衆は、あらためて自分の欲望について思考していました。
そもそもなんのために、骸骨教会にやってきたのか。
この金塊を手にするには、何をどうすればいいのか。
こうなった以上、どこまでの恥を晒（さら）してもいいのか。
行動パターンに変化が生じるまで、五分とかかりませんでした。
まだ火が回っていない壁をよじ登ろうとしたり、ミネラルウォーターで消火活動したり、運転席にいる左右田さんのもとへ押しかけたりと、民衆はなんとかして白夜様に近づこうとしています。
「ククク。本当にこんなもので命を張ってくれたか」
白夜様は眼下の光景をながめて、ご満悦でした。

私もまた、白夜様の神様っぷりにご満悦でした。
より率直にいえば、萌えていました。
今すぐ『白夜行』を書きたい。
執筆衝動。
ああ仕事したい。
生存目的を果たしたい。
『青インク』としての意味を成したい。
手が、脳が、心が、ウズウズします。
私は『書く』という動詞そのもの。
私は『書く』という行為そのもの。
執筆機械。文章人形。だからこそ。
だからこそ。と、無数の思考が押し寄せてきて、自分の顔が紅潮するのがわかります。

あのひとは、うばわれてしまった。
名前を。
身分を。

それでも、復権と復活のために戦っています。美しいタキシードを着こんで。
私のすぐそばで。
それってつまり。
今この瞬間、あのひとの存在を信じているのは、世界で私だけ？
あのひとを独占している？
この事実に、気づいてしまいます。
そんなわけなので、世界には私の気持ちだけ教えるとしましょう。

くっそ幸せ。

11

「庶民のみなさん、いけません。やめてください。当店はタッチ禁止でーす！」

「おいコラ！　そこ勝手にさわんなって！」

ソニア王女と左右田さんは、民衆の行動に対処できていません。

希望ヶ峰学園として正面から登場したのが裏目に出て、プラハでやったような殺しができないのです。

民衆は悪戦苦闘。クレーンをよじ登り、ソニア王女が乗っているゴ

ンドラをうばおうとする者も出てきました。たしかにあのゴンドラを分捕(ぶんど)るのが、白夜様に到達するいちばん手っ取り早いルートかもしれません。

「庶民のみなさん、降りてください。危険です。そういうことができるのは、日本の消防士さんだけですよ！　出初(でぞめ)式というものがありまして……」

ソニア王女の豆知識が、耳をつんざくような音にかき消されました。

鼓膜……いえ、耳そのものを破壊するかのような甲高い音。

私は反射的に耳をふさぎましたが、突き刺さるような痛みが頭の中をめちゃくちゃにします。

つづいてやってきたのは、尖塔を揺らすほどの突風。

「あーーーーーれーーーーー！」

ソニア王女の華奢な体が、ゴンドラからふわりと浮いたかと思うと、はるか遠くに吹っ飛んでいきます。ばいきんまんであれば、ここで確実に『バイバイキ〜ン』と叫んだでしょう。

いったい何ごと？

気がつけば敷地内に、大量の土埃が立ちこめていました。

その中には、新たなシルエットが浮かび上がっています。

巨大で不恰好な影。

やがて姿を現したそれは、とんでもなく奇怪な乗り物でした。

輸送車の前方に、カニのハサミにも似た二基のジェットエンジンが搭載されているのです。

意味が、用途が、わかりません。兵器としても乗り物としても不完

全で、とても歪（いびつ）。

現代っ子の私は、こまったときはすぐに検索。

ボルヘス＝検索結果

#4190887０

分類　兵器

タイトル『ウラガン』

一九六〇年代にチェコスロバキア人民軍が開発した地雷除去車。

飛行場の融雪機から着想を得たそれは、ジェット排気で地表をはがすことで、地中の地雷を吹き飛ばすため、爆薬を使うより経済的かつ、退役した兵器の再利用もかねて開発された。

しかし実際には、巻き上がる土埃が尋常ではないこと、効率が人員のそれとさほど変わらないことなどから計画は凍結された。

そんな失敗兵器ウラガンには、ふたりの人物が乗っていました。

どちらもが白衣。

ひとりは赤髪の男で、こんなに天気がいいのに傘を差しています。

もうひとりは、どの角度から観察しても小学生の女の子で、なんとウラガンを操作していました。

ふたりの乗ったウラガンは、ジェットエンジンが回転する音を響かせながら、罰当たりにも墓石に乗り上げて、骸骨教会に接近してきました。

「モゴモゴ。モーゴモゴー

何か云いたそうに口を動かす浩之さん。
もしかして、お口にチャックをまだやっていたのでしょうか。
「そういうのいいから話してください」
「あいつら、初瀬川(はせがわ)研究所の連中だ！」

ボルヘス＝検索結果
#65926750
分類　機関
タイトル『初瀬川研究所』

初瀬川賀庸(よしのぶ)なる人物の指揮下に置かれた、分野を問わずあらゆる
学問を研究対象とする研究所。

きわめて機密性の高い機関で、研究成果の報告や発表といったものは一切していない。
　運営母体であるマクガフィン・コンピュータ社（アメリカ）は有名企業だが、初瀬川研究所にかんしては、一貫してノーコメントの姿勢をくずさない。

　一般人にくらべれば、財閥や結社と深く関係している私にとっても、初瀬川研究所は都市伝説のような存在でした。
　それがあることはみんな知っている。
　名前も所在地も、みんな知っている。
　なのにだれも、実際に働いているひとは知らない。友達の友達が新薬を開発しているとか、知り合いの知り合いが山奥にある施設で人体実験をしているとか、噂（うわさ）はあとをたたないけれど、実際を知る者は皆

実験をしているのか、いないのかわかりません。実際を知る者は皆無。
「初瀬川研究所って、まさか初瀬川研究所のことですか？」
そんなわけですから、このような質問をしてしまうのもむりないのです。
「ほかにないと思うけど」
浩之さんは肩をすくめました。
「初瀬川研究所も、白夜様を欲しているのですか」
「正確に云えば、ほしいのは『十神一族の繁栄の秘密』さ。そいつをほしがってる連中はごまんといる。祁答院財閥も初瀬川研究所も、氷山の一角にすぎないだろうね」
私としてはもっと詳細を聞き出したかったのですが、世界は待って

[illegible]くれません。
耳を壊すあの甲高い音……ジェットエンジンの回転音……が聞こえたかと思うと、ウラガンは攻撃を開始しました。
ベッコォォォーーーン！
コンテナに描かれたソニア王女の顔が、はげしくヘコみます。
運転席の左右田さんはオロオロするばかりで、デコトラを動かそうとしません。
「左右田さん、回避行動でーす！」
ソニア王女の声。
パラシュートを開いたソニア王女が、風に流されているのが見えました。
しかしデコトラは動かず、そのあいだにもウラガンは容赦なく、ジ[illegible]

ニットコンシンが生み出す圧力をコンテナにぶつけます

ベコンベコンベコン！

プチップチップチッ。

民衆の一部が巻き添えを食らい、プチトマトのように潰れました。

ボーナスステージの難易度が割に合わなくなったことに気づいたのでしょう、民衆は蜘蛛の仔を散らすように敷地から逃げ出しました。

「フン。つまらんやつらめ」不満そうに鼻を鳴らす白夜様。「命が惜しいのなら、最初からゲームに乗るな」

「左右田さん、デコトラを動かしてください！」

民衆と入れ替わるようにして、パラシュートを外したソニア王女が駆け戻ってきました。

「ソニアさんの要望でも、それはできません！」運転席から顔を出した左右田さんは、半ベソをかいています。「マジでごうりなしくよ。ま

た左右田さんは、半ベソをかいています。「マジでもムリなんスよ、すぐ酔って嘔吐が……」

らちが明かないと判断したのでしょう、ソニア王女は左右田さんをほうり投げると、デコトラを発進させました。

そう広くない敷地内で、次々と墓石をなぎ倒しながら、ふたつの兵器が動き回ります。

巨大なタイヤが土と花をえぐり、いくつもの轍（わだち）ができました。

ソニア王女の運転技術（ドラ・テク）はなかなかのもので、ウラガンの背後に回りこみます。前方しか攻撃できないウラガンは、こうなると回避に専念するしかありません。

「ひっ、ひええぇ……」

縦横無尽に動く鉄のカタマリから、左右田さんは逃げ回っていました。

た
「左右田さん、そんなところで何をしているのですか」
「ソニアさんがオレをぶん投げたんじゃないっスか！」
「早くデコトラに飛び乗ってください」
「いろんな意味でむりっス！　泣きゲロ吐いちゃう！」
「ですが、わたくしひとりでは合体できません」
「はい？」
「わたくし、左右田さんと合体したいのです」
「はい？」
「ですからわたくし、左右田さんと合体……」
「ソニアさん。これからハイレゾ録音するので、同じことをもう一回
言ってくれます？」

云ってくれますか？」
「いいから早く」
怒られてやんの。
火事場の馬鹿力とでも云うのでしょうか。左右田さんは驚異の運動神経を発揮して、走行中のデコトラにつかまると、そのまま運転席に乗りこみました。
「ジャックオーーーーーーン！」
ソニア王女が高らかに叫んだ瞬間、ガチャコンガチャコンと、メカニカルな挙動がはじまります。腕がのびて、脚が出てきて、ついに現れたのは、
「デコトラ番長、見参です！」
と叫[illegible]ました。

人型ロボットでした

フォルムに気合の入った、広島の高校あたりで番を張っていそうな、ツッパリ型ロボットでした。

ロボットの胸部をかねた運転席には、満面の笑みを浮かべたソニア王女と、青い顔の左右田さんが座っています。

こんなものはツッコミを入れるのも野暮ですから、全員が悪意を以(も)ってスルーしていますと、デコトラ番長は衝撃緩和(かんわ)のために両脚を広げ、「裏ボタンファイヤー！」と叫んでキャノン砲を発射しました。

防御力を期待できないウラガンは、かなり強引に旋回してそれを避けましたが、デコトラ番長はすぐさま狙いをさだめ、「ツッパリハイスクールビーム！」と、よくわかりませんが次弾を撃ちこみました。

ウラガンの軌道ではそれをかわすことはできません。

ドン！
ですが……その一発は、てんで見当違いな方向に飛び、空中で爆発します。
「軽い」
声。
「拳を交えぬ攻撃など軽すぎる」
兵器と兵器がぶつかり合う戦場に、生身の人間が立っていました。
その人物は、堂々たる仁王立ちで戦場に屹立（きつりつ）したまま、口上を述べるではありませんか。
「天が呼ぶ。
[illegible]ぶ。

地が呼ぶ。
人が呼ぶ。
絶望を倒せと我を呼ぶ。
聞け絶望ども。
我は希望の戦士、筋肉仮面なり！」

それはどう見ても、マスクをかぶった大神さんなのですが……。

12

チェコの謝肉祭において、仮面は欠かすことのできないアイテムです。

頭隠して筋肉隠さず。

派手なマスクをつけた筋肉仮面こと大神さんは、わずかなステップでデコトラ番長との間合いを詰めました。
「三秒やろう」
拳がふり下ろされるのと、ソニア王女たちが外に飛び出したのは同時でした。エアロパーツで飾られた運転席が、まるで紙細工のようにぐしゃりと潰れます。
大破したデコトラ番長の背後から聞こえるのは、ジェットエンジンの回転音。
ウラガンが大神さんに空圧を発射。
ですがそれも。
「破ッ！」
気合の一声で、かき消えました。

ふたつの兵器が手も足も出ない。
これが。
これこそが。
『超高校級の格闘家』の実力。

「十神よ、江ノ島から事情は聞いた」大神さんが尖塔を見上げました。「水くさいではないか。何ゆえ、我に真実を話さなかったのだ」
「ククク。たいしたものだな」白夜様は評価するように手を叩きました。「貴様は、暴力装置として機能していればそれでいい。暴力装置は暴力装置らしく、あらゆる暴力を暴力で排除しろ。ほら次がくるぞ」

チュルリラリージャッジャー。
チュルリラリージャッジャー。

レニー・クラヴィッツの代表曲『Are You Gonna Go My Way』（邦題・自由への疾走）の有名なリフが響き渡りました。
今度はなんなの？
「今度は私ですっ！」
ウラガンの上に人影。
華麗にギターを弾いているのは……妙子ちゃん？
景気づけのように、ウラガンが地面に一撃を放ちます。

舞い上がる土埃。
妙子ちゃんはそこに混じり、大神さんに突撃しました。

脳天めがけてふり下ろされたギターを　大神さんにキリキリのところで受け止めます。
「おりゃあああああああああ！」
「ぬうううううううううう！」
「ジミー・ペイジはレスポールをフェイズさせてあえて音を細くしましたっ！」
「楽器は演奏するものであろう！」
大神さんがギターごと払うと、妙子ちゃんは空中で体勢を戻し、何事もなかったように着地しました。
「あの子、初瀬川研究所の人間なんだ」浩之さんがとんでもない事実を簡単に明かしました。「僕たちの行動を監視する、お目付け役ってわけ」
　ということは。

①希望ヶ峰学園（ソニア王女と左右田さん）。
②初瀬川研究所（白衣のふたり組と妙子ちゃん）。
③白夜様ご一行（祁答院財閥と大神さんと私たち）。

巴戦をやろうってわけです。

大神さんと妙子ちゃんはすでに激突していました。技量としては大神さんのほうが上のようですが、ウラガンの後方支援がじゃまらしく、決定打をあたえられません。

いっぽうデコトラ番長は、観測するかぎりでは操縦系統をうしなっているようです。ソニア王女は不機嫌そうに腕を組み、左右田さんはゲロ袋をかかえていました。

「うりゃうりゃうりゃうりゃうりゃうりゃ！」

「我が明鏡（めいきょう）止水（しすい）をもってすれば、お主の攻撃なぞ止まって見える」

「くっ、ギター攻撃が通じない……と見せかけてのキーーーーッ
ク！」
妙子ちゃんがくり出した蹴りを、大神さんは平然とキャッチ。
「狡（こす）いな。小娘よ」
「小娘はいつだって狡いものですよ。知らなかったんですか？　あなたも筋トレばっかかしてないで青春すればいい」
「我が青春は、筋肉とともにある」
「まずしい青春」妙子ちゃんは脚をふりほどき、ギターの打撃を再開させます。「夜の校舎窓ガラス壊して回ったり、学校祭で即席のバンドを組んでこその青春でしょうが！」
「青春を押しつけるか」
「恋も知らずに筋トレしてろよっ！」

「失敬な。……我にも恋路はある！」
大神さんの肘鉄が、妙子ちゃんの脇腹にモロに入ります。
吹き飛んだ妙子ちゃんは、さすがに今回は体勢を直せず、ゴム鞠のように地面を跳ねました。
追撃しようとする大神さんを、ウラガンが空圧で牽制。
その隙に妙子ちゃんは立ち上がり、血の混じった唾（つば）を吐きました。
「闘牛士（トレロ）であるこの私と渡り合うとは……」
「渡り合う？　自己評価が高いな。お主は完全に、我に負けている」
「みとめませんよ。みとめたら、そういう設定になっちゃいますからっ。みとめない強さって、大事だと思いません？」
「お主は何ゆえ、一撃狙いにこだわるのだ」

――だってカッコイイじゃないですか――撃必殺。私、判定勝ちに興味ありませんし」
「まさか我に通用するとでも思っているのか」
「まさか私がそこに気づいてないと思ってましたか」
「……ぬぅ？」
大神さんが片目だけ大きくします。
「たしかに私の攻撃はモーションが大きすぎますが、それには理由がありました。私の仕事は、あなたを倒すのではなく封じることなのです」
「どういうことだ」
「私が攻撃する。あなたが避ける。ウラガンが地表をえぐる。私はその中で攻撃を演出しつつ地雷をばらまく。ウラガンがふたたび土埃をかぶせる……。おっと、不用意に動かないほうがいいですよっ。ここ

は今、高密度の地雷地帯となっていますからね！」
妙子ちゃんがスカートをつまみ上げると、まるで少女の秘密のように、いくつかの地雷がコロンと落下しました。
「やりおる」
「これで動きは封じましたっ。あなたの跳躍力はあなどりませんが、踏みこみなしでここを突破するほどではないでしょう」
「お主らはどうする」
「はい？」
「お主らも動けぬではないか。見ればあの車、地雷除去の機能があるようだが、除去した以上、我は追撃するぞ」
「ご心配にはおよびません」
妙子ちゃんの背中から……気球がふくらみました。

まるで絵本の世界の住人のように、ふわりと浮かぶではありませんか。

ウラガンに乗った白衣姿のふたり組も、やはり背中から気球をふくらませて空に浮かんでいきます。

「みんな大好きフルトン回収システムですっ！」妙子ちゃんが叫びました。「私たちは地雷原を歩くことなく帰還します！」

影。

顔を上げると、地上スレスレに低空飛行する輸送機が。

しゅぽ〜ん。

しゅぽ〜ん。

気の抜けた音が聞こえたかと思うと、白夜様に撃ちこまれた気球がふくらみ、その体を浮かばせました。

「白夜様！」

私は手をのばしますが、反対側の尖塔にとどくはずありません。子供がついうっかり手を離してしまった風船のように、白夜様はあっというまに空へと昇っていきます。

「白夜様！」

いやだ。

いやだ。

いやだよう。

離ればなれは、もういやだよう！

「そんな顔をするな」

空高く浮かんでいるのに、白夜様は腕と脚を組み、余裕の表情。

心配はいらないとでもいうように。

このていどの地獄に屈するなと応援するように。

「おい『青インク』、貴様の使命を云ってみろ」

「……『いかなるときであれ、伝記執筆を優先すべし』です」

「だったら観察しろ。この光景を、この情況を、この逆境を、観察しろ。そして書け。書いて書いて書いて書け」

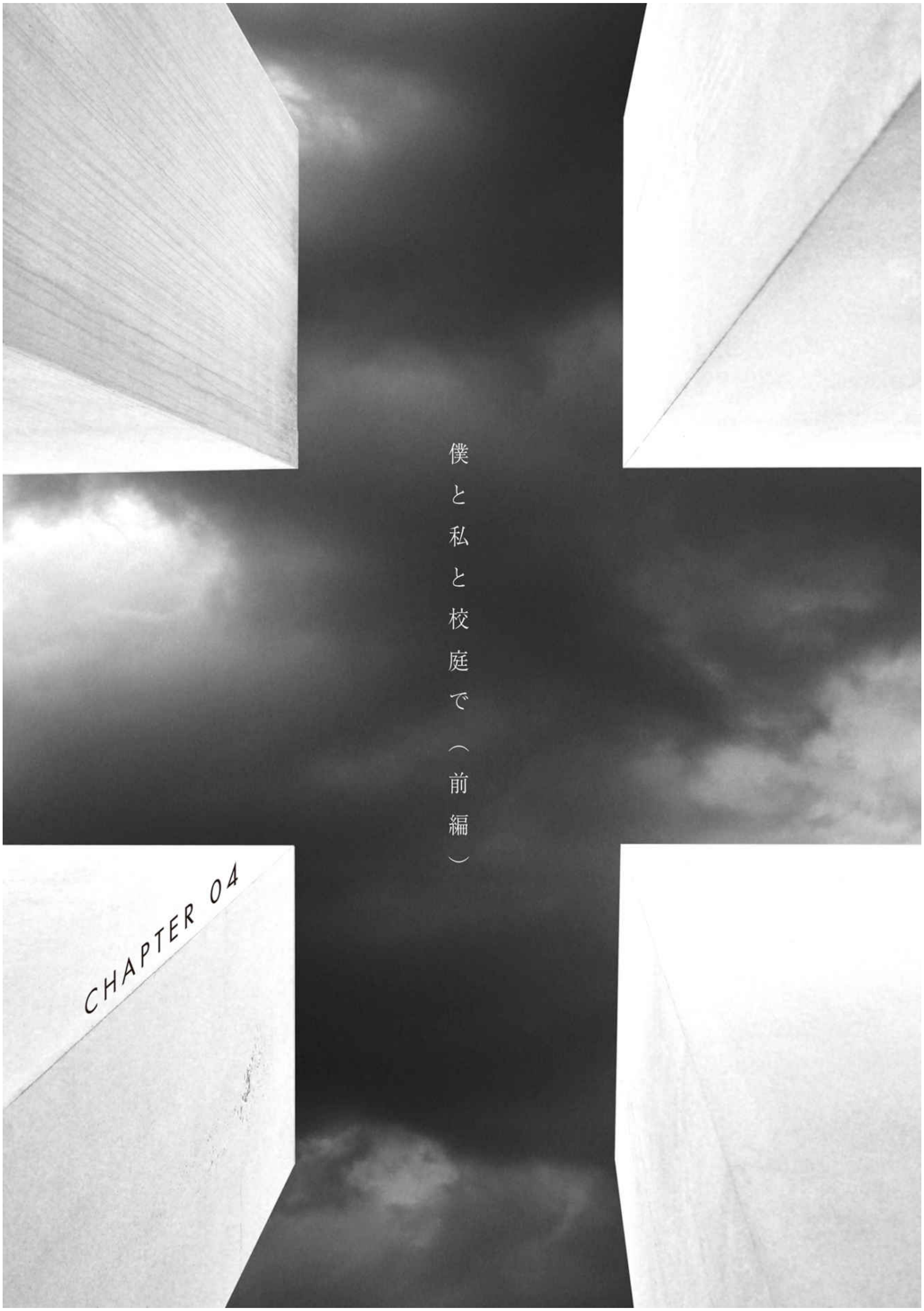
「姉さん！　あわわわわわわ。姉さーん！」

はるか上空に唯香さんの姿がありました。そういえば発射音は二発でしたが、そちらにかまっている余裕はもちろんありません。

「まだ俺の声が聞こえるな？」

「は、はい」

「貴様に命令する。よく聞け」


僕と私と校庭で（前編）
CHAPTER 04

1

『アイドルだってアビリティ』

作詞　上井草凰
作曲　Junk Garnet

才能いちじるしい　ラララララ　日々はめまぐるしい
私の生きたシルシ　売り上げ枚数に刻まれてる

夢のつづきを　見せる仕事よ
希望の歌を　うたいましょう
データベースは　信じないけど
好きなしぐさは　どーゆーの？

アイドルだって　アビリティ
可愛いだけじゃ　消費社会？
アイドルだって　アビリティ
時の流れに　ラブモーション

あふれだすハート！
優しさが生きる　答えならいいのにね

才能いちじるしい　ラララ　夢はめまぐるしい
私の歩いたアカシ　みんなの思い出に刻まれてる

夢のつづきは　夢じゃないから
希望の花を　咲かせましょう
大人のフリは　柄じゃないけど
見たい世界は　こーゆーの？

アイドルだって　アビリティ
フェアゲームの　まぼろしで
アイドルだって　アビリティ
自分の力が　モチベーション

その涙のあと！
優しさが生きる　答えならいいのにね

yeaaaah!

一世代……いや、二世代前のカーオーディオから流れるアイドルソングを聞きながら、僕はそれを歌うアイドルといっしょに逃げていた。

助手席の青葉は、ややアンニュイな表情を浮かべている。ガソリンは満タン。旧(ふる)い車だけど整備はばっちり。いくらでもスピードが出る。酔えるくらいのスピードがいい。この車でどこまでも行ける。

何これ。

「この曲で、初のオリコン一位を獲りました。S-nery(サナリー)と、みっくすJUICEをおさえての一位ですからね、とっても思い入れがあります」

青葉は持参したCDをカーオーディオから抜いた。

「嫌な歌ー　僕は正直な感想を口にする。「才能ありきって事実をアピ

ールされて、きみのファンはよろこぶの？」
「私じゃなく、私たちのファンです」
「まさかアイドルとは……。その、かわいいとは思ってたけど」
「私たちは『かわいいね』と云われたら、否定も肯定（こうてい）もしてはいけないのです」青葉は云った。「アイドルですから、かわいいのは当然です。でも、『はいかわいいです！』と素直にみとめては反感を買いますし、『かわいくないです！』と否定しても、この顔がある以上、やはり反感を買います」
「じゃあどうするの」
「無言で頭を下げるか、『ありがとうございます』と曖昧（あいまい）に返事をするのがセオリー」
青葉は助手席の窓から顔を出すと、「いい風です」とほほえんだ。

そこまで才能に謙虚になっておきながら、なのに才能を主張した歌を出すのは屈折していると思ったが、『愛憎』という言葉を思い出して納得する。

僕は才能に愛憎を抱いていた。

希望ヶ峰学園付属中学校ミステリー研究会の連中も同じだろう。

才能への『愛』だけでも、そして『憎』だけでも、『世界密室化計画』とやらを展開させようとはしないはずだ。

異常行動の裏には、かならず『愛憎』があるという僕の持論は、あながち間違ってもいないと思う。

「空港に行ってみようと思うんだけど」

意識するでもなく、僕の口からそんな言葉が流れる。
逃避行をつづけて二時間ほど。
病院やスーパーマーケットなど、ひとのいそうな場所を見つけては捜索したけど、どこも無人だった。やはり世界は終わっているようにしか見えなかった。
「空港、機能してると思います？」青葉は微妙そうな態度。「安全な場所に、しばらく身をひそめるという手もありますが」
「でもね、十神白夜が絡んでるとなれば、もっと本気で逃げたほうがいいと思うんだ。ほら、ゾンビの……」
「ゾンビ？」
「あ、いやごめん」

「私のリアクションにおびえないでください。さあどうぞ。遠慮なく」
「……ゾンビ映画なんかを観て思うのは、『ひきこもるのは危険』ってことなんだ」
「おじさんが云うと説得力ありますね」
「絶対に解決できない問題があったときは、隠れたり籠城したりするんじゃなくて、とことんまで逃げるべきだと思う。もしゾンビが出てきたらショッピングモールでやりすごそうとするより、森や島に逃げたほうがいい」
「それで空港ですか」
「僕はそう考えてるんだけど、どうかな」
「うふふふ。空港で高飛びなんて、ドラマみたいで素敵」
「そんな……かっこいい展開じゃないよ」

「どういう展開になるのかは、おじさんのがんばり次第です」一応は、期待を持たせてくれるようだ。「どこに飛びます？」

「えっと、どこでも。利尻（りしり）は？」

「利尻島にはウニと昆布しかありません。ロケで行きましたが」

「アイドルって利尻でロケするの？」

「ブンブンクンバンにも行きました」

「ハードだなあ」

「私、ひとりで旅行するのって、今回がはじめてだったのです。勝手に飛び出してきました」青葉は風に舞う髪を押さえつけた。「世界って、おもしろいのですね。思いきってルール破って外に出て、それだけでもドキドキなのに、世界征服に巻きこまれるなんて……」

「ルールは行為を決定できない」
「だれの言葉ですか」
「名前忘れたけど、外国の哲学者の言葉」僕は云った。「数学のルールをもってしても、１００＋１００＝６だと信じてうたがわない人間の主張を斥（しりぞ）けるのは、論理的には不可能なんだって」
「どうでもいいことにくわしいですね」
「本ばかり読んでたから……」
「好きなのですね」
「え？」
「本が」
「あ、ま、まあね」僕はポーカーフェイスを維持する。「チビのころ

から、たくさん読んでたから」
「好きな絵本ってありました？」
「『かいじゅうたちのいるところ』かな」
「私は、『ピッキーとポッキー』が大好きでした。もぐらのふうちゃんがキュートで」
「その話を書いたひとは作家になって、絵を描いたひとは村上春樹のイラストを担当するようになるよ」
「好きなのですね」
青葉がふたたび云った。
今度はパニクらずに答える。
そうさ。
僕は。

「僕は本が大好きなんだ」
「将来の夢は？」
「え」
「将来の夢。ありますよね、そういうの」
「もういい年だよ」僕はびっくりして云った。「『将来』とか『夢』とか、そんな言葉を使う資格はないって」
「ようはやる気の問題です。なんでしたっけあの童話。すっぱいやつ」
「『すっぱいブドウ』のこと？」
「そうそれ」青葉は小さくうなずく。「おいしそうなブドウの実が生（な）っているのを見つけたキツネが、それを取って何度もジャンプするけ

ど、高みにあってとどかない。キツネは結局、『あのブドウはすっぱいに決まっているのさ』と云ってブドウをあきらめる……。おじさんはジャンプもしていません」

「僕には才能がないから……」

「おじさんはハリウッド俳優や、大富豪や、マフィアのドンや、トップモデルや、大統領や、ロックスターを見て、『本気』で嫉妬(しっと)した経験がありませんね？」

あるわけないだろ。

そんな超一流になれるわけがないもの。

年齢とか才能とかいった話じゃなくて。

絶対になれるわけがない。だれも。ね？

僕たちに用意された『外』は、たとえば小金持ち。経営者。大学教授。弁護士。寿司職人。玉の輿。デザイナー。テレビ俳優。これくらいが関の山。

僕には、そんなものをかなえる才能すらなかった。それだけの話だ。

「初心者ですね」青葉は反論しない僕を糾弾しつづける。「ハリウッド俳優や、大富豪や、マフィアのドンや、トップモデルや、大統領や、ロックスターを見て、『本気』で嫉妬しなければ、そういうものに『本気』でなれると自分を信じてやらなければ、人生ストップですよ」

「……だったら今すぐ、自分の人気を上げてみろよ」

ムカついたのもあったし、話題を変えたかったし、何よりこのまま

スルーするのもわざとらしかったので、僕はそう云った。
沈黙。
青葉は車の窓を閉めると、ＣＤジャケットを僕に見せてくる。
そこには青葉が在籍しているアイドルグループが全員で写ってい て、カラフルな衣装を着た彼女たちは、若さと華やかさでキラキラ輝いていた。
青葉はいちばん右端に写る物体を示した。
こ、これは……。
掃き溜めに鶴。という、そろそろ差別用語として認定されそうなことわざがあるが、その逆バージョンといった光景が、ＣＤジャケットに広がっていた。
たとえば『１２３４５』とか、『ＡＢＣＤＥ』とか、『甲乙丙丁戊』といった平面の中で、自分が四番目であることを云っているよう、

ん』とかいった評価の中で、自分が四番目であると云われたら、しょんぼりしつつも納得するほかないだろう。

では、『１２３４☆』とか、『ＡＢＣＤЙ』とか、『甲乙丙丁◯』とか、なんかもうあきらかな異物がひとつ混ざっている中で、それでも自分が四番目であると云われたらどうだ。

四位こそが、最下位ではないか？

青葉は美少女で、声もスタイルもばつぐんだけど、本人が云ったように、アイドルなのだから『かわいい』のは当たり前だ。

事実、ＣＤジャケットを見るかぎり、上位三人のメンバーとは、そこまで大きな差を見つけることはできなかった。

だけど青葉は、序列四位。

上位三人と何が違うのか。

才能。

そういうことになる。
青葉にはアイドルの才能が足りないという結論になる。
アイドルだってアビリティ。

彼女たちが高らかに歌い上げていた主張を、彼女たち自身を傷つけながら立証してみせたわけだ。
「うふふふ。私は自分が劣っていると考えたことはありませんよ。一秒も」
それでも若さがあるかぎり、敖慢と可能生があるかぎり、青葉がぺ

シャンコになることはなかった。

一発逆転のチャンスが腐るほどころがっていることも、自分の才能がまったく磨(す)り減っていないことも、この子はちゃんと知っているのだ。『外』への突破を信じているのだ。

いっぽうの僕は、モグラの穴にひきこもり、恨みがましい目で『外』を見上げるくらいしかやることがなかった。

正直に云おう。

モグラの暮らしは快適でもあった。

最下層。それは逆に、最上位。

底辺にいるからこその無敵感。

最低であるからこその安心感。

俺はまだ本気出してないだけ。

でも。
『世界征服宣言』により、世界は一変。
毛布のような安心を剝ぎ取られ、否応なく放り出され、ルールなき世界でモグラは第二の人生を歩むことになった。
『ルールは行為を決定できない』
『ようはやる気の問題です』
ちくしょうめ。
急になんだよ。
怒りまかせにアクセルを踏むと、車は加速した。
速度超過。信号無視。飲酒運転。僕のこうした交通犯罪を指摘する者はいない。今、この道にはだれもいない。対向車も通行人も警察もいない。
ここは僕の自由。

すべて僕の自由
それなのにアクセルをゆるめたのは、交通ルールのせいじゃない。
だれに命じられたわけでもなく、僕は自分の意思で、節度を守った運転をつづけた。

2

『財閥だってグラビティ』
作詞　祁答院◇浩之
作曲　Junk Garnet

財閥いちじるしい　ララララ　日々はめまぐるしい
僕の生き急いだンレン　固定資産税に刻まれてる

僕の生き急いだシルシ　固定資産税に刻まれてる

執事とヒツジを　並べる遊びは
五歳の春に　ご卒業
中二の夏で　オタクをこじらせ
湖畔の別荘　デスゲーム

財閥だって　グラビティ
うどん食うため　香川買う
財閥だって　グラビティ
庭の単位は　ヘクタール

銀座にはくらない！

銀座にはくわしい
優しさが生きる　答えならいいのにね

財閥いちじるしい　ラララ　政府首脳に助言
たわむれで鉄郎をメカに　少し遊ばせ　のち解体

くノ一淫法　メイドに学ばせ
屋敷の寝室　汁まみれ
俺もミギーを　ほしいと駄々こね
博士が開発　チンアナゴ

財閥だって　グラビティ
ノルマのように　鯉を買う
財閥ごっこ　グラビティ

財閥だって　グラビティ
ときメモファンドで　焼け太り

ソファは本革！
優しさが生きる　答えならいいのにね
UREEEEEYY!

最新鋭のカーオーディオから流れる電波ソングを聞くともなく聞きながら、私たちは白夜様のあとを追っていました。
浩之さんはアクセルをベタ踏みで、メルセデスを走らせています。ガソリンは六割ほど。車の調子はばっちり。いくらでもスピードが出ます。酔えるくらいのスピードがいい。この車でどこまでも行ける。
何にし。

作これ

「僕は電波ソングを作るのが趣味なんだけど、この曲ははじめて満足のいく出来でね、思い入れがあるよ。とはいえ、電気グルーヴや変死隊のような高みに到達するのは難儀（なんぎ）だ。禅宗（ぜんしゅう）で悟入（ごにゅう）はむずかしい」

「まじめにやってください」

「歌のこと？」

「趣味はどうでもいいです。態度の問題です」

「やっぱり歌のことじゃないか」浩之さんは苦笑しました。「きみの大切な坊ちゃんについては把握してる。安心しなさいな」

ナビの画面には、ものすごい速度で移動する白点が表示されていて、それは白夜様に埋めこまれたＧＰＳ受信機が位置情報を発しているものです。

無数にうごめく、緑色の点は、予測表示された人間の群れでしょう

無数にきらめく緑色の点は、可視表示された人間の群れでしょうか。それはプラハを中心として広がっていました。

白点が向かっているのは、まさにそのプラハ。

白夜様を追うメルセデスは、欧州自動車道路Ｅ67号を走っているところでした。

荒涼とした大地を、中心から切り裂くようにして作られた道路は、なんだか北海道の風景に似ています。しかし私がやらねばならないのは情景描写ではなく、どうやって骸骨教会から逃げたのかという説明でしょう。

さて。

仕事仕事。

ドレヘスー夏至参照

[illegible]履歴参照
＃６１９９８３２５
タイトル『やっつけしごと』

崩壊する骸骨教会。
ふたりが立つ尖塔にも亀裂が走り、足場が揺れている。

私「ど、どうしましょう……」

浩之「このままじゃ崩れちまうぜ！」

ひときわ大きな轟音が響き、崩れ落ちる。
ふたりは落下。

私「あーれーー！」

浩之「心配することないぜ！（大きな動作で指を鳴らす）」

遠隔操作で動かしたメルセデスが猛スピードで登場。

自動的に幌が開かれ、オープンカーの状態になったメルセデスの座席に、ふたりは吸いこまれるように落ちていく。

浩之「パーティには間に合ったようだぜ！」

私「っていうか、こんなことできるなら、最初からすればよかったのに」

浩之「（頭をかきながら）へへっ、こいつは一本とられちまったぜ！」

説明が投げやり？　イライラしてますから。

「自分のお姉さんが攫（さら）われたのに、よくもそんなふうに遊んでいられますね」

私は後部座席から、浩之さんを恨みっぽい目で見つめました。
「遊んでいるといえば、きみの同級生も大概じゃないかい」浩之さんはカーラジオに切り替えました。「もしあれを本気でやってるとすれば、連中、とんだサイコだぜ。ジャネット・リーじゃなくともびっくりだ」
　カーラジオからは、今回の騒動についてのニュースが、ひっきりなしに流れています。
　ようやくネット接続されたボルヘスがもたらす情報と、私宛に飛びこんでくるメールによれば……内容も信頼度もいまいち不明ですが……『世界征服宣言』と時を同じくして、世界中で密室殺人事件が確認されているとのことで、関連性を疑うべきでしょう。さらには、骸骨教会での会話から察するに、ソニア王女たちが白夜様のニセモノと通じている可能性も、[illegible]。

と通じている可能性も　きわめて高いものとなりました

信じたくはありませんが、同級生がトチ狂っていることを、多くの要素が立証していました。

そうなると。彼らが求めている『かわいそうな牛』とは……。

「連中はサイコで、しかもポップを履き違えている」浩之さんは言葉をつづけます。「うーん、この状態をうまく表現する言葉がほしいね。そうだなあ、サイコなのに……それでいてポップな、サイコだけどポップな……サイコポップ！　これは僕が考えた言葉ですから！　サイコポップ！　これは僕が考えた言葉ですから！　僕が権利を持ってますから！　あふれ出すオリジナリティですから！」

「うっせーよゼニガメ」

そう云ったのは私ではありません。

後部座席に置いた衛星電話の画面では、ギャルギャルした女の子が

メイクの真っ最中でした。
　別働隊の、江ノ島盾子さんです。
　なんとなく不機嫌そうに見えました。
「ゼニガメ？」浩之さんはおどろいた顔つきで、うしろをふり返ります。「なんで僕がゼニガメ？」
「アハハハハッ。知らないけど、なんかカメっぽくね？」
「失礼なギャルだな。生しらすが特産品の島みたいな名前のくせに」
「だまって前見て運転しろカメー」
「ムキーー！」
　あ、なんか仲良さそうで安心。
「ところで江ノ島さん、腐川さんはどうしたの？　姿が見えないけど」

「ちょっと聞いてよ！　それなんだけどさ、腐川、学園を出て行っちゃって」
「は？」
「さっきセンパイ、十神が拉致されたってメールくれたじゃん？　そのあと腐川がプッツンしちゃってさー。んじゃ、今から盾子ちゃんがモノマネしま～っす。『びびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃ白夜様白夜様白夜様白夜様白夜様白夜様白夜様白夜様ガガガガガガガピィーーーーーー！』」
　うわ。
　怖っ！
「それで腐川、これから国際空港に行くって。そんでプラハに向かう
……

って」
「それはこまる」
つい本音が出てしまいました。
「アタシだってこまるって！　こんなところにひとりで取り残されて、お姉ちゃんもいないし、オールしてるからメイクのノリも悪いし、眠いし、何も食べてないし、マジでサガるんだけど！」
現在のプラハは、午後十一時二分。
となると日本は、午前六時二分。
徹夜のうえに食事をとっていなければ、なかなかつらい時間帯でしょうが……。
「江ノ島さん、どうして保護してもらわないの？」
「アタシ今、体育用具室に隠れてるのよね」

—体育用具室！」なぜか浩之さんが叫びました。—キャルがエロを背負ってやってきたぞ！　心のフランス書院が新刊ラッシュ！　超獣伝説がＶ３達成おめでとう！」

「つーかさ、このゼニガメ、自分で思ってるより女にモテてなさそう」

「私も同じこと思った」

「ムキーー！」

「それで江ノ島さん、なんでまた体育用具室なんかに」

「ゾロゾロと学園にセンセーがやってくるから、そりゃ最初は助けてもらおうと思ったワケ。でもなんつーか、直感ってやつがビリビリ？　嫌な予感がバリバリ？」

「嫌な予感？」

「センセーたち、十神のニセモノの正体を知ってるっぽいよ」

江ノ島さんはメイク道具を片づけるついでに、とんでもないことを云いました。

「え……だれなの？」

「あのさ、逆に質問なんだけど」

「センパイは、『超高校級の詐欺師』って知ってる？」

希望ヶ峰学園には、『超高校級の諜報（ちょうほう）員』や、『超高校級の幽霊部員』というように、その個性ゆえ、隠しキャラのような生徒はたしかにいます。

……『詐欺師』さんの調子は？

ソニア王女の言葉。

私はその存在を、まったく知りません。
「そんな生徒いるの？」
「アタシに聞かないでよ！　センセーたちが話してるのを聞いたの。『超高校級の詐欺師』ってのがいて、そいつが十神に成り代わったんじゃないかって。でもそれは会見では隠蔽（いんぺい）するって」
「待って江ノ島さん。会見って何」
「学園、これから会見を開くんだってさ」
「でも『超高校級の詐欺師』のことは伏せるって？」
「アハハハッ。フショージだもんね！」
「隠し通せるものじゃないでしょ」
「アタシに云われても」
「なんとかできない？」

ーだからアタシに云われても！　ギャルに解決できる話じゃないし……あっ、てへぺろー。解決で思い出しちゃった」江ノ島さんが胸の谷間から紙切れを取り出しました。「えとね、報告がありまーす」
「報告？」
「ではここでクイズでーす」
「報告はどこいったの？」
「事件を解決する才能は、次のうちどれでしょ〜か。①ギャル②ギャル探偵③ギャルじゃない探偵」
「③」
「ピンポーン！　即答されちゃった！　アタシんとこのクラスに、『超高校級の探偵』っていうネクラ女がいるんだけど、そいつから十神に伝言をあずかってたの」江ノ島さんは紙切れを開きます。「アハ

ハハッ。忘れないためにメモしたことを忘れるなんて、盾子ちゃんったら量産型の激安お馬鹿キャラみたいー」
「早く読んで」
「ハイハイ。えっとね……」
「『過去を思い出しなさい』だってさ」
そのとき。
カーラジオから、防災無線のスピーカーから、ボルヘスから、あの声が流れてきました。
『さっそくだが、次のボーナスステージの発表だ』

「おいでなすったか」浩之さんがラジオの音量を上げます。「やつが次に云う台詞はわかってる。『これから一時間以内に俺を見つけた者には、金一封をやろう』」

するとニセモノは、『俺はチェコ国内のどこかにいる。見つけ出せた者には褒美（ほうび）をやろう』と云いまして、ほとんど正解と云えるものでした。

「ゼニガメ！　アンタなんでわかるの」

「連中は骸骨教会で敗北して、坊ちゃんを初瀬川研究所に取られたうえに、たぶん僕たちの行方も見つけられていない。そうなると、民衆を焚（た）きつけて虱潰（しらみつぶ）しをやるしかないのさ」

ボルヘス＝履歴参照
＃０１７９９０１２
タイトル『世界征服宣言（３）』

さっそくだが、次のボーナスステージの発表だ。
俺はチェコ国内のどこかにいる。見つけ出せた者には褒美をやろう。
しかし、その前に云っておきたいことがある。
じつを云うとだな、貴様らウスノロどもの遅さに、俺はうんざりしているんだ。怒りすら湧くほどにな。

遅いというのは害悪だ。
やる気があろうと、才能があろうと、ノロマには死んでほしい。
というわけで死ね。
というわけで速度を出せ。
というわけで俺についてこい。
このボーナスステージに、はっきりした制限時間は設けないが、
もしだれも俺を見つけられなかった場合は、ペナルティを科す。
内容は、わかるな？
俺は本気だ。今回も証拠を見せよう。
以上だ。

人生のターニングポイントには、後悔がつきものらしい。
『もう少しでも偏差値が高ければ……あるいは』とか、『右じゃなくて左にシュートしていれば……あるいは』とか、『あのとき恥ずかしがらずに告白しておけば……あるいは』とか、なんかそういうの。僕にはないけど。
「だってそんなの、思い上がりだから」
僕たちはドライブを楽しみながら、決して明るくない会話をつづけていた。今さっきカーラジオを占拠した『世界征服宣言』は、暴走っぷりに磨きがかかっていたけど、僕には別世界でのイベントみたいに思えた。
「もう少し偏差値が高くても、右じゃなくて左にシュートしても、気

になるあの子に告白しても、僕はどうにもならなかった」
「希望はないのですか？」
青葉が不思議そうに聞いてくるのが、かえって不思議だ。
あるわけない。
希望ヶ峰学園に希望を破壊された人間というのは、数多くいる。

とても恥ずかしい告白だし、こんなことを公言するやつは害悪なので殺すべきだが、僕は小説家になりたかった。
某ミュージシャンは、デモテープをレコード会社に送ったとき、『これでデビューできる』と思ったそうだ。某小説家は、新人賞に原

稿を送ったとき、『もちろん受賞するだろう』とやはり思ったそうだ。

才能ある者だけが許される傲慢。

僕はそいつを、やってしまった。

『希望ヶ峰学園がスカウトにくるだろう』と、根拠もなく思ってしまったのだ。

完全スカウト制という、ある意味では『口を開けて待っていればいいだけ』のシステムが、以下に語る悲劇を引き起こすことになる。

高校生の僕は自分の才能を信じて、希望ヶ峰学園がスカウトにくるのを待った。

一年待った。

二年待った。

三年待った。

スカウトはやってこない。

高校三年生のときに、僕はその高校を退学すると、べつの高校に再入学した。ふたたび一年坊主となったわけだ。

一年待った。

二年待った。

三年待った。

スカウトはやってこない。

僕には才能があった。

でも世間には、僕なんか比較にならないほどの巨大な才能を持つ化ケ物がいることに、このときはさすがに気づいていた。

のちに出てくる『超高校級の文学少女』や『超高校級のライトノベル作家』などは、僕の趣味ではないし内容もクソだったが、とんでも

なく才能があることは、みとめるしかなかった。

卒業式の日。

卒業証書を手に、在校生たちに見送られながら歩く僕は、校門の前に立つひとりの男を見つける。

ダークスーツの胸には、希望の星を象（かたど）ったピンが輝いていた。

希望ヶ峰学園の教職員。

スカウト。

教職員は片手を上げると、僕に笑みを浮かべた。

待たせたな。

そんな感じの笑顔。

救われたと思った。

教職員は校門をくぐり、僕のもとにやってくると、そのまま僕の横

をすり抜けて……近くの一年坊主に声をかけた。

ご卒業おめでとうございます。

後日しらべると、僕の前でスカウトされたそいつは、『超高校級の料理番』として希望ヶ峰学園に入学した。卒業後は、宮内庁管理部大膳課のボスを若くしてやっているそうだ。

えーと。

僕の小規模な失敗譚はこれで終わりだけど、もう説明はいらないよね？

このあとに人生ではじめて飲むアルコールとか、モグラへと至る細かな描写とか、そういうのはいらないよね？

僕はフラれたのだ、才能に。

「違いますって」すべてを聞き終えた青葉は、やはりこの言葉をくり返す。「ようはやる気の問題です」

4

ボルヘス＝履歴参照
＃1092970
タイトル『希望ヶ峰学園による会見』

壇上には、霧切仁（きりぎりじん）（希望ヶ峰学園学園長）と、名称不明の男（評議委員と推測される）がふたり。なお、とくに断りがないものは、すべて霧切仁による回答である。

評議委員1　みなさま、このたびは早朝からお集まりいただき感謝いたします。本日日本時間日曜日午前一時、現地時間土曜日午後六時に発生した『世界征服宣言』につきまして、本校が関与しているという疑いを晴らすため、会見の場をもうけさせていただきました。

質問　相手は十神白夜を名乗っていますが？

評議委員1　質問はのちほど。質疑応答の場をもうけますので……。まず、『世界征服宣言』と本校とは、なんら関係がないものと、宣言させていただきます。今ありましたように、何者かが十神白夜生徒を名乗っているようですが、それは希望ヶ峰学園第78期生に属する十神白夜生徒とは別人です。ニセモノです。それが事実であり真実です……。こちらからは、以上です。つづいて質疑応答に入りま

す。質問のある方は、名前と所属をあきらかにしてください。回答は、学園長にしていただきましょう。では、そちらの方どうぞ。

質　問　さきほどは失礼しました。大日本通信社の吉備ともうします。本物の十神青年は無事なのでしょうか？

回　答　十神白夜生徒の消息は、確認できておりません。今しがたニセモノによる新たな動きもありましたので、捜索活動には全力をそそいでいます。では、ほかに質問は……そちらの方。

質　問　毎晩新聞の大澤ともうします。ニセモノの正体は把握しているのでしょうか？

回　答　現在確認中ですが、希望ヶ峰学園が総力を挙げて調査していますし、警察機関にも協力要請しておりますので、すぐに判明できると確信しております。

質　問　学園長の見解は？

回　答　わたくし個人の発言によって、不必要な先入観をあたえてはいけませんので、発言は控えさせていただきます。ほかに質問はありますか……はい、そちらの方どうぞ。

質　問　ＰＱＰニュースの安沢（あんざわ）です。十神財閥は今回の件にかんするコメントを出しておりません。十神財閥と希望ヶ峰学園は、コンタクトを取り合っていますか？

回　答　おたがい情報交換をしています。内容は明かせませんが、事態を収束させるため、膝詰めで話し合いをつづけています。次の質問は……そちらの方。

質　問　北日新聞の山田（やまだ）です。ニセモノが十神さんを名乗った理

由に心当たりはありますか？　学園や十神財閥への怨恨などは。

回答　現在確認中です。

質問　希望ヶ峰学園も十神財閥も、じゅうぶんに恨みを買われてそうですが。

回答　現在確認中です。次の方……そちらの、挙手をされた方どうぞ。

質問　ダンテズ・ジャーナルのボッカチョでース。エー、今回の件ですが、貴校は、責任や補償を負うつもりはありまースか？　マタ、その範囲はドレホドのものになりまースか？

回答　それは……。

評議委員1　ジャーナリストのみなさま。くり返しますが、今回のできごとは、本校も十神白夜生徒も無関係です。みなさまには、これが本校の純朴な生徒の名を騙った卑劣な攻撃であると、ジャーナリ

ズムの土俵で審議し、発表していただけないでしょうか。

質　問　シカーシ、十神サンが標的になった理由は、貴校の生徒であるからという意見もありまース。

評議委員1　ややもすれば、十神白夜生徒は今、『世界の敵』となっております。その冤罪（えんざい）を、その無実を、みなさんのペンで晴らしてやってくれませんか。ひとりの若き才能を、救ってやってくれませんか。

質　問　吉備です。そうは云いますがねえ、希望ヶ峰学園が完全に被害者かといえば、微妙な情況ですよ。十神財閥の黒い噂はべつとしても、十神青年を野次馬（やじうま）の悪罵（あくば）から救ってはあげたい。そのために真実の報道もしたい。ただそうなると、希望ヶ峰学園にも、真実をお話ししていただきたいですがね。

評議委員2　脅迫をやめなさい。

評議委員1　よろしいですかな。『世界の敵』は、希望ヶ峰学園でも十神財閥でもありません。他人の名を穢（けが）し、自分は表に出ることなく世界に唾をつけようとするニセモノです。そしてジャーナリズムの仕事は、彼奴（きゃつ）がふりまく猜疑心（さいぎしん）の毒。人間不信。エゴイズム。暴力性。非論理。破壊趣味。そういったものを暴くことです。そこを忘れないでいただきたい。ほかには？

質問　白石タイムスの南郷（なんごう）です。学園長に質問いたします。一部報道では、学園の内部抗争ではないかとのことですが？

回答　噂にすぎません。

質問　しかし、おたくの予備学科が起こしている『パレード』

は、今も収束する気配を見せませんし、ほかにも学園内でゴタつきがありますね。『絶望小説』をばら撒いたのが希望ヶ峰学園という噂だってあるんですよ？

回　答　本校の内部に問題はありませんし、あったとしても、それが世界と直結するという考えは、あまり常識的ではないと判断します。ほかに質問はありますか。そろそろ時間ですので、次の質問で最後にします。そちらの方どうぞ。

質　問　ＬＬＣ通信の金子(かねこ)です。学園長先生が、今回の騒動にかんしまして、どのようなことを思っておられるのかをお聞きしたいのですが？

評議委員2　個人の見解を聞くのは控えてもらおう。

回　答　お答えしましょう。

評議委員2　学園長……。

回答　希望とは、だれにとっても希望でなければいけません。どのような場所、どのような角度から見ても、美しく、堂々と輝いている希望でなければいけません。希望ヶ峰学園は、『才能こそ人類の希望』という理念のもと、『希望の象徴』として存在しています。いかなる絶望にも、いかなる逆境にも、希望が潰(つい)えることがない。それを立証するために活動しています。ご指摘の通り、本校は『パレード』等の問題をかかえておりますし、存在自体のジレンマにも立たされているかもしれません。しかし、だからこそ希望を捨てずに、今回の事態に立ち向かい、解決したいと思っております。

……よろしいでしょうか。予定の時間をすぎましたので、以上で会見を終了させていただきます。ご協力ありがとうございました。

5

うーん。

妥当な内容です。

6

げろっ。

最悪な内容だね。

カーラジオから流れる会見を聞いたかぎり、まともな回答と呼べるものはなかった。

生徒の不祥事を隠蔽するとは最低だ。希望がどうこうと、耳ざわり

のいい言葉ばかりを云っても、結局は政治屋というわけだ。
「うふふふ。希望ヶ峰学園が何も気づいていない可能性もありますよ」
「それならもっとタチが悪い……」
車はやがて町に入る。
空港へは、ここを抜けた先にある道を、ひたすら走ればいいだけ。と。
そこには。
その町には。
ごく当然のように人間がいた。
電灯がともり、人間の姿もあって、道路には車が走っているではないか。

僕と青葉はほぼ同時に、笑った。
世界の強固さに、ルールの頑丈さに、人間の図太さに、あとはなんだろ……普通に安心感？　そういうものがこみあげてきて、笑わずにはいられなかった。
拍子抜けに近い気分。
ふと視線をやると、道路の脇には電柱が等間隔でならんでいて、車が揺れた次の瞬間、そのうちの一本が、ものすごい勢いで迫ってくるのが見えた。ぶつかると思うより先に、後方からの追突。僕は反射的にブレーキを踏み、やはり反射的にハンドルを切った。洗濯機（せんたくき）の中に突っこまれたように視界が回り、三半規管（さんはんきかん）がかき乱される。
そして気づく。
意識をうしなっていたことに。
どれだけ寝ていたのだろう。

一分？
一時間？

キィィンという不快な高周波が耳の奥で鳴り、頭が機能しない。周囲のすべてが自分とは無関係に思える。スカウトされずに卒業し、完璧な一般人になったとき、世界から梯子(はしご)を外された感覚に襲われたが、あの日にとてもよく似た虚無。

それでも本能が、いいからさっさと動けと叫び、動物の僕はそれにしたがう。旧型の車にエアバッグなんて贅沢は期待できないが、シートベルトを締めていたので（自分の小市民っぷりに感謝だ）、致命傷はなかった。それでもドアやダッシュボードにあちこち打ったらしく全身が痛い。苦労して顔を上げると、粉々になったフロントガラスの向こうに、根元から折れた電柱が見えた。

青葉は、

「……ううぅぅぅ」

出血していた。

「え？」

押さえた脇腹からは、ぞっとするほど大量の血が流れている。

新鮮かつ生々しい血のにおいが、せまい車内に充満している。

僕はまだ混乱していたかったけど、現実が急激に迫ってくる。

考えなくちゃ。

判断しなくちゃ。

何を？

どうやって？

「え？」

折れた電柱の向こうに町が見える。
竜巻が通過したあとのように、そこは完璧に崩壊していた。家は倒壊し、あちこちに火がつき、粘っこい黒煙が広がり、いつのまにか空は黒々とした雲につつまれ、道には瓦礫が積まれ、人間はゴミみたいに死んでいる。
「ううぅううぅぅううう」
青葉がうめき声を上げると鼻血が垂れた。アイドルも鼻血を流すのかと思った。

世界のどこかで衛星が落ちた。らしいですが、確認しているひまはありません。
ナビに表示された白点が、あきらかに異様な場所にあるのです。
プラハを南北に貫くように流れるモルダウ川。
その中ほどで……白夜様を示す白点が停止していました。
どういうこと？
どうして川の中に？
「だーもー！」
運転席では浩之さんがイラついています。
ようやく戻ってきたプラハは、暴動の都となっていました。
『世界征服宣言』が響いた瞬間から、すでにその前兆はありましたが、プラハ市民はデモの声を、ついに都市全体に広げたようなのです。

古めかしくも美しい古都には、いくつもの旗、いくつもの声が主張し、主要道路には人間の群れが確認できました。

「反対!」

百塔の町は、歴史の刻まれた石畳の隙間から、世界征服に対するようはプラハ市民はキレているのです。

『ノー』を噴き出させていました。

「中心部は通れないな。迂回しよう」

浩之さんはメルセデスを路地に入れて、デモの波を避けました。

「そのナビ、どうなってるんです」私は停止したままの白点を指差します。「白夜様は無事なんですか？　ねえ……」

「心配しなさんな」

浩之さんがパネルに触れると、地図が拡大されました。てっきり川の中だと思っていた場所に、小さな島が表示されます。

「これは」

「ジェッキー島。直訳すれば、『子供の島』ってところかな。坊ちゃんはそこにいる。おそらく姉さんも」

メルセデスはユダヤ人地区に入ると、荘厳なユダヤ教会（シナゴーグ）を見学することなく、道路標識が乱立する石畳を抜けて、モルダウ川沿いの通りに出ました。

しかし橋のまわりは人や車でごった返していて、どうにもできません。ナビを見たかぎり、島へのルートはモルダウ川の対岸にしかないようでした。

浩之さんは舌を打ちましたが、「気分を変えよう」と云って、カーオーディオにCDを入れました。

合唱団による歌声が流れます。

なつかしき河よ　モルダウの
清き流れは　わが心
うつくしき河よ　モルダウの
青き水面は　今もなお
流れにやさしく陽は注ぎ
さざなみは　いつも歌うたい

さざなみにいつも歌うたい
岩にあたり　しぶきあげて　渦をまく

（作詞　岩河三郎）

音楽の時間に習ったモルダウ川には、ざっとボルヘスでしらべたところ、十五橋が架かっているとのこと。私がそれを報告するまでもなく、浩之さんは川沿いの通りを突っ走ります。

ですが、チェコキュビスムの第一人者が作ったマーネス橋も、歴史深きカレル橋も、なんだか物騒な名前のチェコ軍団橋も、渋滞していて通れません。

戦争や災害で破壊されることのなかったプラハの街路は、敵の侵入をふせぐために複雑で、そのうえ世界遺産だと喚いているわけですから、ひとつパニックがあれば交通混乱が生じるのは当然でした。

「やれやれ。日本橋の上に高速道路を作った我が国を見習ってほしいもんだ」

浩之さんはクラクションを鳴らしますが効果はゼロ。進むほどに混雑さが増して、通りの中ほどで、ついに車をストップさせるほかなくなります。

私はモルダウ川に目を向けました。

白夜様がいると思われる島は、中洲のような小島のうちのひとつで、肉眼でも確認できました。

ボルヘスで距離を測定。

直線距離は三百十二メートル。

あと少しなのに。

白夜様はすぐそこなのに！

「お嬢さん」
「は、はい」
「希望ヶ峰学園がどれだけ希望を蒐集したところで、チームびっくり人間がダースで作られるだけだ。でも『アレ』は違う」
「…………」
「『アレ』は、技能や技法じゃない。世界のルールに関与できる能力だ。きみと坊ちゃんは、過去にそれを体験した。『十神一族の繁栄の秘密』を体験した。そうだろ？」
「…………」
「僕は祁答院浩之。希望ヶ峰学園や十神財閥とは関係ない、ただのト

リックスターさ。主役になれない。星にもなれない。でもお嬢さん、きみは違う」
「私は白夜様の所有物です」
「そんなの関係あるものか。『星の王子さま』の主人公は、王子じゃないだろ。『超高校級の書記』であるきみは、語り部の資格はもちろん、書き手の資格まである。それってすごいことだぜ、実際」
「もしかして、はげましてくれてます？」
「どうかね。お別れの言葉かね」
浩之さんがほほえんだ瞬間、メルセデスは急発進しました。
あれ？
だけど。
道は断たれたはずですが……。
「アイ・キャン・フラーーーイ！」

「[illegible]」

浩之さんの絶叫が、私の疑問に答えてくれました。

モルダウ川を飛ぶつもりなのです！

道をふさがれ、たいした加速をつけられなかったメルセデスは、もちろん十メートルも飛ばないうちに落下しました。ちっともフライしてません。鳥人間コンテスト失格。子供の島まであと約三百メートル。

「姉さんを頼んだ！」

浩之さんがナビを操作すると、天井の幌が全開しました。

お尻が振動したかと思うと、私を乗せたまま……後部座席のシートが射出。

人間ロケット。
強烈なGが、私の腰骨を粉々にしようと襲いかかってきます。突き上げる力はすさまじく、強風が口に入って息ができません。お尻の肉が骨盤に押し潰されてしまいそう。
頭上には空。
眼下にはモルダウ川。
メルセデスは川に沈んだらしく、その姿はありません。これで浩之さんが死ぬとは思いませんが、こんなかたちで表舞台から退場したのであれば、たしかにとんだ引っかき回し(トリックスター)です。
私を乗せたシートは、やがて安定した放物線を描くようになりました。
島が見えてきます。

民家の屋根や乗用車を視認。
さらには地面も迫ってきます。
ええと、パラシュート的なものは……。
なさそうですね！
私はシートを飛び出して、両膝と片腕で三点着地を決めこもうとしました。
が。
素人がやるもんじゃありません。慣性を吸収できるはずもなく、地面をはげしくころがってしまいます。受け身はとったものの、筋肉が打ちつけられました。
あえぎ声を嚙み殺して、むりやり体を起こすと……意外なものがありました。

学校（ギムナジウム）。

どっしりとした構えの、古めかしい校舎。

その隣には木造の寄宿舎（きしゅくしゃ）。

小さいながらも教会まであります。

私が落ちてきたのは、どうやら学校の校庭のようでした。

ふと視界のすみに、何かが映ります。

「白夜様？」

そこには絶望がありました。

町は、こういってよければ終わっていた。
道路は剝がれ、建物の多くは全壊、そうでないものは半壊。電柱は悉(ことごと)く折れ、何に火がついているのか道ばたで燃えているものがちらほら見えた。
人間といえば、みんな死んでいた。
肉片は焦げ、そうでないものは四方八方に砕けて散らばっている。ひどいにおい。それは人間の灼(や)けるにおい。生理的な拒絶が僕の胃を何度もせり上げさせる。
立ちこめる黒煙と、空気にまぎれこんだ闇の粒子が、崩壊した町の色彩を重く、そして暗くさせている。空には、さきほどまでなかった厚ぼったい雲が立ちこめて、渦を巻いていた。僕はその光景にデジャヴを覚えた。テレビでうんざりするまで観た『戦争の映像』に、これ

うを覚えた。テレビでうんざりするほど観た『戦争の映像』に、これに似たシーンが、それこそうんざりするほどあったのを思い出したのだ。

焦土。

僕が踏みつけたばかりの瓦礫は、ほんの少し前まで町の電気屋として機能していたらしく、コンクリート片の下には、数台のラジオが埋まっていた。

十神白夜の言葉を、壊れかけのラジオがユニゾンして響かせている。

『……俺の……が……した。……は……通り、証拠を見せて……た。そ……は貴様らへの罰であり貴様……罪だ。俺……くの……心で……ゲーム を進め…のわけを……』

僕は車に引き返す。

青葉の出血は止まらなかった。

町を出る前、なんとなく荷物に入れたシャツを包帯のかわりにして巻いてやるくらいしか、僕にできることはない。あとはせいぜい、鼻血をふいてやることくらいしか。

傷口を押さえる僕と青葉の手は赤く、車内には鉄くさい臭気が充満して、それが車の芳香剤と混ざり、絶望的なにおいとなっていた。

「だ、大丈夫？」

反応なし。

「シートベルトしなくちゃだめだって……」

反応なし。

「こんなところで　まだ空港にもつかないで」
反応なし。
「ねえ起きてよ。起きてくれないと、その、こまるよ」
反応なし。
「せっかくアイドルなのに怪我なんて、もったいない……」
青葉の手が、ほんの一瞬、僕の手をにぎり返した。
それだけでも僕はうれしくて、つい反射的に、「青葉」と呼んだ。
「名前は」青葉の目が薄く開かれる。「もっと、早く、呼ぶべきでしょうが」
「ごめん」
「手」
「え？」
「[illegible]」

「さわらないで」
「……ごめん」
「…………」
「あ、あのさ」
「…………」
「青葉？」
反応なし。
青葉の目がふたたび閉じられる。

遠くからエンジン音が聞こえてきた。
一台のジープが迫ってくる。
オープン仕様のジープには、三人の学生が乗っていた。
眼鏡。
ゴブ。

ラン

少女。

希望ヶ峰学園付属中学校ミステリー研究会、再登場。

ジープは僕の目の前で停止した。

「そんな装備で大丈夫かい」部長がこちらを見下ろしている。「逃避行を楽しんでいたようだが、この世はすべてサバイバル。『一寸先は闇』とは、よく云ったものだ。あなた、コナン君が殺人事件に『たまたま遭遇(そうぐう)』した回数を知っているかい？」

「た、助けてあげて」

「助けるだと」

「この子、死にそうなんだ。血がたくさん出て、もうどうすればいいか……」

「衛星落下の直撃を受けたこの町に、死傷者はどれくらいいるだろう。なのに、よくもまあそんな情況下で、『助けてあげて』など云えるものだ。僕たちはナイチンゲールじゃないのだ」

「あっちゃー」助手席の副部長が、嫌そうに目を細めた。「青葉さとみ、血ィ出すぎだぞこれ。気持ち悪いもんだぜ。アイドル失格だぜ」

心無い感想にブチ切れてもよかったのだが、僕自身も『アイドルも鼻血を流すのか』などと思ったわけで、同じ穴の狢（むじな）だ。

「はーあ。青葉さとみは終わりか。血ィ出して終わりか」副部長はつづける。「まいいや。序列三位に乗り換えよっと」

「うははは〜い！　機種変更ですネ！　わくわく」

会計はスカートからのびる脚をばたつかせた。

連中はやたらと楽しそう。

僕や青葉はもちろん、周囲に広がる地獄すら、アミューズメントパークの出し物くらいにしか思っていないような態度。

通じない。

　でもそんなこと、最初からわかっていたじゃないか。

　こいつらとはじめて会ったときから、わかっていたじゃないか。

「さて」部長はジープから降りた。「あなた、つらそうだね。人生に不満足で、女の子も助けられず、いい年して何もできなくてつらそうだね。世界が非日常に支配されても、あなたの退屈な日常はつづく。この普通だけが、あなたの今。しかし、おそろしい話だが……それが苦痛ってわけでもないのだろう？」

「……ふ！」

「うん？」

「[illegible]

「ふ……付属校のくせに！」僕はできるだけ険悪な声を演出した。

「僕は付属校なんてみとめないぞ。そんな人生は拒絶してやるぞ」

「いいね。その叛逆（はんぎゃく）エネルギー。ネバネバした憎悪のかたまり」

「う、うるさい」

「どうして麻薬が禁止されたのかを知ってるかな」

「え？」

「アメリカ開拓時代の奴隷たちは、コカの葉なんざをキメながら働くものだから、際限なく仕事ができた。それをおそれた白人の労働者たちが、モラルを盾に禁止させたのだ。善悪だの倫理だのは、あとから作った建前にすぎない」

「それがなんだ」

「世界にキレた人間は、世界に不満足な人間は、麻薬をたっぷり嚙み

噛みしてもいいという話なのだ　副部長　例のものを」

すると副部長はジープの荷台から、何かを放り投げた。

地面に落ちる。

適当に印刷し、適当にホチキスでとめられたそれは、安っぽい同人誌にしか見えなかったが、僕はそこから滲（にじ）み出てくる恍惚を、暗黒を、即座に見抜くことができた。できてしまった。

僕は知っている。

世界も知っている。

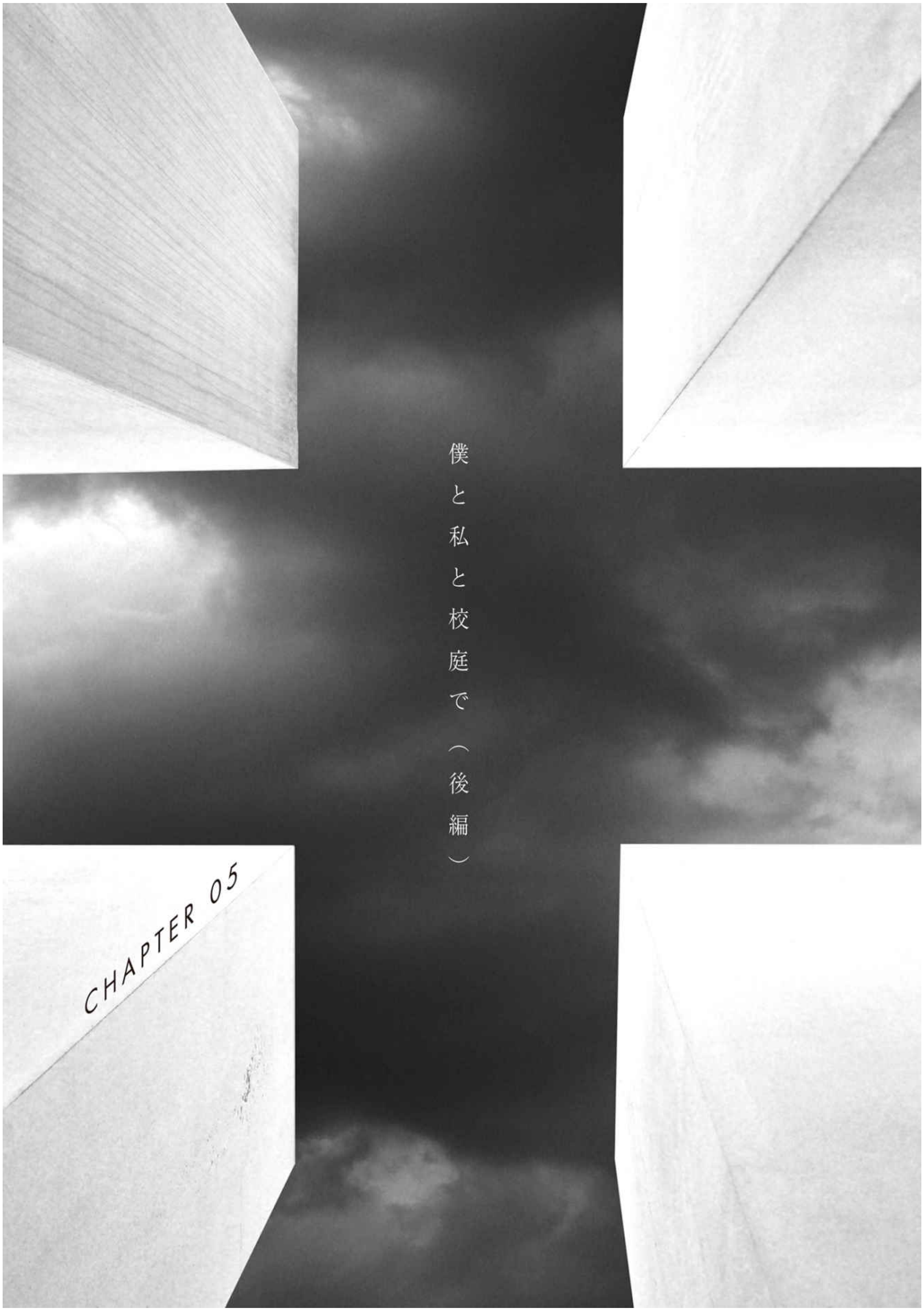
「今月のオススメ本はこちらです」

部長が云った。

もちろんそれは、『絶望小説』だった。

9

絶望。
私はそこで、絶望を見つけてしまいました。
校庭の真ん中に、さびしく捨てられた物体。
白夜様の死体でした。


僕と私と校庭で（後編）
CHAPTER 05

1

私は叫びました。正確には叫んだつもりでしたが、声が出ませんでした。声なき絶叫を上げながら、それでも目の前にあるものを見ます。

観察。

いつもするように。

それが仕事だから。

だだっ広い校庭にあるのは、華美な装飾がほどこされた白いラウンドテーブルと白いチェア。テーブルの上には、やはり白を基調としたティーカップが置かれていました。ついさっきまでティータイムがおこなわれていたかのように。

白夜様の死体は、ティーセットの脇にころがっていました。
瞳を閉じ、後頭部を地面につけ、腕と足を組んだいつものポーズをくずさない白夜様は、見ようによっては午睡（シエスタ）の最中のようでした。
しかし口の端からは血が一筋垂れ、咽喉（のど）も動いていません。
この情景をちゃんと記憶しておかなくちゃ。と思った自分が嫌でした。
時刻は午後十一時三十七分。
気づけば空は闇に侵食され、三日月が浮かんでいます。
白夜の終わり。
いつもなら、こんな退屈な暗喩は無視できましたが、白夜様の死により壊れつつある私にはもう、自分を構成することが、自分を校正す

ることができません。

そんな私を、小さな少女と傘を差した男が、白衣姿のふたり組が見つめています。

白夜様を殺した、初瀬川研究所。

殺意が湧きました。

殺戮（さつりく）の衝動に貫かれました。

なのに、このふたりから事情を聞かねばという発想に、精神が統制されます。

本能より理性が、感情より仕事が前に出ます。

だって私は『超高校級の書記』で、『白夜行』を書くのが至上命令なのですから。

「なんで殺したの」

私は問いました。

「のっけから怒ってる……」小学生にしか見えない少女が、ぶかぶかの白衣を揺らしながら云いました。「お姉さん、まあ聞いてくださいなー。十神お兄さんが自白してくれなかったんです。私はちゃあんと、『オマエの爪のあいだに、焼いた竹串を刺して、アツアツの蠟を垂らしちゃいますぞコラ～』って脅迫したんですよ？　なのにスルーされちゃったんだもん。不可抗力だもん。あ、ちなみに私、主任です」

「主任」

「初瀬川研究所の北海道支部から、出張でやってきました。以後お見

知りおきをですぞコラ～」主任と名乗った少女は、小さな体を折ってお辞儀をします。「体は子供！　立場は大人！」というわけでお姉さん、主任の私を、ちゃあんと尊敬するのですよー」

「死ね」

「あ……あれ。まるで尊敬されてない。普通に軽んじられてる。おっかしいなあ。こんなに白衣なのに。学校じゃ大ウケなのに……ぐすっ。わ、私だってあれですよ。泣きますよ。いいですか、児童を泣かせると……あとで…大変な……こ、と、と、ととととととととととととととととととととと」

主任の体が痙攣（けいれん）をはじめると、傘を差した男がすばやい手つきで、その口に何かを入れました。

「もぐもぐもぐ……ふう。あ、あぶなかったぁー。ほら私って天才だ

から、すごい速度で脳が糖を消費しちゃうんですよ。だもんで、頻繁に糖分を摂らないと低血糖になりまして。お姉さんも食べます？ 六花亭のマルセイバターサンド。私の安定剤。百六十五キロカロリー」
「主任、話を進めましょう」傘の男が云いました。「登場からひとりでしゃべっていますが、天才性の欠片も見せられていませんよ」
「これは私の部下ですー。部下ですよ部下」
「部下の金井です」
傘の男が頭を下げました。
「さあ金井クン。私の部下の金井クン。私の使い潰しの金井クン。私の便所サンダルの金井クン。かわりに説明してあげるのだー」
「了解しました」金井と名乗った男は慇懃にうなずくと、こちらに視線を向けます。「主任に代わりまして、僕が説明させていただきま

す。初瀬川研究所はごぞんじの通り、あらゆるものを研究対象としています。宇宙のはじまりから、太陽の塔に生えている腕っぽいものの存在理由まで、つまり森羅万象のすみずみまで研究せねば気がすみません。そんな我々は、『十神一族の繁栄の秘密』にかんして、かねてから別格の関心をそそいでいましたが、天下の十神一族に喧嘩を売る大義名分がないため手をこまねいていました。しかし今回の『世界征服宣言』により……」

「ねー金井クン」

「主任。長ったらしい説明を最後まで聞くのもレディのたしなみですよ」

「その、脳が糖分を欲していて……」

「バターサンド、食べたばかりではないですか」

「だって私、天才なんだ……から……頭が……ぼ…ん…や……りりりりりりりり」
「耐えてください。これが終わったら、なんでも好きなものを買ってあげますから」
「りりりりりりりり……す、好きなもの？　ケーキ買ってくれる？」
「了解しました」
「『オヴォッツニー・スヴェトゾル』のポメラノチョヴィ・ドルト・セ・ザキサノウ・スメタノウ」
「はい？」
「店の名前とケーキの種類だよ」
「おどろきました。僕はてっきり、主任がチェコ語をマスターしたのかと」
「チェコ語なんて二歳のときからもうわかってたよ。天才だもの。じ

や、説明再開しろよコラー」
「御意」金井はうなずきます。「以上の理由から、我々は十神財閥の御曹司たる十神白夜を捕獲しました。しかし何も語ってくれなかったので、自白剤を飲ませる運びとなったわけです。初瀬川研究所特製の自白剤ですから、効果は抜群でした。ただ副作用がありまして、飲んだら死んでしまうのですよ。ごらんの通りに」
そうですね。
死んでいますね。
ごらんの通りに。
校庭に横たわった白夜様の死体は、革命の果てに倒された独裁者の石像のように、どことなくさびしそうに見えました。
さびしさ。

不思議なことに、いかなるタイプの死体にも、それが内在していました。私が見てきた死体はみんなそうでした。大好きだったあのひとも、大嫌いだったあのひとも、みんなみんな死んで、みんなみんなさびしそうでした。

「自白剤を飲んだ十神白夜は、大いに語ってくれました」金井の説明が、私を現実に引き戻します。「そしてついに、とうとう、知ることができたわけです。『十神一族の繁栄の秘密』を。そう……件（くだん）のことを」

2

「これはミステリではないし、ミステリだったとしてもそろそろ解決

編に入るので、犯人を明かしても問題ないだろう。諸悪の根源は、希望ヶ峰学園。すべては希望ヶ峰学園がまねいた絶望なのだ」
焦げた魚焼きグリルの中身みたいな町に立つ部長は、『絶望小説』を拾い上げる。
厚みはそれほどではないようだ。
内容もスカスカなら爆笑してやるのに。
「十神白夜氏も、ミス研も、『絶望小説』も、すべては希望ヶ峰学園が生成したのだ。希望が絶望を生成したのだ。どうだね、なかなか絶望的な展開だろう？」
「希望ヶ峰学園さえ存在しなければ、世界は希望に包まれていたってか……」
僕にできるのはセンスのない返しと、青葉を見守ることくらい。
青葉。

車のシートに横たわった青葉からは、生命があふれ出していた。
脇腹からの出血はおさまらず、座席の下には血だまりができている。今や苦悶の表情すらなく、ときおり聞こえる呼吸がなければ死体と変わらなかった。
「希望ヶ峰学園がなければ、世界は希望に包まれていた？　笑わせてくれるのだ」
部長は笑う。
ジープに乗った副部長と会計も、似たような声色で笑う。
好きに笑え。
勝手に笑え。
でもお前らが笑っているのは、未来の自分だぞ。
「[illegible]だぜ」副部長はニヤニヤ顔をこちらに向けた。「[illegible]

「甘ったりぃもしたせ」副部長はニヤニヤ顔をこちらに向けた「もし母親がガンで死ななきゃ、ヒトラーは政治家にならなかったし、そうなりゃ第二次世界大戦は起こらなかったし、そうなりゃ都井睦雄は大量殺人することもなかったし、そうなりゃ『八つ墓村』は書かれなかった……。あんたが云ってんのは、そういうことだ」

「うははーい！　それだと『丑三つの村』も書かれないことになりますネ！」

「だけど、そうだろ」僕は食い下がる。「『起』がなれば『承』もないし、『転』も『結』もない」

「一九四〇年」部長が年号を口にした。「日中戦争が泥沼と化し、札幌冬季オリンピックは幻と消えた。しかし人々の熱意と努力により、三十二年後の一九七二年に開催が決定された」

三十二年後の一六一二年に開催が決定された」
「なんだよ急に」
「一年後なのか百年後なのかは知らないが、大地震はいつかはくるし、飛行機もいつかは落ちるし、疫病もいつかは流行るし、戦争もいつかは起こる。太陽も五十億年後には死ぬし、そうなれば地球も死ぬ。弥勒菩薩は五十六億七千万年後に到来するそうだが、地球もないのにどうするのかね」
「……だから、さっきからなんだよ」
「起こるべくして起こるものは、いつかはかならず起こる」
「そゆこった」副部長が言葉を引き継ぐ。「もし希望ヶ峰学園なんてもんが最初からなかったとしても、今回みたいな大破局は、いつか絶対に起こってたわけさ」
なるほど。では希望ヶ峰学園がなかったら、僕の人生はどうなって

いただろうか。『都会で企業戦士として働く僕①』や、『田舎で農作業をする僕②』や、『小説家としてバリバリやっている僕③』という『僕』なんてものが存在しただろうか。

あまりイメージが浮かばない。

希望ヶ峰学園に希望をぶっ壊されなくても、今と変わらない情況で、希望もなく、夢もかなわず、本を読んだり読まなかったりして、社会に出たり出なかったりして、生きたり生きていなかったりしているような気がした。

僕は僕だ。

僕は、『僕①』や『僕②』や『僕③』じゃない。

僕は仮定じゃない。

僕は過程じゃない。

僕は才能じゃない。

僕は才能じゃない
僕は仕事じゃない。
僕は人生じゃない。

僕が僕でいるのは、今があるから。
僕が僕であるのは、意味があるぞ。

「あなたのための物語をあたえよう」部長はまるで僕の意を汲んだように、手にした『絶望小説』を掲げた。「筋書きは単純なのだ。あなたをずっと苛(さいな)んできた心の傷。あなたがずっと拗(こじ)らせていた承認欲求。それらが、この『絶望小説』を読むことで解決するという、それだけの物語」

3

ボルヘス＝検索結果
＃６９０１０９２２
項目　資料
タイトル『件にまつわるエトセトラ（情報開示レベル４）』

六日　丙寅　武蔵国浅草寺に牛の如の者忽然として出現し、寺に奔走す。時に寺僧五十口ばかり、食堂の間に集会するなり。件の怪異を見て、廿四人立所に病痾を受け、起居進退ならず。居風と云々。七人即座に死すと云々。

『吾妻鏡』

夫(それ)この件といふ獣ハ古へよりあるといふ説有。先にも文政年間に、此獣出る。その時年中の吉凶を諸人に知らしめ、我姿を家の内に張置と記ハ、厄難病難を除くといふて、三日にして死せしといふ。夫ゆへ皆銘々に其図を求めたりとある老人のはなしなり。一体この件といふ獣ハ牛の腹より産れるなり。形は牛にして面は人間のごとくなるが、頭にハ角をいただ記、能(よく)ものいふなり。故に文字ハ人べんに牛といふ字を出也。此度所ハ雲州の在方に於て、当四月上旬に生れしが伝へていふ、当年より諸国稀なる豊作なり、然りといへども孟秋のころに至り、悪しき病流行する事あるべしと吉凶を示し、三日にて落命せるとぞききたる故、右の次第を諸人に伝え志め

ん と爰(ここ)に其図を顕(あらわし)出すものなり。必(かならず)銘々に求め玉ひて家の内に張置厄病の難を除き玉へといふ。

『かわらばん――件獣之写真』

私は風の運んで来る砂のにほひを嗅ぎながら、これから件に生まれて初めての日が来るのだなと思つた。すると、今迄うつかりして思ひ出さなかつた恐ろしい事を、ふと考へついた。件は生まれて三日目にして死に、その間に人間の言葉で、未来の凶福を予言するものだと云ふ話を聞いてゐる。こんなものに生まれて、何時迄生きてゐても仕方がないから、三日で死ぬのは構はないけれども、予言するのは困ると思つた。

『内田百閒／件』

神戸地方テハ「件」カ生レ自分ノ話ヲ聞イタ者ハ之ヲ信シテ三日以内ニ小豆飯カ「オハギ」ヲ喰ヘハ空襲ノ被害ヲ免レルト言ツタ相タ

『三月中ニ於ケル造言飛語』

件というものの予言は何処でされるか判らぬが、とにかく何処かで件が予言する。例えば流行病の襲来するぞとか、戦があるぞとか。牛が人間の如く物をいう怪物が、来るべき不幸を予言して、それに備えるべき方法を伝授して死んでゆく。件というものはあまり長くは生きていけぬ。四日か五日、七日間位で死んでしまうものだという。その件の伝授した方法が何処からともなく、はやって来て、軒毎に護符を吊したり、特殊な食物を拵えたりする。

て、転籍に戸籍を出したり、特殊な食物を摂えたりする

『桜田勝徳／松浦の島々』

わたしが未だ青年のころのこと、この件の遺骸だというものを風呂敷に包んで負うて、赤インキで木版刷りにした紙片を配って米や銭を貰い歩いて来た男があった。その紙片には、

「件の一言は彼の女に七年以下の豊作と申立てにて斃死(へいし)せり」

と記してその下に人面獣身の件の絵がかいてあった。この男はわたしの留守宅へ来て紙片を置いて行ったのであったが、家人は其の男の背負うている風呂敷の中の乾物の件を実見したそうで、ネコの子ほどの大きさのものだったと語った。印刷物の文面から推せば、その件は、人間の母親から誕生したものの如くであるが、これ以外何も見たことも聞いたこともないので、いっさいわからじまいで

ある。

『西播磨昔話集』

クダン（霊）牛の子で人語を解するもの。その言うこと一言は正しい。よって件の如しという俗説を生じている。いまも九州・中国地方では時折聞く。生まれて四、五日しか生きていない。多くは流行病や戦争の予言をする。

『綜合日本民俗語彙』

予言の意味がおわかりにならないようですな。
い、、、、、、、、、、、、、、、、
いくら手をつくしてもどうしてもそれは起こってしまうから予言なんです。

『とり・みき／パシパエーの宴』

こうしてクダンさまの予言をきいたあと、「ぼくが世界をせいふくするからね。みんなを安心させるからね」と、あの子はいいました。

『白夜行』

4

「希望ヶ峰学園は心配性だった。希望を愛するあまり、希望のない世界に絶望するようになった」部長はつづける。「伝染病が広まろうが、核戦争が起ころうが、学園にとってそれは『世界の終わり』を意味しない。[illegible]

味しない。ひとつでも希望があるかぎり、どのような世界になっても、それは絶望ではない」

「あのガッコがビビってんのは、世界情勢だの天変地異だのじゃなくて、ひとの心が絶望に支配される瞬間ってわけ」副部長が言葉を受ける。「全人類が『絶望した！』と叫ぶ、その瞬間ってわけ」

「うほほーい！　希望ヶ峰学園は一般人を信じてませんからネ」会計が云う。「やがて学園は、『人類の希望と呼べるほど優れた才能』ってものに、この世を統治してもらいたいという妄想に憑かれます。新たな一神教の完成でーす！」

「無論、『神なき一神教』などただのナンセンスにすぎない。学園は人工的に、自分たちが求める神を、『超高校級の希望』を作ろうとした。スポンサーや予備学科から吸い取った資金を湯水のごとく使ってる。完成したかどうかは知らないが。世界は依然として混沌の中にあ

れ、完成したかどうかは知らないが、世界は依然として混沌の中にあるから、失敗したのだろうな。それに僕たちが興味を寄せているのは、そっちの計画ではないのだ」

部長はふたたび『絶望小説』を掲げた。

わら半紙をまとめただけの印刷物を、まるで聖遺物（せいいぶつ）か何かのように。

「昔、『完全自殺マニュアル』という本が流行した」

その本は知っている。

その本は読んでいる。

水死焼死縊死毒死感電死飛び降り自殺。

自殺の方法がたっぷり書かれた説明書。

「頁を見るかぎり、あなたはまでこ読んでいるようだね。なら話が早

いのだ。あらゆる自殺の方法が書かれたその本に、自殺志願者たちは飛びついた。死にたかったからじゃない。死にたくなかったからだ」

そう。

死にたくて死にたくて死にたくて、でもそれと同じくらい生きたくて生きたくて生きたくてたまらないひとびとが、『完全自殺マニュアル』に癒しを求めた。

自殺のカタログとして一級品だったその本は、自殺防止としてもまた一級品。

安っぽい逆説ではあるが、『完全自殺マニュアル』は、自殺という行為そのものを無効化させる効能を持っていた。

「希望ヶ峰学園は、『超高校級の希望』を作るいっぽうで、自分たちにやれることも考えた」部長は『絶望小説』を掲げながら云う。「人

類が絶望に支配されたとき、希望をもたらしてやることはできないか。そのためのマニュアルを、サプリメントを、福音書を、作ることはできないか……。やりくちは、『完全自殺マニュアル』といっしょなのだ。あらゆる絶望が書かれた本を読むことで、かえって人々の希望となるシステムを作る予定だったらしい。で、僕たちはそのシステムをうばい、悪用した」

「それが『絶望小説』の正体なのだ」

「僕たちはそいつを撒いた。ミステリといっしょ。種蒔きといっしょ。あとはそれが世界中に広がり、発芽し、開花するのを待てばいい。ミステリが死んでも骨格は残る。呪いは残る」部長は一息つく

と、言葉の波及効果を確認するようにあらためて僕を見た。一駆け足の解決編となったが、ざっとこんなものなのだ。納得してもらえたかね」

「できるわけが……」僕はひさしぶりに口を開く。「どうして付属校の人間が、希望ヶ峰学園の真意とか、『超高校級の希望』とか、そんな機密情報を知ってるんだ」

「だーかーらー付属校なめんな」副部長が云った。「希望ヶ峰学園は、もう終わりさ。砂上の楼閣はついにぶっ壊れようとしてる。末期症状でマッキッキ。たぶん、数年もしないうちに崩壊するぜ」

崩壊。

希望ヶ峰学園が。

大好きで大嫌いな希望ヶ峰学園が崩壊？

「このガッコは[illegible]

―あのオッサンには限界なんだよ。政治も、収支も、活動も、秘密も、すっかり欺瞞（ぎまん）でふくれちまって、破裂寸前ってわけ。俺たちが針を刺さなくても、パンって割れるさ」

希望ヶ峰学園が終わる。

その言葉は僕の深い部分を刺激した。

より素直に云おう。ショックだった。

希望ヶ峰学園は永遠に存在するものと決めこんでいた僕にとって、そのニュースは深刻だった。

大好きなサッカー選手が政治家に転向した子供のように傷ついて、恥ずかしい話だけど泣きそう。鼻の奥がグズつく。僕はあまりに無防備に心を痛めている。

僕がくずれていく様子を、希望ヶ峰学園付属中学校ミステリー研究会の三人は、とてもとても楽しそうに見ている。

付属学校という名の藁（わら）にしがみついてまで入りたかった希望ヶ峰学園を、こいつらが捨てた理由が今、わかった。

本科に入るのではなく、世界を密室でいっぱいにする道を選んだのは、アイデンティティたる希望ヶ峰学園がなくなるから。

本科に入れなかったときの云いわけを考えずにすんでよかったですね。

そんな皮肉を思いついたけど、同時に僕はこいつらに同調（シンクロ）もしていた。

希望ヶ峰学園を愛し、希望ヶ峰学園がなくなることを悲しみ、でも

最初から希望ヶ峰学園に相手にされていない僕たちは、そういう意味では仲間なのだから。
「希望ヶ峰学園は終わる。なのに僕たちは終わらない。これ以上の絶望はないのだ」
部長はほとんど苦笑に近い表情になると、『絶望小説』を僕に渡そうとする。

「どうして」
「うん？」
「どうして僕に、それを読ませようとするの？」
「あなたの絶望が見たいのだ」
「僕の、絶望……」
「たいした才能もなく、世界からこてんぱんにされ、だれにも承認さ

れぬまま大人になった人間が、モグラとなって抵抗している」
「………」
「あなたはほかの連中のように、『絶望小説』を読もうとしなかった。ええじゃないかの踊りを、キリキリ舞いを、いっしょにやろうとしなかった。もう、じゅうぶんではないか。あなたひとりでやれるすべては、終わったのだ」
同志の顔つき。
僕の手が自動的に動いて、『絶望小説』を受け取るのが見えた。
「あなたには『絶望小説』を読む資格がある。絶望を獲得し、自尊心を取り戻す資格がある」
だとすれば。
ゲームのはじまりだ。

絶望するのか絶望しないのかを選ぶゲーム。
ふたつの選択肢が浮かぶ。

『絶望小説』を読む
『絶望小説』を読まない

どうすればいいだろう。
どちらを選べばいいだろう。
僕の希望はどちらにあるのだろう。

5

「十神一族は世襲制ですが、『次期当主決定戦』と呼ばれる、特殊な

システムを採用しているそうですね。簡単に云えば、次なる当主の座をめぐるバトルロイヤル。一族同士が戦い、潰し合う」金井は暗い校庭に立ったまま言葉をつづけます。「前回の『次期当主決定戦』の最中、連続殺人事件が発生しました。『十神一族最大最悪の事件』と呼ばれているものです」

　私は自分でも無表情になっているのがわかりました。こんな顔になるのはひさしぶりです。まるで顔面の筋肉が勝手に頭蓋骨にへばりついているかのような。

「ほう、そんな顔になるんですね」

「どうして『十神一族最大最悪の事件』を知っているの。これはごく一部の人間しか……」

「物語に律儀ですね。今さらおどろいてみせなくてもいいですよ。

『世間で公開されていない未公開の極秘資料』の閲覧は、十神一族の専売特許ではありません」金井は平然と云ってのけます。「『十神一族最大最悪の事件』の関係者は、そのほとんどが事件の中で殺されました。そして」

「あなたと十神白夜は、数少ない生存者です」

ボルヘスを使うまでもなく、『十神一族最大最悪の事件』は私の脳裏に、潜在記憶に、完全に刷りこまれていました。

目を閉じるだけで、あの日の惨劇がありありと浮かぶほどに。

人はそれをトラウマと呼ぶのでしょうし、私もそうだと思っていま

す。だって、陰惨な殺人事件の日々が……かけがえのないない大切な思い出になっているのですから。
「十神白夜はすべてを自白してくれました。十神白夜とあなたが、事件解決のために件の力を借りたこともすべて」
「それなら、私がここにいる必要はないけど」
「あなたの口からも、情報がほしいのですよ」
「十神お兄さんはねー、『件のかんじんなこと』を知らなかったの」
チェアに腰かけた主任は、その横にころがる白夜様の死体に目もくれず、お茶を楽しんでいました。
「主任。いいのですか」
「いいのです。お菓子がないんだからティータイムくらいさせろよコラー」
「その紅茶、自白剤が入っていますよ」

「わあああああああああ！　死んじゃう！　恥ずかしいことをすっかり白状したあとに死んじゃう！」主任は胸ポケットから取り出した錠剤を、大慌てで飲みこみました。「ふううううううぅ。私が天才でよかった〜。理由もなく解毒剤をポケットに入れておくほどの天才でなかったら死んでた……」

「『馬鹿とクソは紙一重』なんて云いますからね」

「『馬鹿と天才は紙一重』だぞコラー！」

「というわけで」金井は私に向き直ります。「あなたに協力していただきたいのです。あなたは『件のかんじんなこと』を知っているはずですから」

「協力しなかったら？」

「自白剤を飲んでもらいます」

「解毒剤は今みんな飲んじゃったからもうないでーす」
主任が云いました。
「結果は同じじゃないの」私は抗議の声を上げました。「白状させても、自白剤を飲ませても、どっちにしても初瀬川研究所は、件の情報を手に入れることができる」
「場を仕切っているのは我々ですからね。こちらが得する条件ばかりなのは、ご了承（りょうしょう）いただきたい。それに……結果は同じではありませんよ。あなたの生死が変わりますよ」
だとすれば。
ゲームのはじまりです。
絶望するのか絶望しないのかを選ぶゲーム。
ふたつの選択肢が浮かびます。

初瀬川研究所に協力する
初瀬川研究所に協力しない

どうすればいいでしょう。
どちらを選べばいいでしょう。
私の希望はどちらにあるのでしょう。

6

僕の選択。
僕は……。

『絶望小説』を読む

▼『絶望小説』を読まない

7

私の選択。

私は……。

初瀬川研究所に協力する

▼初瀬川研究所に協力しない

幕間（インタルード）

そろそろ忘れているだろうから、くり返す。

本テキストを書くにあたり、次の筆記システムを使用した。

k2k-system ver2.3

フェイク。イカサマ。インチキ。あらゆる場所にゴミがはびこる世界で、よくやっていると思う。すべての人間に罪の可能性をあたえる世界のシステムには舌を巻くしかない。

そんなわけなので、僕の仕事といえば、ちょっとした宣言くらいだ。身のほどはわきまえている。あとがきを書いて自滅する小説家どもの仲間入りをする気はない。

えっと。

楽しんでくれてる？

僕はみんなに、本書を、今回のメディアミックス（出版の世界でいえばとうに死語であり、しかし、あまりにルーティン過ぎて日常化している現象『大塚英志／角川歴彦とメディアミックスの時代』）を、このノベライズを、心から楽しんでもらいたいんだ。

それだけなんだ。

本当に。

というわけで、今後のよりよい作品づくりのために、ひとつ聞きたいことがあるんだけど、ノベライズってなんの意味があるんだろう？

経済効果のある作品を他メディアへと派生させ、ファンアイテム

ないし

乃至は宣伝効果を目的として量産される刹那の物語。ってこと以外に、なんの意味があるんだろう？

というのも、ノベライズというものを今までに何作か読んだことはあるけど、ほとんど記憶に残っていないんだ。

スポンサーと出版社の指示するまま作られた、毒にも薬にもならない物語。

スポンサーも出版社も執筆者もやる気ゼロで作られた、七十点くらいの物語。

職業作家がプロットを小説の体裁に落としこんだ、結局は七十点くらいの物語。

制作陣の気合いが超絶空回りした結果、ファンから『冒瀆（ぼうとく）』呼ばわりされる物語。

存在があまりに空気すぎて、ファンにすら『そんなの出てたの？』と云われる物語。
何してんのよ？
ふざけてるの？
書くやつも、書かせるやつも、読むやつも、もうちょっとがんばろうよ。
尊敬するあのひとの本棚。パパやママが読めとすすめる本のセレクト。夏休みの課題図書。愛してやまない小説家の新刊。そうした場所に決して現れることのない本、それがノベライズ。
僕が今から、その常識を破壊しよう。
ノベライズの矜持（きょうじ）を見せつけ、教示を知らしめ、本書が近所の

古本屋に送られるそのときを、一日でも遅らせてみせよう。
あなたが引越や結婚のために荷物を整理するとき、「あ～、この本は捨てられないなあ」と思える一冊にしてみせよう。
願わくば、ずっとずっとずっとずっとずっと、あなたの本棚に入っていられますように。
さて、ここからがおもしろい。
はじまり(オリジン)の魂に幸あれ。
くり返す。あるとすればの話だが。

ジープは尻が痛くなる。
僕はアクセルをベタ踏みしていた。
安全運転も交通ルールも気にしない。
人と車で道が混雑してきても気にしない。
助手席の部長が何か云っているが気にしない。
後部座席の副部長と会計も何か云っているが気にしない。
もう気にしない。
そう決めたのだ。
青葉の容態は、気になるけれど。

▼『絶望小説』を読まない

あのクソったれな『絶望小説』を、依然変わることなく読まないという選択をした僕は、それでも自分なりの希望を、自分なりの結末を見つけたかった。ベストエンディングを見つけたかった。

だから僕は『絶望小説』を破り捨て、叩きつけた。ミス研の三人はそれを見て笑った。

こうして受け入れられた。

「受け入れちゃいねーぞ」副部長が指摘する。「俺たちゃ、あんたをためしてるのさ。才能もないくせに『絶望小説』を読まないで、どうやって希望を見せてくれるんだか」

「うっほほーい！　最終試練ですネ。どきどき。自分の希望を見つけつつ、こちらの瀕死のお姉さんも助けなくちゃならないんだからミッションてんこ盛りー」

会計が荷台に視線を送る。

僕もミラー越しに確認してみたが、幸か不幸か、ここからでは青葉の姿が見えなかった。

「ボヤボヤしてると、青葉さとみ死んじまうぞ」副部長がニタリと笑う。「俺さ、今回の件で、人の死ってやつをたくさん経験したけどよぉ。出血多量か？　あら簡単なんだな。すぐ死ぬんだな」

「彼にムカついたのなら、殺せばいいのだ」部長が簡単に云った。

「得物はそこにある」

ダッシュボードを開けてみると、サバイバルナイフやアイスピックといった各種凶器が入っていた。人を傷つけ、殺めるための道具でいっぱいだった。

くだらない。

そんなんじゃない。
そんなことで満足するのは、『絶望小説』を読むのといっしょ。
僕は希望のためにジープを走らせた。
盗んだバイクで走り出すのが若者の特権だとすれば、あたえられたジープで走り出すのが、オッサンのせめてもの権利だ。

9

そう広くもない島内に、私は隠れています。主任と金井の姿は見えず、追っ手もやってきません。見逃してくれたのか、遊ばれているだけなのかは知りませんが、できるかぎりのことをするしかなさそうです。

▼初瀬川研究所に協力しない

当たり前にもほどがある選択をした私は、それでも自分なりの希望を、自分なりの結末を見つけようとしていました。ベストエンディングを見つけようとしていました。

だから私はボルヘスで最適な逃走経路を見つけると、校庭を駆け抜けて、身をひそめました。

ボルヘスは機能満載ですが、見知らぬ島で、見知らぬ相手から逃げ切れるほど潤沢な装備はありません。というより、ボルヘスは『白夜行』を書くための筆記支援ツールとして開発されたものであり、サバ

イバルを生き抜く万能ツールではないのです。

『十神一族最大最悪の事件』は、サバイバルでした。

白夜様は才能をフル回転させて謎にいどみ、私は血ヘドを吐きながら『白夜行』を書きました。

頭脳労働とはよく云ったもので、事件と記述の日々で思い知ったのは、見たこと感じたことを文章にする作業の大変さ。

執筆だってサバイバル。

なんの話でしたっけ？

なんかうまくいかないな。脳。白夜様は何やってんの。あそっか。

死んだ。死んだ死んだ。何やってんの。じゃあその。

とにかく逃げなくちゃ。

どうやって？

私をここまで飛ばしてくれた人間ロケットは片道ですし、どうもこの島には、一本の橋が本土に架かっているほかに、移動経路がないようでした。

やるしかない。

橋を渡るしかない。

薄墨色（うすずみいろ）という表現を使うにはやや西洋的なトーンの闇にまぎれて、ときおり月の光を頼りにして、私は走ります。

島内にはひと気がありません。デモに出払っているのか、恐怖で家にこもっているのか、べつの理由によるものかは不明。不安と孤独と、白夜様がもういない現実にやられ、走り疲れるよりも早く、呼吸がおかしくなりました。えぐえぐと咽喉の奥から奇妙な音が漏れまし

た。走るたびに万年筆がインク漏れするのが嫌いでした。一時期、ボールペンや鉛筆に代えてみたのですが、紙にうまくなじむのは万年筆のインクだけでした。ブルーブラックのインクだけでした。青インクだけでした。

あー？

脳。がんばれよ脳。私の脳がんばれ？

ここで疑問。

疑問タイム。

白夜様がもういないのであれば、白夜様が死んでしまったのであれば、『白夜行』はどうすればいいのでしょう？

そういえば『信長公記』が、どうやって幕を閉じたのか知りません。本能寺で信長がウッカリ殺されてから、残り何ページで終わった

のか知りません。

「び、白夜様……」

10

大混雑する道を突っ切り、やがて近隣でいちばんの都会に入ったが、しかし病院もまた大混雑だった。

衛星落下の生存者たちが運びこまれているのか。

あるいは僕が知らないだけで、さらにとんでもない事態が広がっているのか。

とにかく気にしないことが大切。僕はジープを道の真ん中にとめて、院内に駆けこむ。

案の定というべきか、そこには大量の負傷者がころがっていて、実際に見たことはないが野戦病院さながらの状態だった。腕や脚に傷を負った、あるいは腕や脚よりも致命的なところに傷を負ったひとたちが、足の踏み場もないほどに充満している。

医者の姿はあったが、だれもが手いっぱいに見えた。青葉を院内にそっと置いたとしても、診てもらえる可能性は低いだろう。脅迫するという手もあったが、警備員に制圧されるのがオチだ。

僕は怒り狂いながら病院を出た。

不首尾(ふしゅび)を察したのだろう。部長は同情でもするように肩をすくめた。

そのあともジープを走らせて、病院を見つけるたびに確認したが、ベッドは負傷者でいっぱいか、そうでなければ臨時休業の看板を下ろ

していた。
なんだよ。
こんな展開アリかよ。
ちゃんと希望を見つけようと動きはじめたのに、どうして世界は応えてくれないんだ。

思い通りにはさせんよ。今まで通りさ。
そんなことを云って爆笑している『外』が見えた気がする。
結局、空いてる病院は見つからなかった。
「どうするね」部長が声をかけてくる。「あなたはどうやって、この戦いを終わらせるのだ。闇雲に車を走らせても、たいした結果にはならないと思うが」
「俺はこういうやつ、嫌いだけどなあ」副部長が鼻を鳴らした。「な

んつーか、いきなりキレるやつっているだろ。ずっと静かだったのに豹変（ひょうへん）してブチギレるパターン。あれ、大嫌いなんだよなあ」
「『バカヤロー！』シリーズみたいな？」
「なんのことか知らねえよ」
「森田芳光なのに？　日本の至宝なのに？」
「まあとにかく、ずっと負けつづけだったやつが、急にキレキャラになって周囲をあっと云わせるのって、どーかと思うんだ」
「副部長、それは革命する側の発言じゃないのだ」
アホどもがしゃべっている。
お好きにどうぞという気分。
都会で病院を見つけるのはあきらめて、地方の町医者へと目標を変える。

国道をしばらく走っていると、はるか遠くに空港が見えた。
ああ空港。

空港！

僕は今日ほど、空港という言葉を情熱的かつ攻撃的に感じたことはなかった。
空港。ここではないどこかへと連れて行ってくれるその施設に、本当は青葉と行く予定だった。予定だったのに。
「その道でいいのかい？」部長が聞く。「僕はあなたが、この局面を切り抜けられるとは、どうしても思えないのだ」
知るもんか。
「いったい、なんのために走っている。自分のためかね。アイドルの

ためかね。どっちにしても、その道のりは退屈そうなのだ」
知るもんか。

「まあそう云うなよ部長。モテない男ほど、ひとつの恋愛にしがみつくもんだぜ。俺の友達に、保育園のころの武勇伝を今も語るやつがいてな……」

「にゃははは〜〜。副部長は自称モテ男ですからネー」

「自称ってなんだよ。俺はモテモテだっての。チョコレートの季節とくりゃ、前もってトラックの準備を……」

「ボクからもらったチョコを、まだ冷蔵庫にしまってるってホントですか？」

「お前がチョコをくれたことなんかないだろ」

「は〜い先生、コマネチはギャグに入りますか？」

「入らねーよ。あと、チロルチョコでいいから来年よこせ」

「うわわ。急な告白〜」

「告白じゃねえって！」

「スポブラ見たいの？」

「お願いいたします！」

学生さんたちが騒いでいる。

僕はどしゃ降りの気分で運転をつづけた。

若い彼らの声を聞いていると、胃のあたりが重くなってくる。憤怒（ふんぬ）。鬱屈（うっくつ）。欲求不満。負のエネルギーが放出され、思考と感情と現実がごちゃごちゃになる。僕自身をあやつる糸がこんがらかるのを感じる。

頭がクラクラ。

目がチカチカ。
季節が、時間が、わからない。自分が何歳で、ここがどこで、昼なのか夜なのかも曖昧なまま、それでも僕以外のすべてが順調に進んでいることだけはわかる。
でもそれ、今まで通りじゃん。
と……。
一本の道を、女が歩いていた。
その顔には、見覚えがあった。
モグラ暮らしを満喫していたころ、すべての時間をついやして、希望ヶ峰学園のことをしらべていた。
そのとき検索した顔。
つまり希望ヶ峰学園の生徒。

女は不健康そうな顔色のまま、
「びび白夜様白夜様白夜様白夜様白夜様白夜様白夜様白夜様白夜様白夜様白夜様……」
と云っていた。
うわ。
怖っ！
なんだこいつ。
ん。
希望？
希望このやろう。

気がつけば僕はアクセルを踏み、希望ヶ峰学園の女に追突していた。
希望のケツを、ガッとやってやったわけだ。
女は川辺に投げ捨てられたエロ本のように、ぶざまに吹っ飛ぶ。
僕は大笑いだったけど、ミス研のみなさんは、いきなり本科の生徒を轢いた僕にびっくりしていた。
おいおい。
おーいおい！
何をおどろいているのやら。こういうことをさせたくて『絶望小説』を読ませたかったんじゃないのかよ。
僕は世界にキレない。

僕はだれも殺さない。
だが希望ヶ峰学園の生徒。
テメーはべつだ。

僕はジープを降りると、くるしそうに痙攣する女を、まったく無感動な目で見つめた。
こんなものかと思った。
「う……うっぐう……」

うめいている。おもしろい。嘘。おもしろくない。ぜんぜんおもしろくない。
女の頭を踏みつける。ギリギリギリギリギリと月並みな擬音(ぎおん)が似合うほ

ど踏みつける。

すると女は普通の悲鳴を上げたので、僕はがっかり。超高校級のくせに、なんたるザマだ。腹が立った。許せなかった。

才能あるなら、めずらしい悲鳴くらい出せってんだ。

ヘミョーとか。プキュキュとか。知らないけど。

今度は腹を踏みつける。何度も。何度も何度も何度も何度も。すると女は、血と吐瀉物（としゃぶつ）の混じったものをピュッと一噴き。それでも僕は踏むのをやめない。何度も何度も何度も何度も何度も踏む。女の臓物が潰れる感触が足に伝わり愉快愉快愉快。

お。

そういえば、ナイフがあるじゃないか。

僕はダッシュボードからサバイバルナイフを取り出すと、一瞬の躊躇（ちゅうちょ）もなく女の腕に突き刺した。

躊躇もなく女の腕に突き刺した

あんまり簡単に刺さったものだから、何度も何度も何度も何度もナイフを突き立ててやる。ザクザクザクザクと、コンビニで買ったカチカチのかき氷を食べるときみたいに。ザクザクザクザク。メッタ刺し。肉が切れ、筋が切れ、指が切れた。女の腕は罠にかかったモグラのように血まみれで穴まみれだ。ばっかみたい。才能あるくせに、普通に刺されてやんの。ばっかみたい。

刃物で陵辱された女の腕は、油っこい血で汚れていた。

あー汚いなあ。

あーやだなあ。

超高校級にも僕と同じ赤い血が流れ、流れてしまえば汚いと感じるのだなあ。

のスス

筋も肉も指も切断されてボロボロの腕をつかむと、渾身(こんしん)の力をこめてそれを引っぱる。

ブチブチという音と、いくつかの抵抗の果てに、女の腕を野菜のようにもぎ取ってやった。

次はその白い咽喉を掻っ切ってやる。

殺してやる。

そう思ったとき、女はまだ残っている方の手をのばして、なんと僕のナイフをうばおうとするではないか。

わ。

ちょ。

咄嗟(とっさ)のことに手を引こうとすると、それよりも早く衝撃。

股間が蹴り上げられた。

股間を蹴り上げられた

割れるような痛みが睾丸（こうがん）を貫き、そのまま全身を駆けめぐる。

あまりの痛みに、体が前のめりに。

女はそんな僕を、巴投げの要領で投げ飛ばした。

世界が回転。

頭が地面に叩きつけられる。

ブラックアウト。

気絶していたのは数秒ほどだが、そのあいだに立場が逆転していた。

僕は倒れて、女は立ち上がっていた。

なんだよ。

もう終わりか。僕の時間。

女は僕を睨みつけていた。

ちぎれた片腕からは大量の血が流れ、口の端には血と吐瀉物の混じったものがこびりついて、満身創痍。にもかかわらず女は……なんという力だろう。残った片腕で僕の首をつかむと、体ごと引き起こした。

ぎ。

ぎぎ。

ぎぎぎ。

気道が絞(し)められて、ぎ。ぎ。ぎぎぎぎぎ。呼吸ができない。ぎぎ。頭がぎぎぎぎ朦朧(もうろう)となる。視界がぎぎぎ暗くなり、耳鳴りがぎぎぎぎひどい。

「ごぶっ!」

という音がして、それが自分の咽喉から出たことを知り、がっかり

した。命の危機が迫っているのに、そんなつまらない声しか出せない自分に絶望した。

「なんなの……」女は僕の首を絞め上げる。「なんなの。なんなのよ」

「ごぶううう、ぐげ、ぐぐぅ」

「ひとの腕を、こんなにして」

「ぐぶ。お、おえ。ぐぶ！」

「なんなのよ。だれなのよ」

答えたくても、こんなに絞められては声が出せない。

咽喉から蛙の合唱を流すのが関の山。

ああ……。

ここまでか。

視界がかすむ。

視界がかすむ
意識が遠くなる。
思考が曖昧になる。
僕が僕じゃなくなる。
「あんたはだれ」
「ぼ、ぼ、ぼぼ」
「名乗りなさいよ」
「僕は、僕は……」
「あんたはだれ。何者なの」
「ぼ、僕は、大槻涼彦だ！」

はっとして目を覚ますと……おや変ですね。『はっとして目を覚ます』とは、どういうことでしょう。私はずっと覚醒していたはずですが。

私はいつのまにか気をうしない、その場に倒れていたらしく、視界いっぱいに夜空が広がっていました。いったいどうしたというのでしょう。

起き上がってみると、さらに意味不明な事態が起こっていました。

周囲一帯が、切り刻まれているではありませんか。

草花も。電柱も。道路標識も。自動車も。小石まで。何もかもが切り刻まれているではありませんか。

まっぷたつに、[illegible]切断されていました。

まっぷたつに、景色が切断されていました

異常事態を前にしたとき、いくら考えたところで埒（らち）が明かないという真理は、『十神一族最大最悪の事件』で学んでいます。こういうときに推理は無意味。頭より足。

学校に戻ってみることにしました。

夜道には、あらゆるものが切り刻まれていました。虫。小枝。空き缶。自転車。ゴミ箱。その中に突っこまれたゴミ……。

すべてが等しく、まっぷたつ。

みんなで仲良く、はんぶんこ。

ものすごく嫌な予感に支配されて、気持ちがバラバラになりそうでした。平坦な道を歩いてるだけなのに、息が荒くなります。モルダウ川が運ぶ風も、夜がもたらす涼しさも、心を安定させてくれません。

私にできるのは、一歩一歩、足を進めることだけ。

私にできるのは　一歩一歩　足を進めることだけ

とうとう学校に引き返すと、絶望が拡大されていることを理解しました。

校庭に置かれたティーセットも、まっぷたつ。そこでティータイムを楽しんでいた初瀬川研究所の主任は、頭から縦にぶった切られていました。切り口は綺麗でしたが、脳や臓物がどろっと地面に落ちていて、イカ飯のようにはいきません。その近くでは、金井が死んでいました。手にした傘もふたつに分断。

被害はそれだけにとどまりません。

先ほどまでは校庭になかった大型車……ジープと呼ばれるもので

気にとまっては核心になかった死骸……シーンと呼ばれるもので

す……が、自動車工場の展示品のように中心から分割されて、そのまわりには死体というか肉片がばら撒かれていました。

チェコには合わない、日本式の学生服とセーラー服を着た死体。無残に切られた制服や、ふたつに割られた心臓や、若い枝木のように突き出た手足などが、あちこちに散らばっています。やぶれた胃袋からは、まだ消化しきっていないクッキーがこぼれていました。

いくつものバラバラ死体がころがる中、最初から死んでいる白夜様だけが、まるで生きているように無傷で、私はそれを、ちょっと不思議な光景だなと感じました。

スーッ。ススススス。スーーッ

音。

スーッ。スススス。スーーッ

快とも不快とも表現できないその音は、一定の間隔を置いてくり返されています。音がするたび、音がやむたび、なぜかかき乱されるような心地になりました。

スーッ。ススススス。スーーッ

そして気づきます。

刃物で紙を切る音。

[illegible]

こんな月夜に紙を切るなんて　気が狂っても知りませんよ
「いーつーのーことーだかー、おもいだしてごーらん……」
校庭の奥まった暗がりに、人影を見つけました。
「あんなーこーとー、こんなーこーとー、あーったーでしょう……」
人影は、手にしたナイフで本のページをススと切断しながら、
『おもいでのアルバム』の一番だけを、何度も口ずさんでいます。

おもいでのアルバム

作詞　増田とし

作曲　本田鉄麿

いつのことだか　思いだしてごらん

あんなこと　こんなこと　あったでしょう

あんなことこんなこと　あったでしょう
うれしかったこと　おもしろかったこと
いつになっても　わすれない

「見ろよ」人影が言葉を発しました。「三日月が出てるじゃねーか。こんな夜はつい一句、詠（うた）いたくなるね。『青空はブルーブラック　三日月は死の唄を書く　ペン先かいな』」

「……………」

「ひっさしぶりだな。元気そうで何よりだ。あいかわらず文章ばっか書いてんの……あ、その腕、悪かった。起き抜けで調子が出なくてさ」

見てみると、左腕の義手がなくなっていました。

関節から動かせるよう由臣が創り、赤黒い、由臣が与えた、ミトが、たし

関節を動かすための油圧が漏れ、赤黒い油で汚れていますが、そんなことより。

「どうしてここに」

私の声は、老婆（ろうば）のようにしわがれていました。

恐怖と不安と、それより少しだけ多い懐かしさで泣きそうになっているのです。

実際、あと少しで私は泣くのでしょう。

「何その質問。ドハハハハハハハハハハハハ！」人影はいきなり爆笑しました。「どうもこうもないよ。テメーならわかるだろうが」

「おまっとさんでした。元『超高校級の殺し屋』こと、働くオッサン、大槻涼彦の登場ですぞなもし！」

人影……大槻は、手にした本を放り投げます。

切り裂かれた本は、風に乗って夜の空を舞いました。

「ウ〜〜ン。いい光景じゃないの。『ペンナイフ　何時までも錆(さ)びず失くならず　その死にがほの思ひ出と共に』って感じだな。そうは思わんかね？」

「どうしてプラハに」

私は勝手に流れる涙を無視して、それをたずねました。

「何その質問パート2……ドハハハハハハハハハハハハ！　だから、さ、どうもこうもないって。依頼人(クライアント)のためなら、どんな場所だろうと殺しに行くさ。東京タワーのてっぺんでも、エベレストのてっぺんでも」

「そうじゃなくて……」

ーわーってますよ。『世界征服宣言』から五時間くらいしか経ってないんだから、どんなに急いで出発しても、オレはまだ機上のひとじゃなければおかしいって話だろ？　でもそんなのはね、シロートさんの意見なんだな」

「最初から、プラハにいたの？」

「正解。ほらオレ、元『超高校級の殺し屋』じゃん？　だから依頼（オーダー）がくるより先に、標的（ターゲット）がわかっちゃうんだ」

「何それ。理由になってない」

「なるんだよ。『超高校級の御曹司』が人工衛星を所有するのに、『超高校級の格闘家』が縮地を使うのに、理由がいるか？　この世界はな、りっぱな名前さえありゃ、それで問題ないんだよ。テメーが『超高校級の書記』であるなら、それくらいわかるはずだけど……。

納得いかない顔してるな。ほんじゃ今から、オレのステータスを紹介してやりましょう。ステータス画面を開いてやりましょう。ドハハハハハハハハハ！」

12

ボルヘス＝履歴参照

＃２７１１９５０５

タイトル『彼の者のスペック』

なまえ　大槻涼彦

しょくぎょう　殺し屋

1

LV 9

HP 78

MP 0

つかえるとくぎ

・いてつくはどう（全魔法無効化）

・はやぶさ斬り（二回攻撃できる）

・パリイ（相手攻撃を受け流す）

・アバンストラッシュ（『ダイの大冒険』を参照）

・まちぶせ（元『超高校級の殺し屋』の嗅覚により、依頼（オーダー）がくる前に、だれが標的（ターゲット）なのかを知ることができる能力。その後、自分の人格を、モグラが穴にもぐるように封印させ、標的（ターゲット）に接近できる動機や縁を持ったキャラクターをプロファイリングしたものを演じ、それにより標的（ターゲット）に近づき、確実に暗殺する。標的（ターゲット）に接近する

ためならば、メタ視点を持つ者……読者さえだますのも厭わない）

13

「ってわけで、オレは日本じゃなくてチェコにいましたとさ！　頭がボンクラで目がフシアナのテメーらが気づかなかっただけで、オレは最初から自分の才能を百パーセント発揮していましたとさ！　次の標的（ターゲット）が白夜クンってことに気づいたオレは、白夜クンがチェコに発つよりも早く、チェスキー・ラーイっていう自然豊かな地方に前乗りして、人格をチェンジさせて、ひきこもってたわけですな。これが真相。ドハハハハハハハハハハハハハハ！」

　大槻は高らかに笑うと、必要もないのにステップを踏みました。ス

タタタタタン。

「ぐぅ、ぐううう……」

声。

車のパーツと人間の臓器を押しのけて、学生服姿の少年が這い出てきます。

「あ、切り忘れ。覚醒直後は頭がぼやけて仕事になりゃせんな」

大槻がナイフをふり上げました。

「ど、ど、どういうことなのだ」

「あはーごめんチャイ。別人格中のときの記憶って、すぐ忘れちゃうの。どんなに強烈なインパクトがあってもさ、目が覚めたら夢って忘れるだろ？　ってわけでバイチャ。オレの夢の住人よ」

「あなたが……『規格外』だったとは」少年の声は震えていました。

「僕たちがあの町で密室を作っている最中、仲間が殺されたという報告が入ったが、あなただったか……」

「ん～。記憶にないけど、あらかじめ設定した人物と会話するときと、生命の危機が迫ったときは、自動的に人格が戻るようになってるんだよね……ドハハハハハハハハハハハハハハ！」

「何が、おかしいのだ」

「いや何。思い出し笑いですよ」大槻はふたたびステップを踏みます。「テメーはたしか、希望ヶ峰学園の付属校だったな。ねーねー今どんな気分？　さんざん貶(けな)したオッサンが、元『超高校級の殺し屋』だったことを知って今どんな気分？」

「……………」

ーオレはオッサンだけど、才能に満ちあふれたオッサンだったのでーす」

「…………」

「言葉もありませんってか。ケッコーケッコー。あのときのオレ、っていうか『僕』という存在は、ぜんぶ嘘っぱち。もっともらしく聞こえた『僕』の苦悩や鬱屈は、オレが三分くらいで考えたインスタントなものにすぎなかったわけ。『僕』にイラついたやつも、『僕』に同情したやつも、『僕』に注意したやつも、『僕』に注文つけたやつも、ハ〜イご苦労様。お疲れちゃーん。楽しかったぁ？　それより自分の人生をがんばれっつ〜の。ドハハハハハハハハハ！」

「……アイドルは」

「ん？」

「アイドルは、どうするね」

「あいつさ、失恋旅行って云ってたけど、あれ嘘だと思うぜ」
「よかった……忘れてないようなのだ」
「関係ないよ〜ん」

大槻がナイフをふり下ろすと、少年の体はよくできた手品のように、まっぷたつに切断されました。
「どっちにせよ殺すから、関係ないよ〜ん」
そう云うと、ジープを蹴飛ばします。
荷台からころがり落ちてきたのは、かわいらしい女の子でした。
その子は腹部を怪我していまして、眠っているというより死体に近い存在に見えましたが、それでも生きています。
大槻は女の子を見下ろしたまま、ふたたびナイフをふり上げまし

た。
「待って！」
私は叫びます。
ほかにどうすればいいでしょう。
「待ったよ」大槻が律儀に云いました。「で、どうするの」
「どうもこうも、まだ生きてるんだから殺すことないでしょ」
「それ、すっごい変な言葉……。自分で気づいてる？　そこに」
「私のことはいい。私の言葉のことも」

「ドハハハ。それで書記だもんね」大槻は片方の目を細くします。
「いいかね。スーパー基本的な話をするけど、オレは元『超高校級の殺し屋』だ。アタマに『元』ってついてはいるけど、やってることは

ずっといっしょ。ずっとずっと殺し屋」

「それが何」

「オレは希望ヶ峰学園を卒業したあとも、こうして殺してばかりいる。殺し屋としての才能が満ちあふれている以上、刃物を上手にあつかえるからといって、料理人や美容師にゃ転職できんのだ。才能にしばられたオレたちは、才能の中で生きるしかない」

「私は……」

「テメーも同じだろ。オレのかわいい妹さんよお」大槻が云います。

「『超高校級の書記』として、テメーは生きるしかない。そうだろ、『青インク』よお。そうだろ、十神忍（しのぶ）よお！　十神白夜のお姉ちゃんよお！」

「云いたいことはそれだけか？」

15

白夜様が立っていました。

月明かりに照らされた髪が夜の中でも主張し、青い瞳も圧倒的すぎる自信でほとんど発光し、白夜様そのものが輝いているようでした。

白夜様は眼鏡を押し上げ、周囲に広がる地獄をざっと観察しました。そしてつまらなそうに息を吐き、やはりつまらなそうに肩をすくめます。主役不在によるエントロピー増大に、ずいぶんとお冠のようです。

いや。
っていうか。
「びびびびゃびゃびゃびゃびゃびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびび白夜様⁉」
「気持ち悪いぞ。腐川の真似か？」
「びびびびびびびびび白夜様。で、でも死んだはずでは……」
「気づいていなかったのか。なんのためにボルヘスをあたえたと思っている。十神は死なぬ。それだけだ」
白夜様は自分の首に爪を立て、べりっと皮膚を剝ぎ取りました。するともう一枚の皮膚が出てきまして、投げ捨てたフェイクの皮には小袋がついていました。
「構造は『聖者の咽喉（コーラ・デ・プレーテ）』と似たようなものだ。自白剤など飲むもの

か」
「それでは」
「初瀬川研究所の連中には何も話していない。『十神一族の繁栄の秘密』も、『十神一族最大最悪の事件』も、世間に公開する必要はないからな」
「白夜様！」
私は白夜様に抱きつこうと、乙女のように駆け寄りました。
「泣いていたのか」
「……あ」
罪悪感にやられ、速度が低下。
「救助にきたのだとすれば、遅すぎるぞ」
「も、もうしわけありません」

「フン。まがってしまった」白夜様が眼鏡を放り投げます。「替えをよこせ」

「ただちに……」

私はすぐに替えの眼鏡を取り出しました。

「それでどうするんだ」

「はい？」

「救助にきたんだろう？　このあとどうするのかを聞いている」

「それは、あの」

「俺の許可なく云いよどむな」

「もうしわけありません。脱出プランは白紙です」

「フン。書記が白紙とは職務怠慢だな」

チャッチャッチャッチャッ。

金属をこすり合わせる音。

大槻はいつのまにか、二本のククリナイフを手にしていました。

「やっほー白夜クン。いつまでも起きないから、狸寝入りで逃げ切るつもりかと思っちゃったぜ。ドハハハハハハハハ！」まずは一笑い。「おっと。オレの得物がナイフだからって、武器でキャラ立ってないからって、そんな顔しないでおくれよ。この世には、ハサミとかホッチキスとか、文房具みたいなもので戦うやつがいるけどさ、オレは小学生じゃないんでね！ 被選挙権もあるんでね！」そう云って、ナイフの刃を舐めるというベタな行動（たぶん、わざとでしょう）をとりました。「オレの同業者に、元『超高校級のロッククライマー』ってやつがいたんだけど、そいつの武器なんだったと思う？指だぜ指。そーゆーベタはまた違うっしょ。もし『超高校級の按摩』が殺し屋になったらキャラがカブるっしょ。ナイフがやっぱ最強っし

ょ。つーかこれからっしょ」
「俺が不在のあいだに……世界は混乱のきわみに達したようだな」白夜様は眼鏡をかけ直しました。「『世界の選択を選択する会』は崩壊し、未だに俺のニセモノは倒せず、学園の生徒は暗躍し、初瀬川研究所が参入し、だれもが件を求め、そして大規、貴様が出てきた」
「ドハハハ。べつにいいじゃない。上巻で全部が解決したら逆にこまるじゃない」

「これは『絶望小説』か」白夜様は足もとに落ちた紙切れを拾い上げました。「なぜこんなところに」
「あーそれ？　オレが殺したガキどもが持ってたよ。たしか希望ヶ峰学園が関係してたとか……あーんー、忘れちゃったよ〜ん」

「『絶望小説』が蔓延し、『絶望病』も拡大している。何もかもが絶望に向かっている」白夜様は紙切れを破り捨てます。「末期症状を帯びた世界を、この俺が統治してやらんとな。この俺が管理してやらんとな」

「この俺が世界征服してやらんとな」

▼世界征服する

世界征服しない

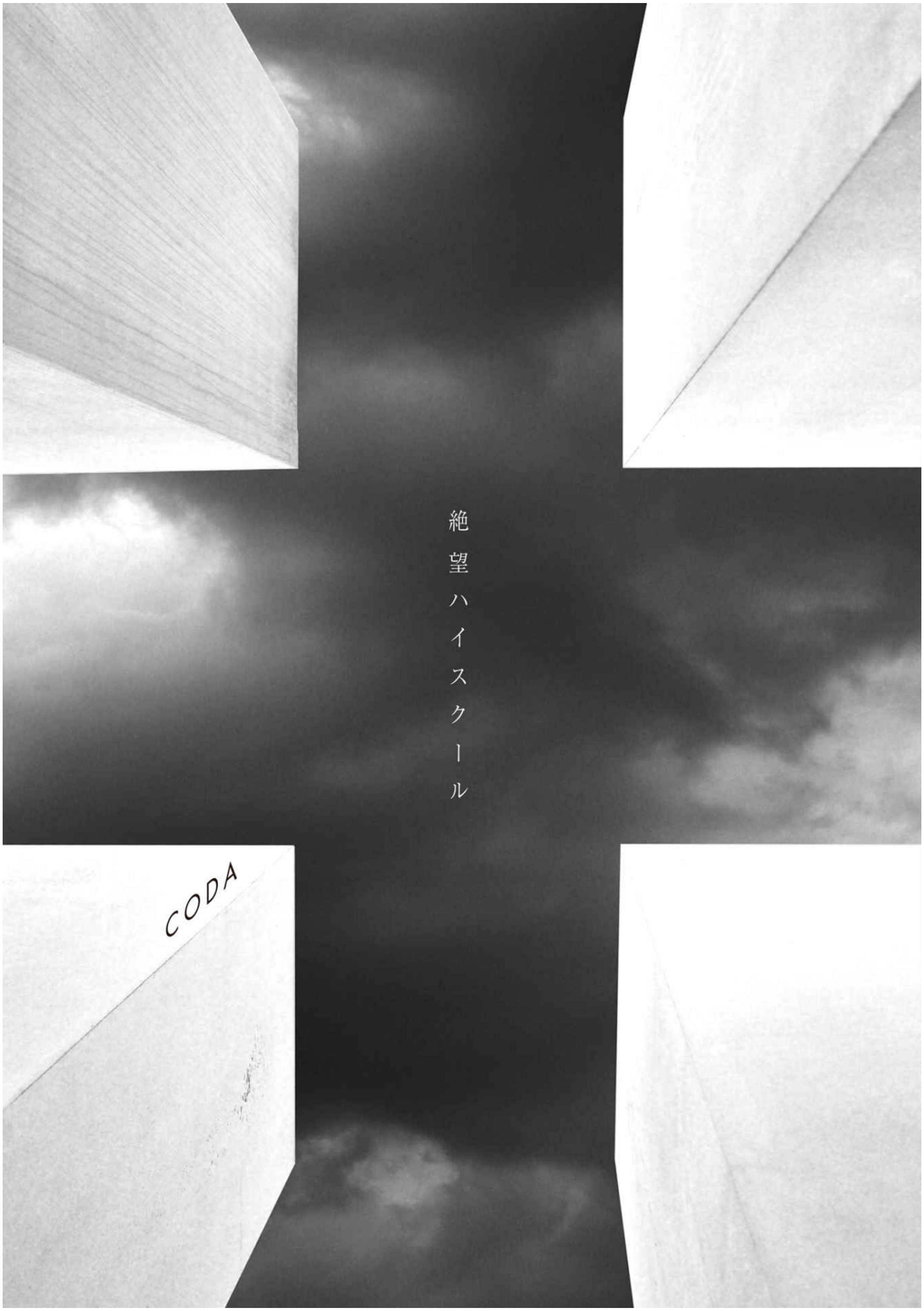
世界征服に興味のなかった白夜様が、選択肢を変えた。

それは事件でした。

それは展開でした。
それは革命でした。
それは至福でした。
至福？
だれにとってのｌ。
そう。私の至福。
白夜様が支配する世界を、私は夢想していました。白夜様がルールの世界を、私は希望していました。
あの日からずっと。
「ドハハハ。世界征服かい。いいねえ。子供の夢は大きなほうがいいからねえ」ナイフを構えた大槻が、ずんずんと大股で迫ってきました。「そして、子供の夢を潰すのが大人の仕事さ。ドハハハハハハハハ

ハ！」
「下がっていろ」
白夜様は云うと、大槻に向かって歩いていきます。
私は遠ざかる背中にかける言葉を見つけられないまま、ぶつかろうとするふたりの男をただ見つめていました。
「白夜クン、間合いは静かに詰めにゃ」
「フン。貴様に同じことを云ってやる」
「逃げなくていいのかね」大槻がナイフをふり上げます。「力の差は歴然だよ〜ん。次のページじゃ殺されてるよ〜ん」
「俺は負けん。十神の名にかけて」
そうです。
負けるはずがありません。

絶対に。
原理的に。
あのときも、今回も、これからも、勝つ。勝って勝って勝ちつづける。
白夜様は神様です。



絶望ハイスクール
CODA

※

キーンコーンカーンコーン

キーンコーンカーンコーン

キーンコーンカーンコーン

キーンコーンカーンコーン

午前零時をむかえると、チャイムが鳴りました。

次の瞬間、島全体がはげしく揺れたかと思うと、学校の壁に亀裂が走り、弾けました。

私は自分の頭を疑います。

というのも、くずれた壁の奥から、白と黒に塗り分けられた建物が現れたからです。左右に設置された巨大ライトは目のようにも見えま

した。
パンダ？
クマ？
どちらにしても臆面(おくめん)もない非常識に、シュールすぎる光景に、言葉を喪失します。こんなもの、どうやって『白夜行』に書けばいいというのでしょうか。
「なんじゃこりゃ」大槻はふり上げたナイフのことも忘れ、唐突に出現した建物を見上げていました。「茨城のラブホよりセンス悪いなあ。っていうか、こんなに風呂敷を広げて大丈夫なのかね。人類は『劇場版SPEC』から何も学んでないのかね」
そんな映画だれも観てないとツッコミを入れようとしたとき、不意

に服を引っぱられます。
「えっ？」
つづいて重力のバランスが壊れたように、
「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ？」
私は空を飛びました。
地面がグングンと離れ、白夜様と大槻の姿が小さくなり、月が急接近。
こんなにも間近で月を見たのは、人生ではじめて。
綺麗。
なんて、うっとりしている場合ではありません。
体がこんどは建物の屋上へと引っぱられ、私はそのままお尻から落下しました。

「ソニアさん、回収完了っス！」

顔を上げると、見慣れない服を着た左右田さんが、釣竿（つりざお）のオバケみたいな機械を操作しながら、「よっ」と挨拶しました。

廊下ですれ違ったときのように、ごく普通の挨拶。

「ごきげんよう、『青インク』さん。いえ、十神忍さん」

屋上には、やはり見慣れない服を着たソニア王女もいて、強風に髪をあおられながら、困惑する私の前に立っています。

「ソニアさん、あの、一体……」

「いかがですか、制服」

「せ、征服？　制服？」

「希望ヶ峰学園の制服はおそろしくクソダサイものでしたが、ここの制服は、わたくしの専属デザイナーに作らせたので、とてもシャレオツですよ。いかがですか？　絶望の雰囲気が出ていますか？」

「絶望？」

「絶望ハイスクール、開校です！」

ソニア王女が大声で宣言すると、ふたたび島が揺れました。

校庭は子供が蹴散らした砂場のように乱れて、土煙が一面に広がり、白夜様と大槻の姿が見えなくなります。

やがて、校庭に残ったふたりを拒絶するように現れたのは、校門。

「何これ……」私はソニア王女に説明を求めます。「ねえ、なんなの。ソニアさん何してるのずっと。意味がわかんない！」

「わたくし、デューダしました」

「はい？」

「つづいて校歌斉唱です！」
その言葉と同時に、ソニア王女の背後にふたりの少女が出現しました。左右田さんも駆け寄ってくると、四人は私を背にして横一列にならびます。まるで自分たちを世界に見せつけるように。
ほどなくして屋上のスピーカーから、あの有名な『ラジオ体操の歌』のメロディが大音量で流れはじめました。
私の困惑をよそに、四人は『校歌』と称した替え歌を、高らかに歌い上げます。

新しい夜が来た　絶望の夜だ
喜びに胸を開け　絶望あおげ
絶望の声に　健やかな胸を

この香る風に　開けよ
それ　絶望　絶望だ！

新しい夜のもと　輝く絶望
さわやかに手足伸ばせ　土踏みしめよ
絶望とともに　健やかな手足
この広い土に伸ばせよ
それ　絶望　絶望だ！

「わたくしは『絶望高校級の王女』こと、ソニア・ネヴァーマインド」

「オレは『絶望高校級のメカニック』こと、左右田和一」

「私は『絶望高校級のブラコン』こと、鏡佐奈（かがみさな）」
「……私は『絶望高校級の二重人格』こと、鏡那緒美（かがみなおみ）」
四人の自己紹介が終わり、スピーカーから流れるのはあの声。
「そして俺は『絶望高校級の御曹司』こと、十神白夜」
「出てきなさい！」私はスピーカーに向けて叫びました。「これはどういうことなの」
「貴様は人質だよ、十神忍」
「あなたが『超高校級の詐欺師』ってことはバレている。もう詐欺師（トリックスター）なんかじゃない。ただのピエロだ」
「ピエロというなら最初からそうさ。それにまだ、俺の正体を見抜いたわけではないだろう？」

かれはてはないだろう」
「姿を見せて」
「……きみは見ないほうがいい」ニセモノはそう云うと、地上にいる白夜様に言葉を放ちました。「聞こえているだろ。貴様の大切な姉と、大切な過去は、こちらであずかっている。返してほしければ取りにこいよ、本物サン」
私は絶望の中で、ボルヘスを起動させます。
拡大表示された白夜様は、余裕の表情を浮かべていました。
自分が敗北することなど一度も考えたことのなさそうな、圧倒的に余裕の表情。
そうです。
負けるはずがありません。
絶対に。

原理的に。
白夜様は神様です。
余裕？
神様？
違う。
嘘だ。
そんなんじゃない。
がんばってるだけ。

むりしているだけ。
あの子は、とても弱い子。
あの子は、とても優しい子。
私のことはいいから、逃げて。

みんな狂ってる。
校門の扉が開かれました。

（上巻了）


星海社 FICTIONS
サ2-02
ダンガンロンパ十神
上
世界征服未遂常習犯
佐藤友哉
星海社
「これは『世界征服宣言』だ。
今から二十四時間以内に俺を殺すか、
この世のどこかにいる
『かわいそうな牛』を見つけ出せ」
己の偽者が放った『世界征服宣言』により、
すべての権力を奪われ、"世界の敵"となった
超高校級の御曹司・十神白夜を次々に襲う、
"超高校級"の刺客たち。
一方、不気味な広まりをみせる
謎の「絶望小説」によって、
世界そのものも混乱の極みに達していた……！
『ダンガンロンパ』×三島由紀夫賞作家！
佐藤友哉による最高傑作、いざ開幕！
佐藤友哉 yuya sato
1980年生まれ。
2001年『フリッカー式　鏡公彦にうってつけの殺人』（講談社ノベルス）で第21回メフィスト賞を受賞しデビューする。
2007年『1000の小説とバックベアード』（新潮社）で三島由紀夫賞を最年少で受賞。近年では純文学をメインフィールドとして活躍している。『星の海にむけての夜想曲』（星海社）、『ベッドサイド・マーダーケース』（新潮社）など著作多数。
高河ゆん yun kouga
1965年生まれ。漫画家・イラストレーター。
代表作に『LOVELESS』（一迅社）、『アーシアン』（集英社）などがある。漫画家としての活動のみならず、『悪魔のリドル』（KADOKAWA）の原作（作画：南方純）や、『機動戦士ガンダム00』、『UN-GO』のキャラクターデザイン、『うーさーのその日暮らし 夢幻編』の脚本を手掛けるなど、様々な方面で活躍。2015年に画業30周年を迎えた。


これから本気であることを証明しよう。
十神の名にかけて。
星海社FICTIONS
yuya sato
佐藤友哉
Illustration 高河ゆん
ダンガンロンパ
DANGANRONPA
TOGAMI
十神
上
世界征服未遂常習犯
星海社 FICTIONS
サ2-02
佐藤友哉
星海社


星海社 FICTIONS
サ2-02
ダンガンロンパ
十神
佐藤友哉
星海社
「これは『世界征服宣言』だ。
今から二十四時間以内に俺を殺すか、
この世のどこかにいる
『かわいそうな牛』を見つけ出せ」
己の偽者が放った『世界征服宣言』により、
すべての権力を奪われ、"世界の敵"となった
超高校級の御曹司・十神白夜を次々に襲う、
"超高校級"の刺客たち。
一方、不気味な広まりをみせる
謎の「絶望小説」によって、
世界そのものも混乱の極みに達していた……!
『ダンガンロンパ』×三島由紀夫賞作家!
佐藤友哉による最高傑作、いざ開幕!
佐藤友哉 yuya sato
1980年生まれ。
2001年「フリッカー式 鏡公彦にうってつけの殺人」(講談社ノベルス)で第21回メフィスト賞を受賞しデビューする。
2007年『1000の小説とバックベアード』(新潮社)で三島由紀夫賞を最年少で受賞。近年では純文学をメインフィールドとして活躍している。『星の海にむけての夜想曲』(星海社)、『ベッドサイド・マーダーケース』(新潮社)など著作多数。
高河ゆん yun kouga
1965年生まれ。漫画家・イラストレーター。
代表作に『LOVELESS』(一迅社)、『アーシアン』(集英社)などがある。漫画家としての活動のみならず、『悪魔のリドル』(KADOKAWA)の原作(作画:南方純)や、『機動戦士ガンダム00』、『UN-GO』のキャラクターデザイン、『うー さーのその日暮らし 夢幻編』の脚本を手掛けるなど、様々な方面で活躍。2015年に画業30周年を迎えた。
ファン必読の"星海社FICTIONS×『ダンガンロンパ』"シリーズ!
ダンガンロンパ/ゼロ
小高和剛
ダンガンロンパ霧切
北山猛邦
ダンガンロンパ十神
佐藤友哉
サ2-02

SEIKAISHA



Visual Gallery / ビジュアル・ギャラリー

この物語はフィクションです。実在の人物・団体・出来事などとは一切関係ありません。

収録されている内容は、作品の執筆年代・執筆された状況を考慮し、初版発売当時のまま掲載しています。

Illustration　高河ゆん

ブックデザイン　Veia

編集担当　太田克史
編集副担当　岡村邦寛・大里耕平

フォントディレクター　紺野慎一
電子書籍ディレクター　松島 智
オペレーションチーム　阿万 愛＋三本絵理

校閲　鷗来堂

フォント制作協力　字游工房＋リアルタイプ＋凸版印刷

制作協力　新藤慶昌堂

本作品は、2015年11月、小社より星海社FICTIONSとして刊行されたものをe-FICTIONSとして電子書籍化したものです。
e-FICTIONSでは、訂正部分や図版点数などが異なる場合があります。

ご利用の端末によっては、リンク機能が制限され正しく動作しない場合があります。また、リンク先のWebサイト、メールアドレス、電話番号は、事前のご連絡なく削除あるいは変更されることもございます。ご了承ください。

JASRAC 出 9018729001Y43128

ダンガンロンパ十神（上）世界征服未遂常習犯

2020年10月1日発行（01）

著　者　佐藤友哉

発行者　太田克史

発行所　株式会社星海社
〒112-0013
東京都文京区音羽1-17-14
音羽YKビル4F
https://www.seikaisha.co.jp

発売元　株式会社講談社
〒112-8001
東京都文京区音羽2-12-21
https://www.kodansha.co.jp